その少年はマサル

嶋　雄一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その少年はマサル

【Ｎコード】
Ｎ１３８６Ｘ

【作者名】
嶋　雄一

【あらすじ】
中瀬将は空手の試合で失神ＫＯされ、その時から幽体離脱が出来るようになった。幽体離脱した意識体の将は、人の意識の中に人生の修行計画が書かれたソール・ノートがあることを発見し、さらに魂が住むソール・ワールドへも自由に行き来できるようになった。人生の修行計画が書かれたソウル・ノート。その神秘のパワーが奇跡を起こす。

第1章　ソウル・ノート

「マサルくん。絶対優勝だよ！　頑張ってね」
「任せといて！　彩ちゃんに優勝カップをプレゼントするよ。約束だ」
彩子の言葉に将は楽勝ムードで、試合場へ向かった。
バシッ！　っと聞こえた。あるいは、パシッ！　パンッ！　と聞こえたかもしれない。それは相手選手の放った右の回し蹴りが、将の左即頭部に当たった音だ。優勝候補の筆頭に上げられていた中瀬将は、はるか格下の相手の放った回し蹴りを、まともに受けてしまったのだ。　対戦中に将は、格下の相手ということに油断してしまい、一瞬ガールフレンドの安田彩子のほうに視線が行ってしまった。偶然にも相手の放った蹴りが、その瞬間と一致したのだ。
幸いにも将は反射的に左腕でカバーしたため、蹴りの威力は落ちていたが、それでも失神ＫＯ負けをしてしまった。まさに油断大敵を絵にかいたような試合だった。
救急車で病院に運ばれた将は、気を失ったままＣＴ検査を受けた。医者の診断は脳震盪を起こしているだけで、時機に良くなると言った。この失神が今後の将の運命を大きく変えることになるとは、母親の直美やガールフレンドの彩子はもとより、将本人すら気づくことはなかった。

中学校の卒業式も終わり、暦は三月半ばになっていた。将は高校入学を待つだけで、気分的に楽な毎日を過ごしている。将が通う空手の道場では、今日も激しい練習が行われていた。将は小学校一年生からこの道場で空手を始め、すでに九年間通っている。
男は強くないといけないという父の考えから、最初は無理やりに行かされたのだが、通っているうちに面白くなり自分からのめりこんでしまった。生まれつき運動神経のいい将は、メキメキと上達して

いった。小さい頃は病弱だったが、空手を習い始めてからはカゼも引かなくなるほど丈夫になった。

明日の空手の試合に向けて、将は今日も道場で練習をしていた。将の体格は身長百七十二センチ、体重六十五キロ、空手で鍛えた身体はまったく贅肉がない。実力的には館長よりもかなり劣るが、自分では二段以上の実力だと思っている。というのは、将は段位を取っていない。その理由は、柔道にしても空手にしても、格闘技の有段者が喧嘩をした場合、凶器を持っているのと同じ扱いを受けるからだ。

ケンカのために空手を習っているわけではないが、段位を取るのが目的ではなく段位に執着もないので、あえて段位は取っていない。小中学校では、将が空手をやっているというのは皆が知っていた。このため将にケンカを仕掛けるものはいない。逆にイジメの現場を見つけると、弱い者の味方になっていた。そんな将はクラスでも人気者だ。そんな矢先の試合場でのアクシデントだった。

彩子と将は小さいころからの幼馴染だ。彩子は小学校の頃から頭が良く、成績は常にトップクラスだ。それは中学校でも変わらない。明るい性格で礼儀正しくて良く気が利き、中学生には思えないほど気配り上手だ。きっと親が厳しく躾けているのだろうと直美は思っている。そんな彩子が将のガールフレンドというのが嬉しい。

入院してから三日経っても将の意識は戻らず、医者からは植物人間になるかもしれないと宣告された。直美と父親の将晴は嘆いたが、不思議なことに将の意識は、ベッドの上から両親と寝ている自分を見ていた。

六日が過ぎ七日目になったとき将の目が開いた。背伸びをしようとした将は、腕に点滴用の針が刺さっているのに気づき、ナースコールで看護婦を呼んだ。

「良かったあ！　将くん気がついたのね！　どこか痛いところとか、気分が悪いとかはない？」

看護婦に点滴を外してもらい大きく背伸びをした将は、良く寝たという表情でベッドから起き上がった。時計を見てみると午前十時半を指している。

「大丈夫です。あぁ、良く寝た。気分爽快です。こんなにグッスリ寝たのは初めてです」

「それはそうよ。だって一週間も寝てたんだから」

「もう帰ってもいいですか？」

「主治医の先生に聞いてみるけど、その前にお母さんに電話したら？　ものすごく心配してたわよ」

「あぁ、知ってます。見てたから」

そう言いながらベッドから出て立ち上がると、首を左右に動かしてみた。コキ、コキと関節が音を立てた。

「またぁ、意識が無かったのに見れるわけ無いでしょう。下手な冗談ね」

母親の直美は病室へ入ってくるなり、将をしっかりと抱きしめると涙ぐんだ。将には直美の気持ちが痛いほど分かるが、目頭が熱くなるのを我慢して照れ隠しのように言った。

「お母さん、恥ずかしいから止めてよ。それより、早く家に帰ろうよ」

「そうね・・。お腹空いてるでしょう？　何が食べたい？」

直美は運転するクルマの中で、皆がどんなに心配していたかを将に話した。

「お母さん、言わなくても知ってるよ。彩ちゃんが自分のせいだと言って泣いてたのも、お母さんが油断大敵だと言ったのも知ってるよ」

「えっ？　どうして知ってるの？　看護婦さんに聞いたの？」

「気を失っている間、意識がベッドの上のほうにあって、お母さんと俺と彩ちゃんを見下ろすような感じで見てたんだ。自分で自分の寝ている姿を見るっていうのは、何だか変な感じだったよ」

直美は将の言葉に、背筋が寒くなる想いがした。

「人は死ぬときに魂が抜けて、自分の姿や悲しんでいる人たちの姿を見るって言うのを聞いたことがあるんだけど、もしかしたらあんたは死ぬ寸前じゃなかったの？」

「いや、死んだことがないから分からないけど、そんな大げさな感じじゃなくて、疲れて寝ているときに、魂だけが目が覚めて抜け出たっていう感じだったよ。だから疲れが取れたら目が覚めると思ってた」

「魂が抜け出たときに、あの世には行かなかったの？　死んで生き返ったという人の話だと、魂が抜け出たときに光が迎えに来て一緒にあの世に行ったけど、また戻ってきたら生き返ったというようなことを、何かの本で読んだ記憶があるんだけど」

1―2

話しているうちにクルマは自宅へと到着した。将は彩子が心配しているだろうと思い電話をかけた。三十分後に彩子が将の自宅へやってくると、将は入院してた時に体験したことを話し始めた。

「実は俺が気を失っている間、肉体的には眠っている状態だったんだけど、別の自分は起きていて皆のことを見ていたんだ。これはさっきクルマの中で、お母さんに言ったことだけど」

「それってどういうこと？」

彩子が不思議そうな顔をして尋ねた。

「幽体離脱って聞いたことある？」

「眠っているときに、魂が肉体から抜け出るってことでしょう？私は信じないけど」

「彩ちゃんはそう思ってるかもしれないけど、俺が経験したのはまさに幽体離脱だったんだ。俺の身体から抜け出た俺は、ちょっと分かりにくいかもしれないけど、意識だけが抜け出たって感じ。言うなれば、頭の部分だけが離れてたって感じかな。その頭の部分が天井のあたりにあって、二人をずっと見てたんだ。だから二人が話していたことは全部覚えてるよ」

「それともうひとつ驚いたのは、抜け出た意識は別の世界へ行くことが出来るんだ。実際にその世界へ行ってきたよ」

将は気を失っていたときに体験した、不思議な出来事を続けて話した。意識を失っている間、将はこの世ではないところに行っていた。そこは言葉で会話するのではなく、頭で考えるだけで自分の考えが相手に通じた。欲しいものは思うだけで目の前に現れた。思うだけで物が動いた。そこにいる相手の顔は分からない。人の形をした光のようなもので、その光の色も輝き度もそれぞれ違っていた。

意識を失くしている間、自分は夢を見ているんだと思っていたが、これは決して夢ではないという確信みたいなものがあった。夢の中でそんなことを思っているうちに気がついたら、病院のベッドに寝かされていた。そのとき幽体離脱をして、二人を見ていたのだ。話を聞き終えた彩子が尋ねた。

「マサルくん、その世界って、神様が居たの？」

「分からない。人の形をした光るもの、あれは魂なのかどうか分からないけど、光る人間はたくさんいたよ。神様らしき人はいなかった」

「将、そこにはどれぐらいの時間居たの？」

今度は母親の直美が尋ねた。

「その世界では時間の感覚がまったくないんだ。言葉ではうまく説明できないけど。あえて言うなら、気絶した瞬間から病院のベッドに寝かされるまでの間かな」

二人は将の話を聞きながら、人は死んだ後も別の世界で生きるんだということが、本当のことのように思えてきた。その後、彩子と雑談をしているうちに、時計の針は午後四時を指していた。

「マサルくん、私帰るわ。また会おうね」

「うん、気をつけてな。また電話するよ」

彩子が帰るのを見送った将は、リビングのソファーに座ってテレビを点けた。暖房が気持ちよく、テレビの音も子守唄に聞こえ始め、うとうとし始めた。眠りにつき始めたころ、将は自分の頭だけが身体から離れる感じがした。幽体離脱か！　そう思った瞬間、将は自分の頭上から、テレビを見ながら眠っている自分の姿を見ていた。

意識だけの将は二度目の幽体離脱とあって、一回目よりは落ち着いていた。

しばらく自分の姿を眺めていた後、テレビでやっているドラマを見ることにした。一時間ドラマの再放送だ。ちょうどドラマが終わっ

たときに直美がやってきて将の肩を叩いた。

「将、こんなところで寝てるとカゼ引くわよ。起きなさい」

それに合わせたかのように意識体の将は、自分の肉体へと戻った。

「テレビ見てなかったでしょう。あなたの好きな連続ドラマだったのに。再放送だったから、もうやらないわよ」

「身体は眠ってたけど、幽体離脱して見てたよ」

「本当に？　じゃあ内容を言ってみてよ」

将はおもむろにドラマの内容を話し始めた。幽体離脱したときのことを、完璧に覚えていたのだ。将が途中まで話したところで直美が制止した。全身に鳥肌が立っていた。

「あなた本当に見てたのね。自分で意識して幽体離脱したの？」

「違うよ。テレビを見てたらうとうとし始めたんだ。そしたら意識がス～っと抜けるような感じがして、天井のあたりから自分の姿を見てたんだ。俺の肉体は眠ってたから起こすのは可哀想だと思って、意識だけでテレビを見てたんだ」

直美は、将の幽体離脱は今後も続くだろうと思う反面、これが将の運命を大きく変えるのではないかという気がした。

1―3

翌日彩子と一緒に幽体離脱の実験をすることにしていた将は、彩子の自宅へ向かった。彼女の部屋に入った二人は、早速、幽体離脱の準備に取り掛かった。彩子の部屋は、ぬいぐるみや可愛いグッズが綺麗に並べられ、壁にはジャニーズ系の歌手のポスターが貼られている。その中に混じって、空手着姿の将の写真が一枚貼ってある。将は彩子の部屋へは何度も来ていた。

「椅子に座ったほうがいい？　それともベッドで横になったほうがいい？」

「ベッドのほうが眠りに就きやすいから、ベッドに横になるよ」

将は言うなりベッドに横になると目を閉じた。五分ぐらいでうとうとし始めた。隣では彩子が緊張した表情で、じっと将を見つめている。睡魔に襲われながら、将は離脱の瞬間を待った。眠いのだが意識は冴えている。相反する感覚だ。肉体は眠りに就いたが、意識だけが肉体から離れた。幽体離脱したのだ。

天井のあたりから、寝ている自分と彩子を見ていた意識体の将は、離脱したことを彩子に知らせる術を考えていなかった。彩子の目の前で手を振ってみたが気づかない。大声で叫んだが聞こえていない。肩を叩いたが、物理的な肉体ではないので、彩子が感じることはない。

「そうだ！　彩ちゃんの意識の中に入ればいいんだ」

将は彩子の額に手を伸ばすと、そのまま潜り込んでしまった。彩子の意識の中に潜り込んだ将は、そこでガラスのような透明な板に書かれた文字のようなものを発見した。見たこともない文字だが、将には何故か書いてある意味が理解できた。頭の中というか、自分

の意識に違和感を感じた彩子が声に出した。

「マサルくん。私の頭の中に居るのね？」

「そうだよ。離脱して、彩ちゃんの意識に潜り込んだんだ。離脱したことを知らせるには、こうするしか仕方がなかったんだ」

「分かったわ。じゃあ今から何か実験する？」

「ちょっと彩ちゃんの頭の中を調べてから、元に戻るとするよ」

「いやだぁぁ　変なところ調べないでよ。裸を見られるより恥ずかしいわ」

「大丈夫だよ。ちょっと気になるものを見つけたので、それを調べるだけだから。決して変なものじゃないから」

「分かった。後でその気になるものを教えてね」

ガラスの板のようなものに書かれた文字を読んだ将は、彩子の意識から抜けると寝ている自分の肉体へ戻った。目を開けて大きくアクビをした将は起き上がると、机の上の時計を見てみた。眠りに就いてから十五分が経っていた。複雑な表情で考え込んでいる将を見て、彩子が心配そうに声をかけた。

「どうしたの？　身体の具合でも悪いの？」

「いやそうじゃないんだ。彩ちゃんの意識に潜り込んだとき、大変なものを発見したんだ・・」

言うのをためらっている将に、彩子は不安を感じていた。もしかしたら、自分の身の上に悪いことが起きるのではないかと。彩子はその想いを恐る恐る口に出してみた。

「もしかしたら・・、私の脳に腫瘍か何かあったの？」

顔の前で大きく右手を振りながら、将は明るい声で言った。

「違うよ。そんな腫瘍とか癌とかじゃないよ。意識体の俺は頭の中に入ると物理的なものは見えないんだ。彩ちゃんの意識を感じるだけなんだ。病気とかじゃないから心配しないでいいよ」

「良かった。マサルくんが難しい顔してるから、心配しちゃった。

それで一体何を発見したの？」
「実は彩ちゃんの人生に起きることが書いてある、ガラスの板というかノートみたいなものを発見したんだ。見たことのない文字が書いてあったんだけど、不思議と書いてある意味が理解できたんだ」
「ということは、マサルくんは私の未来のことが全部分かるわけ？」
将は声を出さずに、首を小さく縦に振った。

「ねぇ！　私の未来のことを教えて。何て書いてあったの？」
「ダメだ。それは言えない。言ったらとんでもないことが起きそうな気がするんだ。俺だけの頭の中にしまっておくから、安心していいよ」
「でも、もし悪いことが起きるんだったら、今からそれに備えて準備できるじゃない。そしたら、未然にその悪いことを防げるでしょう？」
「理屈ではそうだけど、これは理屈じゃないんだ。ほら、タイムマシンの映画なんかであるだろう？　過去に戻って過去のことを変えると、未来に大きな影響を与えるって。それと同じで、ソウルノート（Ｓｏｕｌ　Ｎｏｔｅ）に書いてあることを教えると、その後の人生に取り返しのつかない影響が起きると思うんだ」
「そうね。もう聞かないわ。そのほうがいいみたい。マサルくん、今ソウルノートって言ったよね？」
「無意識に、ソウルノートっていう言葉が浮かんだんだ」
「魂が決めたことを書いたノートって意味よね。ということは、人は誰でもソウルノートを持っていることになるわね？」
「そのとおり。ただし俺がそこに書いてある文字を見せたとしても、読める人は世界中探してもいないと思う。あの文字は、意識体にならないと読めないと思うよ」
「自分のソウルノートには何て書いてあるか知ってるの？」
「残念ながら、自分のソウルノートは見えないんだ」
二人は、幽体離脱した意識体は想像もつかない謎を秘めていて、

想像もつかない力を持っているような気がしていた。

「離脱の瞬間の感覚は覚えてる？　自分で意識的に離脱できそう？」

「感覚は分かったけど、うとうとしないといけないのがネックだな。だからいつでもできるかって言うと、眠いときでないとできない。これが眠気に関係無しに出来ればいいんだけど。何度も実験するしかないな」

将たちは後で気づくのだが、人は誰でもソウルノートと呼ばれる魂の修行計画を書いたノートを持って産まれてくるのだ。修行計画は産まれてから死ぬまでの人生で、自分の身の上に起こるべきことを自分で書くのだ。それは自分で自分に与えた修行なのだ。その修行を乗り越えることによって、魂はひとつずつ成長していく。難しい修行や辛い修行のほうが、魂の成長は早い。

産まれてくるときにそのノートを持っていないと、この世に生を受けることは出来ず、流産や死産となってしまう。本来はソウルノートを持っていないと、意識体が人の中に入ることは出来ないのだが、ごく稀にノートを持たないで産まれようとする意識体もある。

将は机の上に置いてあるボールペンを取ろうと手を伸ばした。ベッドに座ったままだったので、あと十センチほど届かない。彩子が取ってあげようと手を伸ばしたときだ。ボールペンが勝手に動いて、将の手の中に飛び込んでいった。

「えっ！　なになに？　何が起きたの？」

彩子が驚きをそのまま声に出した。二人は顔を見合わせたあと、ボールペンに視線を向けた。

「超能力・・・かなぁ？」

自分でやったにも関わらず、将は半信半疑のような、他人事のような口ぶりで呟いた。

「絶対に超能力よ！　もう一度やってみて。たぶん出来るはずだから」

彩子に言われて将は、もう一本のボールペンに意識を集中すると、こっちへ来いと強く念じた。彩子の考えは的中した。ボールペンは意識を持っているかのように、将の手の中に飛び込んできた。

「凄い！　幽体離脱だけじゃなくて、超能力も使えるんだ」

「昨日話しただろう。失神してたときに別の世界に行ったこと。あの世界では今のように、思っただけでモノを動かすことが出来るんだ。たぶん、あの世界の力が俺に宿ったんだ」

「さっきの話に戻るけど、離脱は眠っているときにしか出来ないんだよね？　起きてるときは、意識が頭の中にあるから無理だよね？」

「家に帰ってからいろいろと試してみるよ。彩ちゃんも幽体離脱について調べてくれるかな」

1―4

将は毎日、起きている状態での幽体離脱の練習をしていた。眠りに就いてからの幽体離脱は、ほぼ完璧に出来るようになっていた。実験を始めて三週間が経ったときだ。椅子に座って目を閉じていたが、眠っているのではなく起きていた。そのとき幽体離脱が始まった。始まりかけると後は簡単だった。

「やったぞ！　成功だ。彩ちゃんに知らせてやろう」

一瞬で彩子の意識に潜り込んだ将は、起きている状態での幽体離脱に成功したことを告げた。

「やったね！　これで自由自在にいつでも幽体離脱できるね？」

「そうだよ。いつでも出来るよ。あとは意識体にどれだけの力があるかを調べるだけだ。何かやって欲しい実験ある？」

「そうねぇ、ソウルノートのことをもっと詳しく知りたいわ。その内容を見たいと言う意味じゃないわよ。ソウルノートそのものの役目と力をね。それと、別の世界のことも詳しく知りたいわ」

「分かった。二つとも調べてみるよ。分かったらまた意識に潜り込むから」

「じゃあ、気をつけてね」

将は彩子の意識から抜けると、一瞬で別の世界へ移動した。意識体には距離と時間の感覚はない。

「ソウルワールドか」

そう呟いた意識体の将は、ソウルワールドの探索を始めた。そこには膨大な数の意識体が存在している。意識体は人間の形をしていて、いろいろな色に光っている。性別は不明だ。たぶん色で、今どの成長過程にいるのかが分かるのだろうと思ったが、自分で自分の

姿は見えないので、自分は何色かというのは分からない。
意識体は次から次へと消えては現れることを繰り返している。消えるのは、新たな命を授かって、赤ちゃんとして産まれるためだ。現れるのは、肉体が死んで、意識体がこの世界に戻ってきているのだと分かった。肉体は死んでも意識体はまた新たな肉体を見つけて、赤ちゃんとして産まれるのだということが、ここに来てはっきりと確認できた。輪廻転生は本当のことなのだ。

意識体の将は、近くに居る意識体の中を覗いてみた。するとソウルノートを持っている意識体と、持っていない意識体が居ることが分かった。持っている意識体は、次々と消えていった。ソウルノートを持っている意識体は、赤ちゃんとして産まれるのだ。持っていない意識体は、人間としての一生を終えた意識体だ。
しばらくすると、ソウルノートを持っていない意識体の前に、何も書いてないソウルノートが現れた。意識体が軽くノートに触れると、将が彩子の意識の中で見たソウルノートのように、文字が書き込まれていった。
その文字こそが、その意識体が次の人間としての人生の中で経験する事象なのだ。その事象は、意識体が修行として選んだ事柄だ。修行だからこそ厳しいことや辛いことが書いてある。意識体が自分を成長させるために、敢えて自分に課した課題なのだ。
その修行の内容の難しさは、色の違いによって決まっているみたいだ。高い成長過程にいる意識体のノートには、厳しく辛い修行が書いてある。逆に産まれて間もない低い成長過程の意識体の内容は、易しいものだ。

ソウルノートには、結婚年齢や子供が産まれる年月日も書いてある。一人息子が、小学校三年生のとき交通事故で亡くなると書いてあるものもあった。死を書くことが出来るのは、死は肉体的なものであって、意識体は肉体が死んでもソウルワールドで新たな命を見

つけて、新たな人生に誕生するという輪廻転生があるため、死そのものは取り立てて騒ぐものではないように思える。

将は、一人息子の交通事故死を書いた意識体は、肉体を持った自分が息子の死に直面し、その辛さや苦悩をどう乗り切るかを修行として自分に与えたのだろうと思った。自分がソウルノートに書いた修行を乗り越えると、意識体の色は変わって、輝き具合も違ってくるのだ。

ここでは時間の感覚はない。一通り調べた将は、一瞬で自分の肉体に戻り目を覚ました。意識がある状態での幽体離脱だったが、意識が抜けた肉体は眠っているのと同じだ。

1―5

椅子に座っていたはずの将は、ベッドに寝かされていた。テレビを点けて驚いた。幽体離脱してから丸一日が経っていた。階段を下りてリビングに入ると、両親が驚いたような顔をして声を上げた。

「将。大丈夫？　また気を失ってたから心配したんだよ。でもこの前のこともあったし、彩ちゃんに電話してみたの。そしたら、しばらくしたら気がつくから、そのままにしておいてくださいって言ってくれたから、ベッドに寝かせてそのままにしておいたの。良かった、気がついてくれて」

「大丈夫だよ、何ともないから。今からも同じようなことが起きるかもしれないけど、そのままにしておいたらいいからね。間違っても救急車呼ばないでよ。病気じゃないんだから」

時間は午後八時だ。丸一日、何も食べていなかった将は、どんぶり飯三杯を平らげた。食事を終えて入浴を済ませたところで自分の部屋へ戻ると、再び幽体離脱した。意識体の将は、一瞬で彩子の意識に潜り込んだ。

「マサルくん、丸一日調べてたんだね。お疲れ様。それで何か分かった？」

「ああぁ、たくさん分かったよ。人間の一生は神秘に満ちてるよ。それに不思議だよ」

将はソウルワールドで調べてきたことを彩子に話した。喋る必要はなく、考えるだけで彩子に伝わる。将が伝えたのは次のことだ。

産まれてからの人生で身の上に起きることは予めノートに書いてあり、書いてあることは必ず人生で起きることになっている。

人は誰でもソウルノートを持っていて、それは潜在意識に書き込

まれていて自分では見えないし、その内容も分からない。その内容を書き換えることは出来ないし、自分の人生はほぼその内容どおりに進むのだが、何らかの狂いが生じてその内容と大きく違った方向へ進んでいるのであれば、誰かがそれを修正してあげないと、その人の人生は破滅することにも成りかねない。

ソウルノートには人生で自分が計画したことが順番に書いてあり、済んだことは色が変わるようになっている。書いてあることは努力すれば克服できるのだが、ノートに書いてない悪いことが起きると苦しむのだ。

ソウルノートにはソールメイトも記してある。それは丸や三角や四角などのような多数の記号だ。たとえば丸を書いてあると、同じく丸を書いてあるソウルノートの人と出会い、何らかの関係を持つことになる。それはライバルかも知れないし、親友かも知れないし、上司と部下の関係かもしれないし、結婚相手かもしれない。

ソウルノートは、肉体が死んでしまうと消えてしまう。次に産まれてくるときには、新たなことを書き込んだソウルノートを持って産まれてくるのだが、ノートに書いたことは、産まれると同時に忘れてしまうようになっている。

ノートに書いてあることを避けた場合、それは完結するまで次の人生に持ち越されることになる。一度ノートに書いたものは消せない。どんな形であろうと、ノートに書いたことをやり遂げればそれは消える。そして意識体が一段高い位に就くことができるのだ。意識体にも小学生、高校生、大学生というように、成長過程がある。小学生クラスの意識体が産まれてくるときは、そのクラスに見合った内容をソウルノートに書いてくる。間違っても大学生クラスの内容を書いてくることはない。なぜなら、小学生に大学生の問題は解けないからだ。

辛いこと、苦しいことを乗り越えると意識体が一回り大きくなる。辛いことや苦しいことと、嬉しいことや楽しいこと、不幸なことと

幸せなことはバランスが取れるように書くという決まりがある。ただそのバランスが今世で取れるのか、来世で取れるのかも書かないといけない。

将の説明を聞き終えた彩子は、意識体という普段はまったく意識することもなく、むしろそれに気づくことはないものの、実に綿密に計算されたソウルノートの修行計画に驚きを隠せなかった。

「すごく綿密に計算されてるのね。自分に起きることには、すべて意味があるのね。私もちゃんと考えてソウルノートに書いたのかしら？」

「彩ちゃんのノートの内容は言えないけど、自分を成長させるために、いろいろと考えて書いてあるよ」

「マサルくんの場合は、空手の試合で失神して、今の力が備わるということも書いてあったんだね」

「たぶん、そうだね。その他にも厳しいことや辛いことも書いてあるはずだけど、努力すれば必ず乗り越えられるはずだよ」

「それはそうと、前にも言ったけど、マサルくんのこの能力は、何かの目的に使うように備わったはずだわ。そうでないと、理屈に合わないわよね？」

「俺もそう思う」

1－6

四月になり、将と彩子は同じ高校へ入学したが、クラスは別になった。将は部活へは入らず、今でも続けている空手だけをやることにした。部活で遅くなると、幽体離脱の実験も出来なくなるのも理由だ。彩子も部活へは入らなかった。理由は将と同じで、幽体離脱の研究をするためだ。

「彩ちゃんの知り合いで、病気で苦しんでる人いる？　ちょっと試したいことがあるんだ」

「宏美っていう友達のお父さんが癌の治療中よ。抗癌剤と放射線治療を受けてるけど、結果は良くないそうよ」

翌日、授業が終わってから将と彩子は、宏美と一緒にお見舞いに病室を訪れた。宏美の父親は抗癌剤の副作用で、頭髪がすべて抜け落ちている。顔色はどす黒く、将と彩子は、この父親は助からないだろうと直感的に感じた。

十分ほど居た二人は、宏美と父親に励ましの言葉を告げると病室を後にした。二人は待合室のソファーに座ると、作戦の打ち合わせを始めた。

「彩ちゃん、今から幽体離脱するから、寝ている俺の身体を守ってて」

「分かった。あとでソウルノートの結果を教えてね」

将は目を閉じると幽体離脱を始めた。離脱するのに一分もかからない。意識体の将は宏美の父親の病室へ一瞬で移動した。父親の意識に入った意識体の将は、今まで見たこともないソウルノートに驚いた。

父親のソウルノートは透明ではなく、磨りガラスのように曇って

いる。それも白ではなく、汚い焦げ茶色だ。ソウルノートの内容を見てみたが、どこにも癌になるとは書いてない。彩子の意識に潜り込んだ将は、父親のソウルノートのことを告げた。

「マサルくん、ソウルノートって透明なはずよね？　焦げ茶色になってるというのは癌のせいじゃないかしら。だから、新しいソウルノートと入れ替えれば癌は治るんじゃないの？」

「彩ちゃん、たぶんそのとおりだよ。でもソウルノートを入れ替えるとなると、お父さんのソウルノートをソウルワールドへ持っていって、新しいソウルノートへ内容を移し変えないといけないよね・・・」

「何か問題でもあるの？」

「ソウルノートを抜き取られた人は、たぶん死ぬと思うよ。流産とか死産というのは、ソウルノートを持っていない意識体が入るからなんだ。ソウルノートを持っていない肉体は生きられないんだ。だから、ソウルノートを抜き取ると死ぬんじゃないかと思うんだ」

「でも今のままだと、癌で確実に死ぬわ」

「一か八かでソウルノートを抜けって言うの？」

「そうじゃなくて、産まれてくるときノートがないと流産なんかになるけど、現実に生きてる人から抜いたら、死ぬまでに時間があるんじゃないかなと思ったの。仮に二時間以内にノートを戻せば助かるんだったら、その時間内にソウルワールドへ行って、書き換えればいいわけでしょう？」

「そうだけど、ノートを抜いてから死ぬまでの時間はどうやって調べるの？」

「問題はそこね。一旦家に帰ってから考えよう。私の家へ来る？」

「そうだね」

二人は彩子の家へと向かった。

「お母さんただいまあ！　将君と一緒だよ」

彩子の母親の恵子が笑顔で出て来た。
「こんにちは。お邪魔します！」
「こんにちは将君、晩御飯、一緒に食べて帰る？」
「いいんですか？　僕たくさん食べますよ」
「若い男の人の豪快な食べっぷりを見たいから、ちょうど良かったわ。ただし、ひとつだけ条件があるわよ」
「僕、オカネ千円しかないんですけど」
「アッハッハッハッハ、オカネなんか取らないわよ。条件というのは、不味くても残さず全部食べること。これが条件よ」
「僕、味覚音痴ですから大丈夫です」
「それって私の料理は、食べる前から不味そうって言ってるの？」
「お母さん、何バカなこと言ってるのよ。マサルくんを苛めたら承知しないからね」
二階の彩子の部屋へ行った二人は、ソウルノートを抜いてから死ぬまでの時間を、どうやって調べるかを模索していた。
「難しいなぁ。何にも閃かないや。彩ちゃん、よろしく頼むよ」
将が根を上げた。彩子は何か独り言を言いながら、必死に考えている。
「マサルくん、もしこの問題が解決できたら、たくさんの人を救えるわよ。頑張って考えよう」
「そうだな、頑張ろう」
うんうん唸りながら考えていた彩子が叫んだ。
「マサルくん、ソウルノートを抜いても、少なくみても一ヶ月は大丈夫よ」
「えぇぇ、そんなに長く大丈夫なの？　どうして？」
彩子は将から聞いた流産の話を切り出した。
「流産は、ソウルノートを持ってない意識体が入るから起きると言ってたでしょう？　流産はだいたい妊娠して十二週目ぐらいまでが危ないの。もしソウルノートを抜いてすぐ死ぬんだったら、受精した時点で死んでるわ。十二週未満で流産するということは、ソウル

ノートなしでも約三ヶ月ぐらいは生きてるってことでしょう？　だから安全率を多目に考慮したとしても、一ヶ月ぐらいは生きてるんじゃないかしら？」

「彩ちゃん、それ正解だよ！　間違いない」

「今からソウルノートを抜き取ってみる？」

「やってみるよ。でもソウルノートを新しいのに書き換えるとして、どれぐらい時間がかかるか分からないな。もしかしたら二日かもしれないし、一瞬で終わるかもしれないし、あるいは一ヶ月かもしれないし・・」

「大丈夫よ。もし時間がかかってマサルくんが目を覚まさなくても、私が見ててあげるから安心して行っておいでよ。人の命がかかってるんだからね」

1―7

マサルはベッドに横になると、幽体離脱を始めた。一分弱で離脱した将は、宏美の父親のところへ瞬時に移動した。意識体の将は注意深くソウルノートを手に取ると、ソウルワールドへと移動した。父親は眠ったままだ。

ソウルワールドへ来た意識体の将は、一枚の新しいソウルノートを手に取ったが、内容をどうやって移し換えるかが分からない。周りの意識体がやっているように、ノートの表面に字を書くような動きをしてみたが、何も書き込まれない。ソウルノートに書いてある文字を、そのまま書くのは不可能だ。文字と思えない複雑な模様に近いものだから難しくて書けないのだ。

しばらく考えていた意識体の将は、新しいノートと父親から取り出したノートを重ねてみた。すると父親のノートの文字が、そのまま新しいノートに移ったのだ。文字の無くなった焦げ茶色のノートは、あっという間に消滅してしまった。新しいソウルノートを手に入れた将は、宏美の父親のところに瞬時に移動すると、新しいソウルノートを父親の意識体に戻した。その瞬間、それは魔法でも見ているかのような劇的な変化だった。どす黒かった顔色は赤みがさして血色のいい顔色に変わった。健康な人そのものだ。抜けていた頭髪は少しずつ生え始め、三十分も経たないうちに生え揃ったのだ。凄まじいパワーを秘めたソウルノートに、意識体の将は度肝を抜かれた。

「凄い！　素晴らしい！」

それだけの言葉を口にするのがやっとだった。父親を助けた意識体の将は、彩子の部屋へと移動した。ソウルワールドでは時間の観念がないため、どれぐらいの時間離脱していたのか見当もつかない。自分の肉体に戻った意識体の将は目を開けた。彩子は居ない。リビ

ングへ行ってみると、彩子と恵子がテレビを見ていた。

「あら将君、良く寝てたわね。お目覚めはいかが？」

恵子がおどけたように声を掛けてきた。

「今日は何日ですか？　僕、どれぐらい寝てました？」

「寝ぼけてるみたいね。今から晩御飯を食べるところよ。五時ごろ帰ってきたから、二時間ほど寝てたんじゃない。さぁ、晩御飯食べようか」

恵子は立ち上がると台所のテーブルへと将を誘った。将は彩子にVサインを送った。

翌日学校の授業が終わり自宅に帰った将は、ベッドに横になり幽体離脱を始めた。一分弱で意識体として離脱した将は、宏美の父親が入院していた病院へ移動した。入院している全ての癌患者のソウルノートを見るのに、三秒もかからなかった。

その結果、ソウルノートに癌になると書いてなかった患者は五人だ。残りの十人は、ソウルノートに癌になると書いてある。五人の患者を救うことにした意識体の将は、一人目のソウルノートを抜き取ると、ソウルワールドへ瞬時に移動した。

ソウルノートの書き換えの方法は経験済みなのでスムーズに進んだ。一人目が終わると二人目と、ソウルノートを一枚ずつ書き換えていった。五枚を一度に抜き取ると、元に戻すときに間違えた場合、その人の人生にどんな影響が起きるか想像もつかないからだ。

五人全員のソウルノートを新しく書き換えた将は、五人の様子を見ていた。宏美の父親のときと同じように、信じられないほどの劇的な変化が起きた。全員が一時間ほどで健康体へと変化したのだ。血色が見違えるほど良くなり、頭髪は全て生え揃い、今すぐにでも退院できそうな状態になったのだ。

離脱してから一時間半が経っていた。彩子の意識に潜り込んだ意

識体の将は、病院での出来事を全て彩子に告げた。
「自分で癌を選んでいる人もいるわけね。でも癌は自分で努力して治すんじゃなくて、医者に頼るしかないわけでしょう？　それがなぜ自分の修行になるのかしら？」
「俺の推測だけど、助からないと分かってから、残りの人生をどう生きるかということが修行じゃないのかな。ただ嘆き泣いてばかりで過ごすのと、限られた時間で自分に出来ることを見つけて人のためになることをやるのとでは全然重みが違うよね。それが癌という試練を選んだ理由のような気がするんだけど」
「きっとそうだわ。癌になったことを嘆いて死んでいったら、意識体の成長はないはずよ」

1－8

二日後の朝刊の一面に、衝撃的な文字が大きく書かれていた。
『神様が起こした奇跡！　末期癌の患者六人完治』
その出来事は、テレビのワイドショーでも取り上げられた。病院の院長と、完治した患者を診ていた医師がインタビューを受けていた。

「末期癌の患者が完治した理由は何ですか？」
「分かりません」
院長も担当の医師も同じ返事を返した。
「この病院だけの何か特別な治療法でもあるんですか？」
「特別なことは何もありません。現在の医学で考えられる最善の治療法をやってるだけです。抗癌剤の投与と放射線治療がメインです」
「癌は早期発見早期治療で治ると言われてますが、今回の六人の方は末期癌で、余命半年ぐらいだったんですよね？」
「そうです。六人とも癌が全身に転移していて、治る確率は一パーセントもありませんでした。今回その六人が完治したのは、医者の口からこんなことを言っていいのかどうか分かりませんが、神様が奇跡を起こしたとしか思えないんです。それほど劇的な変化だったんです。完治したばかりか、抜け落ちてた髪の毛が一日で生え揃ったんです。こんなことは常識的に有り得ないことです」
院長は答えているうちにかなり興奮していた。別のカメラは完治した六人へのインタビューの映像を写している。その中には、宏美の父親の姿もあった。　六人はそれぞれの自宅でインタビューを受けていたが、不思議なことに六人の答えは同じだった。

「眠っているときに、何かが頭の中から抜けていったような気がしました。しばらくしたら、今度は何かが頭の中に入ったような気がしました。上手く言えないんですが、汚れたものが出て行って、綺

麗なものが入ってきたという感じです。その瞬間から身体がポカポカと温かくなり、今まで味わったことのないような凄くいい気分になったんです。良く寝たという感じで目を覚ましたら、癌が治っていたんです。髪の毛も全部生え揃っていたんで驚きました。これは神様が起こした奇跡に間違いないと思ってます」

　このニュースはあっという間に全国に知れ渡った。翌日から、六人が入院していた病院へは癌患者が殺到して大騒ぎとなっていた。

「大変な騒ぎになったわね」

「彩ちゃん、それほど困っている人が多いってことだよ。それはそうと、この騒ぎどうしようか？」

「このまま放っておくのも何だし、マサルくんにもうひと働きしてもらうか！」

「おいおい冗談はやめてくれよ。離脱してもこんな騒ぎは止められないよ」

「止められるわ。別の病院の癌患者を治せばいいのよ。ね？」

「なるほど！　奇跡が起きたのは、この病院だけじゃないってことにすればいいんだ。善は急げだ。今夜やってみるよ」

「やるのはいいけど、どこの病院にする？」

「市立、県立、国立などの大きな病院に行ってみるよ」

「全部回ろうとすると時間かかるわね」

「彩ちゃん、意識体は異次元の世界だよ」

「忘れてた！　一瞬で済むのね？」

「そのとおり。ソウルノートの書き換え方法も分かっているから、二時間もあれば、かなりの人のソウルノートを新しく出来る。今夜やってみるよ」

「二日後に、また大騒ぎになるわね」

　その日の夜、意識体の将は五つの病院の癌患者のソウルノートを見て回った。ソウルノートに癌になると書いてなかったのは、四十二人だ。ソウルノートの書き換えの要領がつかめていたため、書き

換えはスムーズに進んだ。四十二人の書き換えが終わるのと、書き換え後の様子を確認するのとで、約一時間ちょっとかかった。ソウルノートを入れ替えて結果が出るのに、一時間ほどかかるからだ。

翌々日の朝刊の一面の大きな文字が目を引いた。

『再び神様の奇跡！　癌患者四十二人完治』の見出しが出ていた。ワイドショーの話題は、この話で持ちきりだ。各テレビ局のレポーターは、完治した患者へのインタビューに大忙しだ。インタビューされた患者の答えは、口裏を合わせたかのように全員が、前回の患者と同じ回答をしていた。

「マサルくん、意識体は異次元の世界だから、距離と時間は関係ないのよね？」

「そうだよ」

「だったら、日本中の病院を回って、癌患者を救ってくれない？もちろん、ソウルノートを確認してからよ」

「明日は土曜で休みだからちょうどいいね。朝の十時に彩ちゃんの家に行くから、離脱したあとの俺を見ててね。自分の家でやると、もし朝から晩までかかったとしたら両親が心配するから」

1－9

翌朝十時五分前に、将は彩子の家に着いた。
「こんにちは！　将です。お邪魔しまあす」
大きな声で挨拶すると、恵子の大きな明るい声が返ってきた。
「将君いらっしゃい。彩子が首をながぁくして待ってるわよ」
「お母さん、私をキリンみたいに言わないでよ。マサルくん、待ってたわよ。さぁ上がって」

彩子は将と自分の部屋に入ると、将に確認した。
「今日、日本中の病院の癌患者を見てみるんだよね？」
「そのつもりだよ。時間がどれぐらいかかるか分からないけどね」
「あっ、そうだ。前から聞こうと思ってたんだけど、意識体のマサルくんがどこかへ行ってるときに、肉体のマサルくんの肩を叩いたりしたら分かるの？」
「分かるよ。幽体離脱していても、肉体が感じた反応は意識体の俺に届くんだ。ただし、痛みとか熱い冷たいとかの感覚までは分からないけど」
「そしたら、意識体のマサルくんに帰って欲しいときは、肩を叩くわ」
「ＯＫ。じゃ早速、離脱するから横になるよ」

将はベッドに横になると幽体離脱を開始した。一分も経たないうちに離脱した意識体の将は、北の北海道の病院から南下することにした。最後は沖縄の病院だ。異次元の世界の意識体には距離と時間は関係ない。離脱した意識体の将は、瞬時に北海道の、とある病院に移動した。癌患者の一人ひとりのソウルノートを見て回った。
ソウルノートに癌になると書いてないものは、新しいソウルノートに書き換えていった。書き換えたソウルノートを元に戻すと、次

の人のソウルノートを確認した。
新しく書き換えたソウルノートを元に戻しても、以前のようにその後の様子を確認することはしない。宏美の父親を含めて六人、その後も四十二人で確認していたからだ。確認するのに約一時間を要していたが、確認作業が無くなった分、ソウルノートの書き換えは凄いスピードで進んだ。

静岡の病院まで終わったところで、意識体の将は彩子の意識に潜り込んだ。
「お帰りマサルくん。もう終わったの？」
「まだだよ。今、北海道から南下してきて、静岡の病院まで終わったから、約半分ぐらいだね。ところでどれぐらい時間が経った？」
「えっ！　もう日本中の病院の半分を回ったの！」
彩子は改めて意識体の能力の凄まじさを実感した。
「十時に離脱してから、まだ五分しか経ってないよ。信じられないスピードね」
「ソウルノートを新しいのに替えても、その結果までは見てないからね。過去何人も確認したから大丈夫だと思って。だから早いんだ」
「なるほど。まぁ容態は確認しなくても大丈夫だわ。そしたら、静岡以南も頑張ってね」
「分かった。行ってくるよ」

将は次の病院へ移動すると、癌患者のソウルノートを順番に見て回った。癌を修行に選んだ人は全体の三分の二だ。沖縄まで全て完了したのは、離脱してから十分少々だった。
「日本中の癌患者を助けてきたよ。ただし、ソウルノートに癌と書かれてない人だけだけどね」
「何人ぐらい助けたの？」
「多すぎて覚えてないよ。たぶん、何千人だね。日本中が大騒ぎになるよ」

将の言ったとおり、日本中が大騒ぎになっていた。末期癌の患者や、治療中の癌患者が完治したからだ。マスコミは大々的にこのニュースを取り上げていたが、どこの病院の医師に聞いても、神様が起こした奇跡だとしか答えが返ってこない。患者へのインタビューにしても、返って来る答えは同じだ。テレビにはいろいろな評論家や研究者が出演して自論を展開している。

一ヶ月も過ぎるとこの騒ぎも一段落した。その後、今回のような癌が完治するという事象が起きなくなったことも、その理由と思われた。

1－10

ある日の日曜日、映画好きの彩子に誘われた将は、ファーストフードで一緒に昼食を済ませ、映画館へと向かって歩いていた。

「マサルくん、癌の件は一段落したけど、次は何をするか考えてるの？」

「考えてない。何かしないといけないね。その話は一旦置いといて、今日は映画に没頭しようかな。そのためには寝ないようにしないとダメだな」

他愛のない雑談をしながら歩いていた二人は、建築中のビルの近くまで来ていた。

「このビル何回建てなんだろう？　高いわね」

そう言いながら将と彩子が上を見上げたときだ。落下物よけのネットを越えて、何かが落ちてきているのが見えた。

「あぶな～～い！」

彩子が悲鳴をあげた。落下物は、将たちの前方十メートルぐらいのところを目がけて落下している。休日の午後の路上は歩いている人が多い。悲鳴をあげた彩子は、将の腕にしがみつき目を閉じた。これから起こる大惨事を予想して、そういう行動になったのだ。

考えている暇はない。将は無意識に、落ちてきていた鉄パイプに全神経を集中して止まれと念じた。咄嗟に起きた将の反応だった。路上を歩いていた人の誰もが、彩子と同じように大惨事を予想していた。それを現実化するような何人もの悲鳴が建築中のビルの前で響き渡った。

次の瞬間、落下物の下に居た人たちは信じられない光景を目の当

たりにすることになった。とっくに落下物に当たっているはずなのに、物が落ちた音さえ聞こえないのだ。

恐る恐る上を見上げた人たちが驚きの声をあげた。落下していた鉄パイプが、頭上二メートルほどのところで止まっているのだ。それはまるで、見えない紐で吊り下げられているかのように。

下に居た人たちは我先にとその場を離れた。歩行者が居なくなったところで、落下物はゆっくりと路上に落ちてきた。それは直径五センチ、長さ三メートルほどの足場に使う鉄のパイプだ。人々のどよめきを後に、将と彩子は映画館へと向かって歩いた。

「マサルくんが止めたのね？」

「うん。無意識に反応してたんだ。まさかあんなに上手くいくとは思わなかったよ」

「意識体とソウルノートのことばかりに気が行ってたけど、超能力も使えたんだよね。忘れてた」

「俺も同じ。アッハッハッハッハ」

「今度、超能力の役立て方も考えなくちゃね。それと、他にどんな超能力が使えるのかも実験しなくちゃ」

「頼りにしてるよ。彩ちゃん」

「任せといて！」

映画館に到着した二人は受付で入場券を買うと、映画館の中へと入った。さっきのビルの前は人だかりがしている。警察が来て、現場検証と通行人への事情聴取を行っていた。

翌日の朝刊に、またしても目を引く見出しが載っていた。

『三度目の神様の奇跡！　鉄パイプが空中停止』

この記事は、鉄パイプが空中で止まっている写真付きだ。この事件が起きたとき、大勢の目撃者が携帯電話のカメラでその状況を撮影していたのだ。

その後の週刊誌には、超能力者が名古屋に居る可能性が高いと書

いてあった。最初の癌の完治といい、鉄パイプの空中停止といい、二件とも名古屋だったからだ。

1－11

「やっぱり鉄パイプの件も大騒ぎね。でも私たちがあのとき、あの場所に居なかったら大惨事になってたわ。これもソウルノートに書いてあるの？　でもソウルノートには大きな事柄しか書いてないんでしょう？　たとえば、人生の転機や節目になるようなこととか・・」

「そうだよ。転んで足を怪我するとか、インフルエンザにかかって寝込むとか、誰もが一般的に経験しそうな小さなことは書いてないよ」

「なるほどね。じゃあ早速、超能力の実験を始めようか。その前に、ソウルワールドでやってることで、この三次元の世界と違うことを教えてくれる？」

「ひとつは検証済みの、思っただけでモノを動かすこと。あとは言葉じゃなくて、考えるだけでのコミュニケーション。いわゆるテレパシーだね。それと、瞬間移動。今のところこれだけだ」

「わかったわ。それじゃあ、テレパシーから実験してみよう。やり方は意識体として私の意識に潜り込んだときと同じやり方だと思うから、それでやってみてくれる？　何か私にメッセージを送ってちょうだい」

将は意識体のときと同じような感じで彩子にメッセージを送った。

「きょうも晩御飯食べてってもいいかな？」

「いいわよ」

彩子もメッセージを返した。

「出来たじゃない。こんなに簡単だと思わなかったわ。もっと早くやってれば良かったね」

「次は瞬間移動だよ。テレポートっていうやつだな。リビングに移

動してみるよ。おばさんは買い物に行ってるんだよね？」
「そうよ。誰にも見られる心配はないから大丈夫よ」
将は目を閉じると、意識体のとき移動するのと同じように移動を始めた。彩子の前に居た将の姿が、マジックを見ているように忽然と消失した。
「彩ちゃん。俺はリビングにいるよ」
将がリビングから声を出した。階段を駆け下りてきた彩子は成功する確信はあったものの、実際のテレポートを目の当たりにすると、全身に衝撃が走るのを感じずにはいられなかった。

「理由は分からないけど、異次元のソウルワールドでの力が意識体の俺だけじゃなくて、生身の俺にも宿っているんだ。だからソウルワールドで使っている力は、この世界でも全て使えるんだ」
興奮気味に喋る将に、彩子も興奮している自分を隠せない。

「凄い！　素晴らしいわ！　マサルくん、この力は絶対に世の中のために使わないとダメだよ。間違っても私利私欲に使ったらダメよ。もしそんなことしたら、絶交だからね」
「分かってるって。そんなことするわけないよ。彩ちゃんと絶交するぐらいなら、こんな能力は無くなったほうがましだよ」
将の口から出た思いがけない言葉に二人は顔が熱くなるのを感じて、お互いの顔から視線を逸らした。話題を変えるかのように彩子が続けて喋った。
「今度からうちへ来るときは、瞬間移動したらいいね。交通時間がまったくかからないから、時間がその分、有効に使えるわ」
「でも、おばさんやおじさんがビックリするんじゃないか？」
「玄関にテレポートすれば大丈夫よ。今日もテレポートで帰ったらいいんじゃないの？」
将は彩子と一緒に映画を見た後、彩子の家へはバスで来ていた。自転車ではないのでテレポートしても問題はない。

「彩ちゃん、ちょっと来て・・」
将の言葉に彩子は将の前に立った。将は彩子の肩を抱いた。彩子は目を閉じて将の次の行動を予想していたが、その予想は見事に裏切られた。
「目を開けてごらん」
将に言われて目を開けた彩子は驚いた。景色が変わっているのだ。見覚えのある場所だ。それもそのはず、自分の部屋だった。将は彩子と一緒にテレポートできるかの実験をしたのだ。
「大成功！」
喜ぶ将とは反対に、期待はずれだった自分の予想に少しがっかりしながらも、自分もテレポートした現実に彩子は興奮していた。

それから二週間が過ぎた日曜日の午後、将の部屋に彩子が遊びに来ていたが、
元気のない彩子に将は心配そうに尋ねた。テレパシーを使えばすぐに済むのだが、普段の会話は言葉ですることにしている。

「どうしたの？　何だか元気ないみたいだけど」
迷ったような素振りを見せていた彩子だったが、思い切って口に出した。
「マサルくん、お願いがあるの。お母さんのソウルノートを見て欲しいの」
「えっ？　何でまた急に？」
「お母さんが乳癌検診に行って、左の乳房に癌が見つかったの。お医者さんから左の乳房を切除するように言われて、ショックを受けてるの」
「分かった。でもソウルノートに癌になると書いてあったら、治すことはできないよ。それがお母さんの選んだ修行だから。分かってるよね？」

「分かってるわ・・」
心配そうに答える彩子に、将はそれ以上のことは言わずに幽体離脱を始めた。離脱した意識体の将は、リビングでテレビを見ている彩子の母親の恵子のソウルノートを見てみた。そこに癌のことは書いてない。

恵子のソウルノートは、こげ茶色のすりガラスのようになっている。癌になっている人のソウルノートは、全員、恵子のノートと同じ色をしている。恵子のソウルノートを抜いた意識体の将は、ソウルワールドへ行くと新しいソウルノートに恵子のソウルノートの内容を移し替えた。
新しいソウルノートを恵子に戻した意識体の将は、自分の肉体へと戻った。
目を開けた将は、恵子のソウルノートを新しいのに取り替えたことを彩子に告げた。嬉しさのあまり飛び上がって喜んだ彩子は、そのまま将に抱きついた。しっかりと彩子を受け止めた将は、そのとき初めて彩子と唇を合わせた。五秒足らずの短いキスだったが、二人に時間は関係なかった。

1―12

時は流れて夏休みまであと一週間と迫っていた。将と彩子が高校に入学して、初めての夏休みだ。

「マサルくん、夏休みの予定って何かあるの？」

「空手の練習と、お父さんの実家の熊本に一週間だけ帰る予定なんだ。それぐらいかな。予定と言えるほどのものじゃないけど。彩ちゃんは？」

「私も特に予定はないわ。友達とプールに行く約束をしてるんだけど、それぐらい。あとはお母さんの都合しだいよ」

「時間がたっぷり有るから、俺の能力をいろいろと試してみようか？　もちろん人助けにだよ」

「それがいいわね。ねぇ、友達とプールに行くとき、マサルくんも一緒に来ない？　友達が二人来るんだけど、ボーイフレンドを連れてくるんだって」

はにかみながら誘ってくれた彩子に、将は快く返事を返した。

「そう言ってくれるのを待ってたんだ。絶対に行くよ」

一週間はあっという間に過ぎ、夏休みに入った。将が熊本に行くのは、八月の盆のときだ。それ以外は特に予定はなかったが、午後一時から五時までは、毎日空手の練習だ。

将は幽体離脱をしてソウルワールドへ行くようになってから、念力とテレパシーとテレポートの超能力を身に付けていたが、身体能力も高まっているのを感じていた。一緒に空手の練習をしていても、周りの練習生の動きが遅く見えるのだ。館長の動きでさえ以前より遅く見える。そう見えているのは、将の身体能力が高まっているせいだった。

たぶん、俺のスピードについてこれる人間は、世界中探してもいないだろう。将は漠然とそんな気がしていたが、練習のときはその

スピードを全開にしないようにしている。

彩子とプールに行く日、九時半に彩子の家の玄関前にテレポートした将は、大きな声で彩子を呼んだ。

「おはようございまあす！　将で～す」

リビングで待っていた彩子が飛び出してきた。ミニスカートに可愛らしいTシャツを着ている。

「可愛いじゃん」

将は思っていることを、そのまま口に出した。

「ありがとう。マサルくんもカッコいいよ」

「当たり前！　俺はいつもカッコいいよ」

将はバミューダ風の半ズボンにTシャツだ。空手で鍛えた太い腕と、厚い胸板が目を引いた。とても高校一年生とは思えない体つきだ。

「じゃあ、行こうか」

二人は玄関を出るとバス停まで歩いた。目的のプールは、三重県桑名市にある長島スパーランドのジャンボ海水プールだ。名古屋からは近鉄で桑名まで行き、そこからはバスだ。友達とは、近鉄名古屋駅の改札口で、十一時に待ち合わせだった。約束の五分前に改札口に着くと、友達二人とボーイフレンドが待っていた。

「遅くなってゴメン」

彩子の言葉に、友達の美紀がすかさず答えた。

「五分前だから遅刻じゃないわよ。初対面の人もいるから自己紹介お願いね」

その言葉に、各人が自己紹介を始めた。

「遅くなってゴメン」

彩子の言葉に友達の美紀がすかさず答えた。

「五分前だから遅刻じゃないわよ。初対面の人もいるから自己紹介

お願いね」
その言葉に、各人が自己紹介を始めた。
「矢田祐介です。よろしく」
「近藤翼です。よろしく」
「水谷春菜です。よろしくね」
「伊藤美紀です。よろしくね」
将の番になった。四人の視線は、鍛え上げた将の上半身に注がれている。
「えっと、中瀬将と言います。よろしく」
「しんがりは私、安田彩子です。よろしくね」
自己紹介が済んだ六人は、改札口を抜けると近鉄急行に乗り込んだ。女同士、男同士で並んで座った六人は、すぐに打ち解けて話が弾んだ。
「中瀬君さぁ、凄い身体してるけど、何かスポーツやってるの？」
童顔でポッチャリ体型の矢田が聞いてきた。
「中学のときも今も部活は何もやってないけど、町の道場で小学一年のときから、空手を習ってるんだ」
「と言う事は、えぇ～と、丸九年もやってるんだ。すごいな！　何段？」
「友達は初段とか二段とかいるけど、僕はまだ白帯なんだ。小さい頃、病弱だったから健康のためにやってるんだ。おかげでカゼも引かなくなったよ」
矢田と近藤は、見せかけだけの筋肉バカかと思った。雑談をしているうちに、電車は桑名駅に到着した。ここから長島スパーランドまでは、三重交通バスだ。
田園風景の中をしばらく走ると、ホワイトサイクロン、スチールドラゴンなどの絶叫マシンが見えてきた。長島スパーランドだ。ここはジャンボ海水プールのほかに、数々の乗り物がある遊園地となっ

ており、一日中遊べるようになっている。隣接するのは長島温泉だ。

プールに着いた六人は、ロッカールームで着替えを済ませると、待ちきれんばかりの勢いでプールへ飛び出していった。ここのプールは海水を汲み上げて使っており、波の出るサーフィンプールや流水プール、ウォータースライダーなどがあり、一日中、楽しく遊べるようになっている。

彩子たち三人の女の子は、明るい色のビキニを身に付けている。身長百六十二センチ、体重四十八キロの彩子は、三人の中でもひときわスタイルがいい。

将たち男三人は、全員、トランクスタイプの海パンだ。小学一年生のときから空手で鍛え上げた将の肉体は、無駄な贅肉がまったくなく、太い腕と分厚い胸板は、十六歳の少年とは思えない。ギリシャ彫刻のような、素晴らしい身体をしている。矢田と近藤はそんな将を、見せかけだけの筋肉バカだと思っていたが、内心はその見事な肉体に嫉妬していたのだ。三人の女の子の視線も、そんな将の肉体に注がれていたが、将は彩子以外の視線は無視していた。

六人は目いっぱいプールでの時間を楽しんだ。急降下してくるウォータースライダーには全員が二の足を踏んだが、将が挑戦したのを見て、女の子の手前、矢田と近藤もしぶしぶ挑戦するしかなかった。楽しい時間の過ぎるのは早い。将が気づくと、時計の針は午後六時を指している。

「そろそろ帰ろうよ」

将が皆に言った。長島スパーランドを出発して、桑名駅に着いたのは、午後七時過ぎだ。

1―13

「お腹が空いたよね。ちょっと行ったところにコンビニがあるんだ。電車の発車までまだ時間があるから、何か買いに行こうよ」

水谷春菜の意見に、将と彩子以外の三人が賛成した。

「あれ？　場所が換わったのかなぁ。確かこのあたりだったはずなんだけど・・」

春菜はもともと方向音痴なうえに、ここのコンビニへは中学一年のときに一度来ただけだった。コンビニを探しているうちに路地に入り込んでしまった将たち六人は、前方から四人組の若い男たちが歩いてくるのが目に付いた。

男たちとの距離が三メートルまで縮まったときだ。先頭を歩いていた矢田に狙いを付けたのか、男の一人がわざとぶつかってきた。矢田はそのまま歩き出そうとした。

「おい兄ちゃん！　ぶつかっといて謝らんのか！　なめとるのか！」

「すみませんでした。ごめんなさい」

「ふざけるな！　ごめんなさいで済むと思ってるのか！　謝る気があるのなら、酒代で払え。それともその可愛いお姉ちゃんに相手をしてもらってもいいんだがな。どっちにするんだ！」

「僕たち高校一年生なんです。オカネも電車代しか持ってないんです。許してください」

女の子三人は怯えながら、将の後ろに隠れた。本能的に、一番安全なところを選んだのだ。

「ほう、どうやらこの体格のいいお兄さんが相手をしてくれるみたいだぞ。どうするお前ら？」

ぶつかってきた男が他の二人に目配せしながら、ドスを効かした

声で言った。

「この兄さんが相手をしてくれるのか。最近ちょっと運動不足だから、腹ごなしに相手になるとするか。俺たち手加減できないから、そこんとこよろしく」

完全に将たちをなめきった二人に、矢田は顔面蒼白になっている。矢田は財布を取り出すと、二千円を渡そうとした。

「今時二千円でハンバーガーでも買えと言うのか？　俺らを、おちょくってるのかボケ！」

「すみません。これだけしか持ってないんです」

「そっちの五人、お前らはいくら持ってるんだ？　俺らの酒代を払ってくれるんだろうな！　それとも相手をしてくれるのか？　どっちにするんだ！」

男たちはここぞとばかりに凄んできた。将は我慢の限界と、矢田たちの身の危険を感じると行動に出た。

「僕たちは高校の一年生なんです。おカネを払う気も、あなたたちの相手をする気もありません。僕たちは何も悪くないじゃないですか。あなたが勝手にぶつかってきて、言いがかりをつけてるだけじゃないですか。今から警察に電話して事情を説明します。矢田君、警察に電話してくれ」

将が言った警察という言葉に、一瞬ひるんだ男たちだったが、問答無用とばかりに矢田の襟首を掴むと電話を取り上げようとした。そのとき将の右手が、襟首を掴んでいる男の手首を掴んだ。

「ほう、おいお前ら、この兄さんが相手になるそうだから、ちょっとばかり可愛がってやれ」

二人の男はボクシングの構えをすると、将の顔面めがけてパンチを放ってきた。空手で鍛え上げた将には、ずいぶん遅いパンチに見える。それに加えて、ソウルワールドに行くようになってから、桁

違いに身体能力が高まっていた。
男のパンチをかわした将は、電光石火の後ろ回し蹴りを放った。凄まじいスピードだ。プロの格闘家と言えど、かわすのは無理と思えるほどの早さだった。蹴りは一人の男のこめかみにヒットした。当たる瞬間、将は力を抜いていた。それでも男は気を失った。
たぶん失神した男は、あとで気がついても何が起きたのか思い出せないだろう。それほどの高速の蹴りだった。

次の男が躊躇しながら殴りかかってきた。裏拳でその手を払いのけると、今度は左の回し蹴りを至近距離から放った。百八十度近く開いた左足が、男の髪の毛を引きちぎるかのような勢いで、頭部をかすめた。将は、回し蹴りをわざと外したのだ。
一瞬の出来事に男たちはパニックになっていた。空手のファイティングポーズを取った将は、男たちにはとてつもなく大きく見える。それほどの威圧感があった。
倒れた男を二人で担ぐと、何も言わずにそのまま早足で去っていった。矢田たち四人は、将を驚嘆の眼で見ていた。彩子だけは将の強さを知っていたので、絡まれてもまったく恐怖心はなかった。

「また変な奴らに絡まれると嫌だから、早く帰ろうよ」
将の意見に、矢田たち四人は声を出さずに頷いた。

第2章　赤井刑事と一本の髪の毛

八月の初旬、将を訪ねて刑事がやってきた。将が空手の練習に行っていて留守のときだ。応対に出た母親の直美は、心臓の止まる思いだった。刑事は赤井と名乗った。

「刑事さん、将が何か事件でも起こしたんでしょか？」

不安な表情で尋ねた直美に、刑事は優しい口調で答えた。

「お母さん、ビックリさせてしまってすみません。聞き込み調査をしてるだけです。お宅の息子さんは何もしてませんから安心してください。息子さんは留守ですか？」

「はい、近所の空手の道場に練習に行ってるんです。帰ってくるのは五時半ごろになりますが・・」

それから二日後、今度は赤井刑事が彩子の家を訪ねてきた。応対に出た母親の恵子は、将の母親の直美と同じように不安になった。

「刑事さん、うちの娘が何かしたんでしょうか？」

「いいえ、何もしてませんから安心してください。ただの聞き込み調査です」

恵子はほっとすると彩子を呼びに言った。彩子が玄関に出てくると、赤井は警察手帳を見せながら名前を名乗った。

彩子の見たところ、赤井は四十代後半に見える。身長はマサルと同じぐらいで体格も似ている。優しそうな顔をしているが、獲物を追い詰めるような目は、刑事特有のように感じた。

「私は中瀬くんが、何か特殊な能力を持ってると思ってるんだけど、君は彼がそんな力というか、手品みたいなことをしたのを見たことはないの？」

「マサルくんは、空手は強いです。でも手品なんかまったく興味持ってません。それに、手先は器用じゃないです」
「いや、手品の話はたとえで、彼が超能力でモノを動かしたとか、そんなところを見たことはないの？」
「ないです。もしマサルくんが超能力者だったら凄いですよね！でも私、そんなことは一度も聞いたことありません」
「ありがとう。また寄らせてもらうかも知れないけど、そのときは協力してください」

翌日の午前十時に、赤井刑事が再び将を訪ねてきた。将の母親の直美から、午後からは空手の練習と聞いていたので午前中に来たのだ。

「将君、ちょっと出かけて話をしないか。マクドナルドでも奢るよ。時間あるかな？」
「はい、大丈夫です」
二人は赤井のクルマで、近くのマクドナルドへ向かった。
「十時半だから、昼食には早いけど、育ち盛りだからいくらでも食べれるだろう？　遠慮しないで注文していいよ」
「ありがとうございます」
将はハンバーガーを二つと、オレンジジュース、フライドポテトを頼んだ。赤井はアイスコーヒーを頼んだ。
「羨ましい食欲だなぁ。また昼ごはんを食べるんだろう？」
「はい」
将は旺盛な食欲を見せた。赤井は将の食べっぷりを、感心しながら眺めている。将がハンバーガーを一個食べ終わったところで、赤井が本題を切り出した。

「ところで将君、きみの将来の夢は何？」
食べるのを一旦やめて、将が返事をした。

「まだ分からないです。何をやりたいのかも、何が好きなのかも漠然としてて分からないです。赤井さんはどうして刑事になったんですか？」

「一言で言えば、悪人成敗！」

「正義感が強かったんですね。でも刑事の仕事だと、奥さんや子供さんは心配するんじゃないですか？」

「女房と子供は殺されたよ」

「えっ！　そうですか。すみません、余計なことを聞いて・・。それで犯人は捕まったんですか？」

「俺は署内で赤鬼と呼ばれてるんだ。どういう意味か分かるかな？」

「いいえ、分かりません。教えてください」

赤井は視線を遠くに向けると、過去を思い出すかのように喋り始めた。それは赤井が結婚して六年経ったときだった。結婚した翌年に長男が産まれ、親子三人で仲良く暮らしていた。赤井は子煩悩で、帰宅すると寝るまで息子と遊ぶ毎日だった。息子も母親よりも、赤井になついていた。

息子が六歳になったときだ。妻の和江と息子の健太が外出しているときに、ピッキングでドアを開けて、空き巣が入っていたのだ。運悪く帰宅した和江と健太は、タンスの引き出しを開けて物色している空き巣と、鉢合わせしてしまった。空き巣は和江の首に扇風機のコードを巻きつけ殺害し、健太の首は両手で絞めて殺したのだった。和江が激しく抵抗したらしく、灰皿や本などが散乱していた。健太の顔には涙の跡があった。

2―2

帰宅した赤井が第一発見者だった。すぐに鑑識が呼ばれ現場検証を行ったが、手がかりはまったくなかった。唯一、犯人のものと思われる毛髪が見つかったが、それを手がかりに犯人を捜すのは不可能だった。

赤井は毎日遅くまで聞き込み調査を続けたが、不審な人物や不審なクルマを目撃したという情報は皆無だった。手がかりのないまま、十五年が過ぎていた。

そのときから赤井は、殺人事件に関しては、犯人を見つけるのに執念の鬼となった。犯人を見つけて逮捕するときは、傷害事件になる寸前まで痛めつけた。

その姿は、まさに鬼だった。

それから仲間内では、鬼の赤井。赤鬼と呼ばれるようになった。和江と健太の殺害から十五年が経っていたが、赤井は諦めていない。何としても犯人を捕まえたかった。犯人を捕まえるには、聞き込み調査するしかない。何も手がかりとなるものが残されていなかったからだ。

正直なところ赤井は捜査に限界を感じていた。今のままでは犯人を捕まえることは出来ないと思っている。年月が経つごとに、人の記憶は薄れていくものだからだ。

そんなとき、神様の奇跡という新聞の記事が目に止まった。癌が完治したという出来事は、まさに奇跡としか思えない。それは名古屋での出来事だったが、日本中で同じことが起きた。常識では考えられないことだ。

それからしばらくして、今度は落下してきた鉄パイプが空中で停止するという不思議な出来事が起きた。これも名古屋だ。この出来

事はたくさんの目撃者がいて、携帯電話のカメラで現場を撮影したものが多数いた。赤井は新聞者に寄せられた何百枚という写真を、一枚一枚、念入りに調べていった。その結果、赤井の長年の刑事としての勘から、将が二つの出来事に絡んでいると思ったのだ。

もし、超能力と呼ばれるものが存在するのであれば、妻と子供を殺害した犯人を見つけるのに力を借りたい。赤井の願いはそれだけだ。

赤井の話を聞きながら、将はテレパシーで赤井の本心を読んでいたが、話している内容とまったく同じだった。赤井は信用できると判断した将は話を聞き終えると、ひと言ひと言、言葉を選ぶように話し始めた。

「愛する家族を殺された赤井さんの心情は、僕が軽々しく口には出来ないと思います。僕を探していた理由は、良く分かりました。僕で良ければ力になりますが、二つだけ条件があります」

「言ってみてくれ。何でもするよ」

「一つ目の条件ですが、今から話すことと僕が見せる能力は、たとえ誰であろうと絶対に漏らさないということ」

「俺を信用してくれ！　絶対に二人だけの秘密にしておくから。二つ目の条件を言ってくれ」

「これはもっと大事です。もうひとつハンバーガーを頼んでもいいですか？」

「ワッハッハッハ、将君はいいキャラクター持ってるね！　気に入ったぞ。十個でも二十個でも好きなだけ食べてくれ」

将はハンバーガー四個を平らげると、赤井のクルマで近くの公園へと向かった。公園の駐車場にクルマを停めると、将は赤井に自分の能力について話し始めた。

「赤井さん、さっき言ったように、今から話すことと、今から見せ

ることは絶対に漏らさないでください」
「大丈夫だ！　信じてくれ」
赤井の表情を見ていると、テレパシーで頭の中を読む必要はなかった。
「僕の超能力は三つあります」
赤井が、ゴクリと唾を飲み込む音が聞こえた。
「手を触れずに物を動かす念力、一瞬で移動するテレポート、人の考えを読むテレパシー。この三つです」
淡々と話す将に、赤井はまだ超能力を見ていないのに、驚愕の視線を送った。

「もしかしたら、俺が話していたときに、頭の中を読んだのか？」
「失礼だとは思いましたが、赤井さんが本当に信用できる人かどうか、読ませてもらいました」
「それでどうだった？」
「信用できると思ったから、こうして全てを話しているんです」
「ありがとう！　心から感謝するよ」
「では早速、超能力を見せます。まず念力からです。次にテレポート、それからテレパシーを見せます」
言い終わった将は、順番に超能力を見せていった。

「あっ・・・、え・・・」

赤井は声にならない自分の声にもどかしさを感じながら、必死で考えをまとめていた。落ち着きを取り戻した赤井は、今の心境を口に出した。
「凄い！　素晴らしい！」
これ以上の言葉は必要なかったし、思いつかない。
「将君、俺は愛知県警本部の刑事課にいるから、いつでも会いに来てくれ。赤鬼さん居ますか？　って言ってくれれば通じるから。そ

れから、俺もまた会いに来てもいいかな？」
「もちろんです。ご家族を殺した犯人を一緒に探しましょう！」
「ありがとう、将君」
「何でも言ってください、力になりますから。それともうひとつ、まだ見せてない能力があるんですけど、見せましょうか？」
「まだあるのか！　ぜひ、見せてくれ」
赤井は、将の底知れない不思議な力に心底驚いていた。

「ではやります。超能力ではありません。空手です」
将は空手のポーズを取ったかと思うと、素早く動き始めた。そのあまりの速さに赤井は度肝を抜かれた。常人とは思えないスピードだ。回し蹴り、後ろ回し蹴り、前蹴り、突き、肘打ち、膝蹴り、飛び蹴り、そのどれもが凄まじいスピードだ。赤井が知る限りでは、将の攻撃をかわせるものはいない。プロの格闘家と比べても桁違いのスピードだ。
「将君、どんな練習をしたら、そんなスピードが出るようになるんだ？」
「練習じゃありません。ソウルワールドに行くようになってから、肉体の能力も桁違いにアップしたんです。理由は分かりません」
「百メートルは何秒で走れる？」
「まだ測ったことはありませんが、感覚で言えば、五秒ぐらいで走れると思います」
なんという少年だ。一体この少年の能力は、どこまで伸びるんだ！　赤井は、やっとの思いで興奮を抑えながら、独り言を呟いた。

2―3

将は自分の部屋で考えていた。将は辛かった。これほどの能力を持っていながら、赤井の期待に全く応えることが出来ないからだ。赤井の思いは痛いほど分かっている。分かっているからこそ辛い。俺の能力は一体何なんだ！　一人の人間の力にもなれないほど無力なものなのか！　将は悔しかった。何としても赤井の無念を晴らしたい。不思議なもので、必死で考えていると、解決策はあるとき突然閃くものだ。将はある仮説が浮かんだ。それは突然だった。

赤井の意識に潜り込んだ意識体の将は、赤井の妻の和江について調べ始めた。赤井の意識には、今も鮮明に和江と健太のことが残っている。意識体の将は、和江と健太の情報を調べた。赤井に残っている和江と健太の鮮烈な想い出の中に、必ず探しているものがあるはずだ。それはわずかだけあればいいのだ。

「あった！　見つけたぞ！」

意識体の将は探しているものを見つけた。それは消え入りそうなほど、僅かなものだった。注意して探さないと絶対に見つからないものだ。

将はある人の意識体を知ると、その人の居る場所を見つけることができる。それは、その　意識体が発するシグナルが分かるからだ。ただし、一度でもその意識体に接触しないと、シグナルを知ることはできないが、もしその人の想い出や記憶を鮮明に持っている人であれば、その記憶の中から意識体のシグナルが分かるのではないかと考え、和江のシグナルを探していたのだ。

シグナルが分かれば、その意識体を持った人を探すのは造作もない。時間と距離の概念がないソウルワールドからその意識体を探せば、過去であっても可能となるはずだ。シグナルは指紋のようなも

ので、同じシグナルは存在しない。だからシグナルで、どの意識体かが分かるのだ。

意識体の将はソウルワールドへ移動すると、赤井の記憶から得た和江のシグナルを探し始めた。和江は十五年前に亡くなっているので、ソウルワールドからでないと探せない。

和江の居場所を見つけた意識体の将は、その場所へ移動した。そこは和江が、犯人にコードで首を絞められている場面だった。十五年前の過去だ。

今であれば将にとって、和江を助けて犯人を捕まえるのは簡単なことだが、そうすると過去を変えることになるので、それは出来ない。目の前で人が殺されるのを見るのは、針のむしろに座らされている何倍、何十倍もの苦痛だ。

意識体の将は感情を殺すと、冷めた視線を犯人に送った。犯人の男は和江を殺したあと、隣で気を失っている健太の首に手をかけた。感情を殺していても悪魔ではない意識体の将は、健太が殺されるのまで見ることには耐えられない。

健太から視線を外した意識体の将は、涙を流していた。意識体から実際に涙が流れているのかは分からないが、意識体の将は号泣していた。涙の量に比例して犯人への怒りと憎悪が、加速度的に膨らんでいった。

意識体の将は犯人の意識に潜り込むと、犯人の全ての情報を記憶に収めた。目的を果たした意識体の将はソウルワールドへ移動し、自分の肉体へと戻った。時間は夜の十一時になっていた。将はベッドに潜り込むと、涙を流しながら眠りに就いた。

将は夢を見ていた。和江が男に電気コードで首を絞められていた。将は後ろから男の肩を掴むと、思いっきり後ろへ引っ張った。男はひっくり返ったが、すぐに起き上がると将に反撃してきた。将は和江の首に巻きついたコードを外しながら、襲いかかってきた犯人を

念力で停止させた。コードが外れると、和江はぜ～ぜ～と肩で大きく息をし、貪るように空気を吸い込んだ。

念力でそのまま男を捕まえれば済むことだが、将は男を許せなかった。念力を解くと、男が襲い掛かってきた。将は右の回し蹴りを男の上腕部に放った。手加減はしない。高速の回し蹴りを受けた男は、吹っ飛んで壁にぶつかった。左上腕部の骨が折れていた。苦痛に顔をゆがめながら、男は隠し持っていた刃渡り二十センチほどの刃物を取り出した。

刃物を持った右手を振り回しながら襲い掛かってきたが、将の目にはスローモーションのように見えていた。男が振り回す刃物を紙一重のところで巧みにかわしながら、反撃のチャンスをうかがっていた。それはまるで、ダンスでも踊っているかのような滑らかな動きだった。

刃物をかわすだけで攻撃してこない将に、男は勝機を得たと思った。その思いは表情にも表れていた。ニヤリと笑いながら刃物を振り回している男に、高速の左回し蹴りが放たれた。凄まじいスピードだ。蹴りが来ると分かっていても、避けることは不可能だ。

男の右上腕部に蹴りが当たると、男は壁に激突した。右上腕部の骨が折れていた。立ち上がって逃げようとする男の左太腿に、ローキックが叩き込まれた。もんどりうって倒れた男は、苦痛の表情を浮かべ逃げることを諦めた。手加減したキックだったが、大腿部の骨にはヒビが入っていた。和江は健太を抱きしめながら、涙を流して震えている。

将がしゃがんで二人を見ているときだった。倒れていた男が立ち上がると、近くにあった花瓶で、将の後頭部を思いっきり殴ったのだ。なぜ？　薄れていく意識の中で、将は自分に問いかけていた。油断大敵の言葉が聞こえた気がした。意識が戻った将の横には、コードを首に巻かれた和江と、涙を流した将が横たわっていた。

「ワァ～！」

大声をあげて将は目を覚ました。

「夢か」

将は呟いたが、夢で良かったのかどうかは分からなかった。

2―4

翌朝九時、将は赤井に電話をかけた。
「将です。おはようございます」
「おぉ、将君おはよう。こんな早くにどうした？　何かあったのか？」
「奥さんと息子さんを殺した男を見つけました」

将は電話を切ると、赤井の部屋へテレポートした。男は柳田竜二。当時三十五歳だった。十五年経った今は五十歳になっている。空き巣の常習犯だが、一度も逮捕されたことがなく、現場に証拠も残さないため、警察のリストには載っていない。

「将君、柳田のシグナルは分かるのか？」
「もちろんです！」
「ヤツを探すのを手伝ってくれないか」
「赤井さん、犯人を見つけたとして、どうやって逮捕するんですか？　十五年も経ってるし、証拠がないですよ」
「逮捕はしない」
「えっ？　どうするんですか？」
「和江と健太を殺したように、ヤツの首を絞めて殺してやる！」
赤井は鬼の形相で言った。
「そんなことをしたら、赤井さんが殺人犯になってしまいます」
「和江と健太の仇を討てるんだったら、それでも構わんさ」
「そんなことをして、和江さんと健太くんは喜びますか？　赤井さんにはこれからも犯罪者を捕まえるという使命があるじゃないですか！　僕と一緒に正義のために闘いましょう」

将の言葉に、赤井の表情が緩んでいった。

「すまん。つい感情的になってしまった。君の言うとおりだ。将君、俺に考えがあるから逮捕できるよ」

赤井は、部屋から発見された唯一の手がかりの毛髪があることを思い出した。

「将君、悪いけど早速、柳田を探してくれないか」

「今から幽体離脱するので、赤井さんはここで僕を見ててください」

横になった将は、一分弱で幽体離脱した。過去の和江を探すのと違って、現在生きている柳田を探すには、ソウルワールドへ行く必要はない。意識体の将は、レーダーのように意識を北海道から南へ放ちながら、柳田を探し始めた。

意識が広島に来たときだ。意識体の将は、柳田の発するシグナルを感知した。瞬時にそこへと移動すると、柳田の姿を発見した。五十歳の柳田は白髪交じりの頭髪が少し薄くなりかけていて、実際の年齢よりも老けて見える。

意識体の将は柳田の意識に潜り込んだ。柳田の意識の底には、和江と健太を絞め殺した記憶が残っていた。和江と健太を殺した後、柳田は空き巣から足を洗い、鉄工所勤めの普通のサラリーマンになっていた。

柳田は二人を殺した後、東京へ逃げていた。指紋も、手がかりになるような証拠も残していない自信はあったが、テレビのニュースや新聞記事を見ながら、怯えて暮らしていた。

それも一年だけだった。和江と健太殺しの事件は、一年過ぎると風化していた。もう見つかる心配はないと判断した柳田は、名古屋に戻ってきて派遣社員として働いたが、仕事に馴染めず、故郷の広島へ帰ることにしたのだ。

広島に帰った柳田は、友達の紹介で現在の鉄工所に勤めることになった。あの事件以来、空き巣からは完全に足を洗っており、勤務態度も真面目で社内での評価は良い。

柳田には奈美子という三歳下の女房がおり、子供は今年中学二年

になる大輝と、小学六年の美由紀の二人だ。

意識体の将は肉体に戻った。目を開けて起き上がった将は赤井に伝えた。

「赤井さん、柳田は広島にいます」

将はテレパシーで柳田の情報を伝えた。赤井は悩んだ。柳田を見つけて、すぐにでも首を絞めて殺してやりたいが、柳田には家族が居る。子供も二人いる。

柳田の過去を知らない家族にとっては、いいお父さんに違いない。柳田の家族の心情を考えると辛い。もちろん、殺すつもりはない。家族にとっていいお父さんかもしれないが、犯した罪は償わないといけない。将はテレパシーを使わなくても、赤井の悩んでいることが手に取るように分かった。

「赤井さん、罪を犯した者は法で裁かれるべきですよ。日本は法治国家だし、赤井さんたちもそのために働いてるんでしょう？」

「そうだよな。将君、俺は今から広島へ行くよ」

2―5

赤井が広島に着いたのは、午後一時半頃だった。将に連絡した赤井は、広島駅のトイレにテレポートした将と合流した。

「赤井さん、鉄工所の場所は分かりますか？」

「ああ、大丈夫だ。ここから広島電鉄で十五分の袋町だから」

テレポートすれば一瞬で移動できるのだが、全てを将の能力に頼ってしまうと、刑事としての勘が鈍ってしまうような気がした赤井は、電車で行って、歩くことにした。これが刑事本来の捜査のやり方だ。

鉄工所に着いた赤井と将は、事務所に入ると柳田を呼んでもらった。中学校の同級生ということにした。

五分も経たないうちに作業着姿の柳田が現れた。作業帽を脱いで軽く会釈をすると、受付のテーブル席に座っている赤井と将の前の椅子に座った。少し、警戒したような表情を見せると、おもむろに口を開いた。

「あのう、柳田ですが、どちらさまですか？」

柳田は受付の女性から中学校の同級生と聞いていたが、赤井の顔はまったく記憶にない。

「初めまして柳田さん。私は赤井と申します。こっちは息子の将です。ちょっと聞きたいことがあって、名古屋から来ました」

柳田の表情が一瞬曇った。将は柳田が現れたときからテレパシーで柳田の心を読んでいる。赤井という名前を聞き、柳田の脳裏に和江と健太殺しの記憶がまざまざと浮かび上がってきた。赤井は柳田の額から汗が流れ始めたのを、見逃さなかった。柳田は明らかに動

揺している。テレパシーを使わなくても、赤井には分かっていた。刑事の鋭い観察力は、犯人の微妙な変化も見逃さない。

「柳田さんどうしました？　何か心配事でもあるんですか？」

「いえ別に・・。赤井さん私に聞きたいこととは何ですか？」

柳田は動揺を見せまいと、平静を装いながら尋ねた。

「もう十五年前になるんですが、名古屋で主婦と六歳の男の子が自宅で殺されるという事件がありました。ご存知ですか？」

「さぁ、私はここに居たんで、そんな事件があったかどうか記憶にありませんが・・」

将には、柳田がウソをついているのは分かっていたが、黙って様子を見ることにした。

「そうですかぁ。実は私は名古屋の刑事なんですが、殺された主婦は私の女房なんです。男の子は私の長男です」

柳田は素人目にも分かるほど動揺していたが、したたかだった。

「それはお気の毒でした。それで私に聞きたいこととは？」

赤井は鋭い視線を柳田に向けると、いきなり核心に触れる質問を浴びせた。

「柳田さん、犯人について何か存知じゃないですか？」

「どうして私が知ってるんですか？　私はずっとここで暮らしてるんですよ。まして名古屋に行ったこともありません。私を疑ってるんですか？　非常に不愉快です」

柳田には十五年経った今、絶対に捕まらないという自信があった。自分ですら記憶が薄れ掛けているのに、証拠も何もないのに逮捕できるわけがない。

「すみません。気分を害することを言ってしまって。刑事の習性と

思って勘弁してください」
赤井は頭を下げると、柳田が被っていた帽子を手に取った。しみじみと過去を振返るような仕草をしながら、帽子を触った。

「私の父親も昔、鉄工所で働いていました。最近、景気のほうはどうですか？」
赤井は世間話をするかのように見せかけて、帽子に付着していた白髪をばれないように手に隠した。
「ぼちぼちといった所です。私もあと十年で定年ですから、それまで景気が悪くならなければと思ってます。うちみたいな小さい会社は、景気が悪くなるとすぐに倒産する可能性がありますからね」
少し雑談をしたあと、
「貴重な時間を済みませんでした。これで帰ります」
赤井と将は頭を下げると、鉄工所を後にした。将は柳田が赤井に向かって、「ばかやろう！　間抜けな刑事。一生一人で苦しんでろ」と心の中で叫んでいるのをテレパシーで聞いていた。

一週間後、赤井から将の携帯電話に連絡が入った。
「現場に残ってた髪の毛と、柳田から採取した髪の毛のＤＮＡが一致したぞ！　これで証拠が揃った。柳田を逮捕できる」
「やりましたね赤井さん！　これで奥さんと息子さんも浮かばれますね」
「今から逮捕しに行ってくるよ。広島県警には連絡してあるから、俺が着くころには逮捕されてると思う」

柳田は逮捕され裁判が行われた。初公判で柳田は、赤井和江と健太の殺害を認めたが、殺すつもりはなく、騒がれたため怖くなり首を絞めてしまったと供述した。
検察側は死刑を求刑したが、弁護側は計画的犯行ではなく、殺害の意思がなかったことを取り上げ反論した。裁判は長期化しそうな

様子だ。どんな判決になろうとも、赤井は法の裁きに任せることにしていた。和江も健太もそれを望んでいると思ったからだ。

第3章　サイレント・パニッシャー

飲酒運転、万引き、下着泥棒など、このところ警察の不祥事が続いていたが、その中のひとつに、警察の信頼を失墜させる、愛知県東海市で起きたストーカー事件があった。ストーカーにあっているという女性が助けを求めてきたにも関わらず、警察の怠慢により、その女性が殺害されてしまったのだ。

マスコミはその事件を大々的に取り上げ、警察の弁解じみた会見は、印象を悪くするだけだった。警察にも言い分があるだろうが、世論を敵に回したら勝ち目はない。

被害者の家族の気持ちは痛いほど分かっている赤井だが、警察にも限界があることはどうしようもない。言い方は悪いが、起きてしまったことをいくら悔やんでも仕方がない。今は一分一秒でも早く犯人を捕まえ、被害者の無念を晴らしてやりたかった。

高校生になって初めての夏休みも終わり、九月半ばのある日、将の携帯電話の着信音が鳴った。着信音は最近の流行の曲だ。ディスプレイには赤鬼と表示されている。

「はいマサルです。こんにちは赤鬼さん。何かあったんですか？」

「実は折り入って、お願いがあるんだが・・」

「遠慮しないで言ってください。僕に出来ることだったらやりますよ」

赤井は電話の向こうで言いにくそうに口ごもっていたが、将の言葉に意を決したかのように言った。

「君も知ってると思うけど、ついこの前、愛知県東海市で、女性がストーカーに殺された事件があったよな。それと似たようなことが起きようとしてるんだ」

「誰か助けを求めてきたんですか？」

「そうなんだ。ある女性が、ストーカーされてて怖いから、守って欲しいと護衛を依頼してきたんだ。気持ちは分かるんだけど、個人の護衛のために警察が二十四時間張り付くというのは出来ないんだ」
「それで僕に護衛を頼めないかということで、電話したんですね？」
「事件が起きてからだと手遅れということも考えられるし、そうかと言って、毎日個人のボディーガードをすることは出来ないんだ。しかし先日のストーカー事件の殺人のこともあるし・・」
「分かりました。明日にでも、その女性に会わせてもらえますか？彼女が怯えているんだったら早いほうがいいですから。それから、くれぐれも僕のことは内緒にしておいてください」
「分かった。そしたら明日、彼女が改札口から出てきたところで接触するから、君も改札口で一緒に待っててくれないか」

翌日、名鉄の尾張旭駅改札口の近くで赤井は女性を待っていた。赤井から少し距離を置いて将と彩子がいる。赤井は、ある女性が改札口から出てきたのを確認すると、ゆっくりと近づいていった。

「すみません刑事さん。アパートまで二十分なんですけど、いつも誰かに付けられてるような気がして、とても怖いんです」
「原田さん。そのストーカーというのは男ですか、女ですか？」
「たぶん、男だと思います」
「思います。と言うのは、ストーカーを見てないんですか？」
「はい。見てないんですけど、確かに私を付けて来ているんです。間違いありません。男の人の気配を感じるんです。見えないから余計に怖いんです」

赤井は歩きながら、半ば呆れていた。確かにストーカーに殺害された女性は、警察の怠慢の結果だと言わざるを得ない。だが見てもいないストーカーに怯える女性の警護までしていたら、それこそ女性の数だけの警官が必要になる。

赤井は美由紀のことを、被害妄想の女性ではないかと思った。気配を感じると言うだけで、一度もストーカーの姿を見ていないのだ。これ以上、貴重な時間を美由紀のために使うつもりはない。

そう思っているところへ、将がテレパシーで話しかけてきた。赤井は自分の思っていることを将に告げた。と言っても、考えるだけで瞬時に伝わるので、時間的には数秒もかからない。

「赤井さん分かりました。後は僕に任せてください。でも今は、原田さんを無事にアパートまで送ってください」

将は赤井から聞いたことを彩子に話した。

「赤井さんは、原田さんを被害妄想だと言ってるけど、彩ちゃんはどう思う?」

「女性の立場から言ったら不安で仕方ないわ。誰かと一緒に帰るんだったらまだしも、毎晩一人でしょう。それに女性の第六感ってバカに出来ないわよ」

彩子と話しながら歩いていると、ほどなく美由紀のアパートに着いた。アパートを確認した将は、一旦、家に帰って出直すことにした。これから先は、彩子が居ないほうがやりやすいからだ。

帰宅した将は手早く夕食を済ませると自分の部屋へ行き、幽体離脱を始めた。一分弱で離脱した意識体の将は、美由紀の意識に潜り込んだ。彼女のソウルノートを見るためだ。ソウルノートにストーカーのことは書かれていない。そうは言っても、人生で起きることの全てがソウルノートに書かれているわけではない。

将は、美由紀が赤井に話したことが本当かどうかを調べた。美由紀は見えない影に怯えていた。その影とはストーカーだ。姿は見てないが、確かに美由紀は、ストーカーとおぼしき気配を感じていた。

意識体の将は美由紀のシグナルを記憶すると、自分の部屋へと戻り、眠っている肉体に戻った。幽体離脱してから戻るまで、五秒も

かかっていない。
　原田美由紀は毎日、同じ時間の電車で帰っている。名鉄尾張旭駅に着くのが午後八時十五分。駅からアパートまでは徒歩になる。平池の前の民家の通りを抜け、約一キロの距離を歩く。
　街路灯は点いているが、人通りの少ない道は決して安全とは言えない。それに加えてこの二ヶ月ほど前から、美由紀は誰かに尾行されてるような気配を感じていた。不安は募るばかりだ。そんな矢先、ニュースでストーカー殺人を知った美由紀は、居ても立ってもいられず、警察に保護を求めたのだ。被害者は、美由紀と同じ愛知県に住む女性だった。

　原田美由紀は二十四歳。名古屋のブティックに勤めており、終業時間が遅いこともあって帰宅も遅い時間となっている。親元を離れたアパートでの一人暮らしだ。中学高校と陸上部に所属していた美由紀は、脚力には自信がある。いざとなったら走って逃げれば大丈夫だろうと漠然と思っているが、ふいに襲われた場合を考えると、その自信も揺らいだ。

3―2

将が美由紀を護衛し始めて五日目の夜だ。いつものように帰宅の途についていた美由紀が背後に人の気配を感じ、振り向いた瞬間だった。黒っぽいジャージーを着て野球帽とマスクで顔を隠した男が、三メートルほどの距離から襲い掛かってきた。

手には刃渡り三十センチほどの包丁が握られている。ストーカーではなく、通り魔だ。美由紀は出せる限りの悲鳴をあげた。自慢の脚力を使って逃げることは、頭から消えている。悲鳴が助けてくれると思っていたが、不運なことに周りに美由紀と通り魔以外の人影はない。

通り魔が美由紀を刺すのに十秒も必要ない。包丁を持った右手が振り下ろされた。美由紀は悲鳴をあげながら死を覚悟した。通り魔の振り下ろす包丁が、まるでスローモーションのようにゆっくりと迫ってくる。

包丁が二十センチの距離まで迫ったときだ。美由紀の左手が勝手に動き、包丁を握った右腕を払いのけた。その後は他人に操られているように、勝手に身体が動いていた。美由紀はまるで夢を見ているようだった。

右手の手刀を通り魔の首筋に叩き込むと、右回し蹴りをこめかみに放った。充分な手応えだったが、身体はなおも動き続けた。通り魔が崩れ落ちようとしているところへ、追い討ちをかけるように左の後ろ回し蹴りが叩き込まれた。

その一連の動きは空手の達人並みの速さで、とうてい素人が避けきれるものではない。十秒もかからず通り魔は気を失って倒れた。美由紀は何がどうなったのか、まったく理解できなかったが、意識体の将が美由紀の身体を操っていたのだ。空手の達人であり並外れ

たスピードを持つ将の技が、そのまま美由紀の動きとなっていたのだ。

美由紀はすぐに警察に電話をすると、十分ほどで警官が到着し、通り魔は現行犯で逮捕された。美由紀も事情聴取のために、警察へ同行することになった。

通り魔の名前は森田秀則。年齢三十五歳。ある県立高校の国語の教師だ。既婚者で、二人の子供と奥さんの四人家族だ。美由紀とは面識がなく、なぜ自分が彼女を襲ったのか全く分からないし、覚えていないと繰り返すばかりだ。

翌日の朝刊に、通り魔殺人犯逮捕の記事が載っていた。テレビレポーターの質問に、森田を知る教職員や父兄は口を揃えて、信じられないということを言っていた。

将は森田の意識に入ってみたが、森田は父兄の評判どおりの人物で、真面目で明るく、とても通り魔殺人をやるような人間ではない。将自身、今回の森田の行動が腑に落ちない。

「何か変よね。マサルくんが覗いてみた犯人の素顔は、犯罪を犯すような人じゃなかったわけでしょう？　薬物とかアルコールが入ってたとか、精神的な病気とかじゃなかったのかしら？」

「赤井さんから聞いた限りでは、警察もその辺のところは念入りに調べたそうだけど、まったく異常はなかったそうだよ」

「まるで、マサルくんが原田さんの身体を操ってたみたいに、森田さんも誰かに操られていたような感じよね。でも結果は犯罪を犯したわけだから弁解の余地はないし、こうなると森田さんの人生は崩壊することになるわ。家族が可愛そうね」

彩子の言うとおりだ。森田自身が犯罪を犯した理由は分からない

のだが、結果的に、森田の人生が崩壊するのは事実だ。

将が見た美由紀と森田のソウルノートには、通り魔事件のことは書かれていない。このこと自体も将には奇妙だった。人生で起きる全てのことが、ソウルノートに書かれているわけではないが、命に関わることや、人生に大きな影響を与えることが書かれてないわけはないからだ。ただ、予想外の外乱によって生ずることまでは書かれていないので、今回の事件もそうだろうと思った。

3―3

十一月に入り、季節は冬へと駆け足で向かっている。千葉の県立高校に通う島崎香織は、授業中に気分が悪くなった。朝から少し熱っぽかったので、風邪を引いたのだろうと思い、担任の許可を得て保健室で休むことにした。

保健室には養護教師の奥村がいた。奥村は四十代半ばの女性教諭だ。症状を話した香織は、奥村に言われてベッドで休むことにした。ベッドに横になった香織は五分ほどするとウトウトし、寝息を立て始めた。香織の様子を見ていた奥村が、用事を思い出し保健室から出て行くと、そのときを待っていたかのように一人の男が入ってきた。

男は香織のベッドに近づくと掛けられていた毛布をめくり、スカートの中に手を入れた。香織は下半身を触られている感覚に目が覚めたが、一瞬、何が起きているのか分からなかった。

香織が目を覚ましてから、時間的には十秒も経っていなかった。目の前にいる男の姿に、香織は甲高い悲鳴をあげた。香織の上に乗っていた男は咄嗟に香織の口を塞いだが、悲鳴はすでに保健室の外に響いた後だった。

悲鳴を聞きつけた体育教師の桜井が、壊れるほどの勢いでドアを開けて飛び込んできた。桜井は香織に乗っている男を背後から掴むと、力ずくで床にねじ伏せた。柔道四段の桜井に押さえつけられた男は、身動きすることも出来ず観念したのか、グッタリとなった。男の腕を背後に決めて尻餅をつかせた状態にした桜井は、男の顔を見て驚きの声をあげた。

「村中先生じゃないですか！　一体どうしたんですか！」

男は英語教師の村中だ。桜井は決めていた腕を放して村中を自由にしたが、村中は肩を落とし、下を向いたままじっとしている。それから一分も経たないうちに、他の教師と生徒が保健室へ駆け込んできた。桜井は村中と香織を職員室へ行くように促した。

「さあさあ何でもないから、皆、教室へ戻りなさい」

桜井の言葉に生徒たちは口々に不満を言いながら、教室へと戻っていった。

職員室へ入った村中と香織に、校長と教頭が説明を求めた。桜井が口火を切り、悲鳴から村中を取り押さえたところまでを説明した。

「島崎さん、なぜ悲鳴をあげたんですか?」

校長の質問に声を詰まらせ、涙をこぼしながら香織が答えた。香織は村中の行為に、ひどいショックを受けている。

「気分が悪くなって保健室のベッドで休んでいたら、いつの間にか眠ってしまったんです。しばらくして、太腿を触られているような気がして目が覚めたら、村中先生が上に乗って、スカートの中に手を入れていたんです。それでビックリして悲鳴をあげたら口を塞がれ、そのときに桜井先生が飛び込んできて助けてくれたんです」

校長、教頭、桜井には、香織の言ったことが信じられない。なぜなら、村中は真面目で明るく教育熱心で、曲がったことが大嫌いな性格だからだ。

「村中先生、島崎さんの言ったことは本当ですか?」

教頭が信じられないと言った表情で聞いた。

「はい。間違いありません。島崎さんの言ったとおりです」

村中はヒザの上に両手を置き、うなだれたまま小さな声で答えた。

「なぜそんなバカなことをしたんですか! これは犯罪ですよ!」

校長は語気を荒げ、子供を叱るような口調で怒鳴った。
「なぜこんなことをしたのか自分でも分からないんです。島崎さんを乱暴しようとしたのは事実ですが、なぜなのか分からないんです」
「そんなバカな！　自分でやっておきながら分からないなんて・・。とにかくこのまま済ますわけにはいかないので、警察を呼ぶことにします」
校長の言葉に村中は、自分の人生が崩れ落ちていくのを感じた。女房と二人の子供の人生も狂わすことになるだろうという思いと共に。

3―4

大手商社勤務の藤島信也は、大阪支店の営業一部に配属されて、食品や半導体関連など内陸の客先を担当していた。入社して五年が過ぎた今年、四月の人事異動で営業二部への配属となった。営業二部は、コンビナートの客先を担当する部署だ。

藤島は今年二十七歳になる。三十歳までには結婚しようと漠然と考えているが、交際している女性はいない。内陸の客先担当のときは、その明るく人見知りをしない性格が客先に気に入られ、毎年、売上予算を達成していた。

営業二部に配属された当初は、今までと違う業種の客先に興味がわき、やる気満々だったが、半年経った今は、そのときの勢いは見る影もなくなっている。

心配した上司の山田が時々声を掛けて元気付けてはいたが、まったく効果はない。山田が理由を聞いても、大丈夫ですからと答えるだけだ。

営業一部のときの元気ハツラツとした面影はなく、傍から見ていると鬱病のように見える。口数も少なくなり、藤島の取り柄が明るい性格だと言っても、今の彼を見たら誰も信用しないだろう。

藤島の元気のない原因は、藤島が担当している大手A社の石井にあった。購買課長の石井は、A社という虎の威を借る狐なのだ。何処にでもこの手の人間はいるものだが、石井の場合は度を越している。

仕入れ業者に対する口の利き方や態度は横柄そのもので、社内での評判も悪いが、誰も注意する者はいない。二十代と若い藤島は、石井から完全になめられており、石井のストレス解消の標的となっているとしか思えないほど、徹底的にいたぶられていた。

藤島がアポの時間を指定して面会に行っても、三十分ぐらい待たされるのは日常茶飯事で、待たされた挙句、今日は都合が悪いから帰れと言われることも、度々ある。見積書にしてもベスト価格を書いて来いと言われ、これ以下の金額だと赤字になるという価格を書いて行ったところ、その価格からさらに大幅な値引きを要求され、結局赤字で受注し始末書を書いたこともあった。

こんな状況のため売り上げは増えても利益はほとんど出ず、藤島の社内での評価は悪くなる一方だ。

あるネゴ交渉のとき、石井から提示された価格だと赤字になるため、その価格での注文を辞退したところ、辞退するのなら今後お前の会社との取引は無しにすると、脅されたことがあった。A社という大手企業のバイイングパワーの前に泣く泣く赤字で受注してしまった藤島は、またしても始末書を書く羽目になってしまった。

藤島は、上司の山田が元気付けようと声をかけてくるのも好きではない。なぜなら、自分の悩みを山田は知っているからだ。その割に山田は、元気出せ。悩みがあったら相談しろ。という言葉しか掛けて来ず、始末書を提出するときは責任追及するだけで、何ら解決策を言ってくれたことは一度もない。

今のままでは苦痛の日々という想いしかない。出来ればA社から担当を外して欲しかったが、一番の解決策は石井がいなくなることだ。

そんな矢先、購買課長の石井が逮捕されるという事件が発生した。石井は自宅から会社までマイカー通勤をしている。事件当日、飲み会が予定されていたため、石井は電車とバスを乗り継いで出勤することにしていた。

朝自宅を出た石井は電車に乗ったが、車内はいつもの通り混んでいて座ることは出来ない。つり革に掴まることもできない石井は、

押されながら車内の中央まで来ていた。
気がつくと石井の前に、二十歳半ばと思えるロングヘアーの女性が立っていた。石井に背中を向けており、彼女から石井の姿は見えない。石井はカバンも何も持っていなく両手は自由だ。

電車が発車して間もなく、石井の右手が動いた。女性のコートに手を入れ、スカートの右側にあるジッパーをゆっくり下げると、右手を入れた。女性は振り向いて石井を見ようとしたが、混雑しているので振り向くことが出来ない。一分ほど経ったとき、女性が石井の右腕を掴んで抑えたまま、声をあげた。

「痴漢よ！　この人痴漢よ！　誰か警察に連絡してください！」

石井の後ろにいた若い男性が女性の声に石井を見てみると、石井の手は女性のコートの中に入っており、その手はしっかりと女性に握られている。

「この痴漢ヤロウ！　警察に突き出してやる」

男性に背後から腕を取り押さえられた石井は、周りの乗客の視線も一斉に浴び、もはや観念したように首を垂れ、じっとしていた。石井の頭の中を、走馬灯のようにいろいろな想いが駆け巡った。石井には自分の人生が崩れていく音が聞こえていた。
次の駅で男性に引きずり出された石井は、駆けつけた駅員に連れられ警察へ連行されることになった。事情聴取のため被害者の女性も同行した。警察へ連れて行かれた石井の取調べが始まった。

「あんた名前は？」
「石井孝之です」

「家族は？」
「女房と三人の子供が居ます」
「サラリーマンやろ？　どこの会社？」
「すみません。会社と家族には内緒にしてもらえないですか？」
石井の答えに業を煮やしたのか、被害者の女性が割り込んできた。女性は太田可奈子と名乗った。
「あなた何を自分勝手なこと言ってるの！　あなたは痴漢よ。犯罪者なのよ！犯罪を犯したんだから、新聞にもニュースにも出て当たり前じゃないの！　ふざけたこと言わないでよ」
可奈子は怒りを抑えようともせずに、スカートのジッパーを下げられ、石井の手が入ってきて下腹部を触られたことを話した。怒りに燃えた可奈子の目は、話しているあいだ石井を睨みつけていたが、石井は視線を逸らすように下を向いたままだ。
「太田さんが言うたことに間違いないな？」
「間違いありません」
警官の質問に、石井は蚊の泣くような声で答えた。
「なんで痴漢なんかしたんや？」
「分からないんです。こんなことしたら掴まることは誰でも分かるのに、なぜ痴漢をしたのか今考えても分からないんです」
石井は正直に答えたが、可奈子の怒りは収まらない。
「そんな馬鹿げた言い逃れをしても、あなたが痴漢をしたことは事実なのよ。私は許すつもりはありません」
石井は懲戒免職は免れないだろうと思った。なぜ痴漢をしてしま

ったのか、いくら考えても分からなかったが、痴漢をしたという事実を消すことはできない。いくら真実を言ったところで、誰にも信じてもらえるとは思えない。

決して順風満帆とは言えないが、今まで築き上げてきた生活と、今からの人生が音をたてて崩れていくのを感じていた。女房と三人の子供たちの悲しそうな顔とともに。

翌日の朝刊の三面記事に石井逮捕の記事が載っていた。自宅で出勤前にその記事を読んだ藤島は、思わずガッツポーズをしながら、やった！　と叫んだ。藤島は石井とは対照的に、これで自分の人生は好転すると確信したのだった。

3―5

「将君、今夜彩子ちゃんと一緒に俺の家に来ないか？　手料理をご馳走するよ」
「ありがとうございます。美味しい料理、期待してます。サイフの心配はしなくてもいいですよね？」
「アッハッハッハ。相変わらずとぼけた男だな、きみは。アッハッハッハ」

将と彩子はテレポートで赤井の部屋に現れた。二人がテレポートで来るのは分かっているのだが、突然目の前に現れた二人の姿に、赤井は危うく悲鳴をあげるところだった。
「百戦錬磨の赤鬼さんが、何をビックリしてるんですか」
「そう言うけどな、ビックリしないほうがおかしいぞ。やっぱりきみは凄いよ」

赤井は心底将の超能力に感心すると、鼻歌を歌いながら出来上がったばかりの料理を運び始めた。
赤井は料理が上手だ。身体が温まるようにと、今日の料理は鍋物だ。アルコールが入った赤井は上機嫌だ。将と彩子は話し上手の赤井の聞き役に回っていたが、彩子は気になっていることを赤井に聞いてみることにした。

「赤井さん、私、赤井さんと付き合うようになってから、いろいろな事件のことが気になるようになったんです。それで気になった事件の記事を切り抜いて、スクラップブックに貼ってるんですけど、面白いというか、あることに気がついたんですけど、見てもらえますか？」
彩子はそう言うと、持ってきたスクラップブックを広げた。それ

にはいろいろな記事が貼ってあったが、赤丸を付けてある記事が赤井の目を引いた。

「彩子ちゃん、今言った面白いことって、その赤丸の記事のこと？」

「そうです。この赤丸の事件には、ある共通した点があるんです。赤井さん、分かりますか？」

赤井は赤丸の記事を順番に見てみた。事件の内容は見なくても、タイトルだけでどんな事件かは全て知っている。

「尾張旭のストーカー通り魔事件、千葉の女生徒強姦未遂事件、堺市の痴漢事件、埼玉の母子殺害事件か・・」赤井は小さく呟くと、改めてこれらの事件について考えてみた。

「マサルくん分かる？　テレパシーで頭の中を見るのは反則だからね」

赤井と将は、あれでもない、これでもないと、ぶつぶつ言いながら考えていたが分からない。

「降参。まいった。分かりませ～ん。彩子刑事、教えてください」

「この赤丸の事件は、犯人が逮捕されて解決したかのように思われてるけど、私は解決していないと思うの。何故かと言うと、犯人の犯罪動機が不明というか、犯人自身が犯罪動機が分からないって言ってるわ。マサルくんが犯人の意識を覗いて確認してるから、言ってることはウソではないわ。これが事件の共通点で、本当の意味で事件を解決するキーワードだと思うの」

「素晴らしい！　着眼点が凄いよ。確かに彩子ちゃんの言うとおりだ。犯罪を犯したのは逮捕された連中だけど、犯罪動機を与えた奴は、どこかにいるな！そいつを捕まえない限りは、同じような犯罪が繰り返されるぞ」

「今回逮捕された犯罪者は鵜飼いの鵜で、本当の犯人は鵜を操って

いる鵜匠なんだ！　その鵜匠が事件を起こしてるんだ」
　将も彩子の仮説に、今まで何となく腑に落ちなかったことがクリアになった。赤井は彩子の話を聞いて、いっぺんに酔いが醒めてしまった。

「私の仮説が正しいかどうかは分からないけど、少なくともこれらの事件に関してはそう考えると、事件の真相が見えてきそうな気がするでしょう？」
「彩子ちゃん、間違いないよ。君の仮説は正しいぞ。警察は犯人逮捕で解決したと思ってるけど、この分だと動機が分からないといった事件が、今後も起きるぞ」
「しかし、この鵜匠を捕まえるのは難しいですね。今のところ彩ちゃん以外に、鵜匠のことに気づいている人すらいないでしょう？それに、事件には全く鵜匠の影が出てきてないですから」
「将君の言うとおりだな。普通の捜査では何も分からないだろうな。性別も年齢も国籍すらも」

　翌日から彩子が言った事件について、赤井は徹底的に関連性を調べたが、結局、鵜匠につながる手がかりは、髪の毛一本も見つけることが出来なかった。やはり彩子の仮説は単なる偶然に目を付けただけで、鵜匠というのは最初からいないのではないかと思った。

3－6

四月に入り、将と彩子は二年生に進級した。将と彩子が通っている高校では、相変わらず二人にラブレターをくれたり、直接交際を申し込んで来たりする同級生や先輩、後輩の生徒がいたが、二人とも適当な理由を付け、相手を傷つけないように断っていた。

ある日将は下校途中に、追いかけてきた他校の女生徒に呼び止められた。何事かと振り向くと、女生徒は一通の手紙を渡すと足早に去って行ってしまった。突然の出来事に、将は女生徒の人相も良く見ていない。

まるでテレビドラマのワンシーンのような状況に、将は一瞬、誰かに見られたのではないかと周りを見回したが、大丈夫だった。なぜかほっとした将は、もらった手紙をカバンに入れると、何事もなかったかのように歩き出した。手紙の内容の予想は付いていたが、それよりも、どうやって断るかが重荷だった。

帰宅した将は、女生徒からもらった手紙を開けてみた。案の定、ラブレターだ。封筒には手紙と一緒に、本人の写真も入っていた。ちょっと勝ち気な感じもするが、一緒に歩いたら人が羨むぐらいの可愛い娘だ。もし彩子がいなかったら、彼女と付き合うかもしれないと思った。将は手紙に書いてあった彼女の携帯メールへ返事を送った。

「今は大学受験に向けて勉強に専念したいので、せっかく誘ってもらったのに、すみません。大学に合格したら青春を楽しみたいと思います」

という、今まで断り続けたのと同じ内容を書いた。将が返事を送ってから五分も経たないうちに、彼女からメールが届いた。

「私の誘いを断ったのは中瀬さんが初めてです。きっと後悔しますよ」

後悔するとはどういう意味だろう？　意味深な返事だ。断ったことを後悔するのか、あるいは断ったことを後悔させられるのか。どちらにしろ何かしら嫌な予感がした。

それから一週間が過ぎた頃、先週メールで断った女生徒からメールが届いた。彼女の名前は大原風香、某私立高校の二年生だ。

「今度の土曜日に、一度だけでいいので会ってください。返事を待ってます」

先週のメールに書いてあった、きっと後悔しますよ。の文字が頭をよぎったが、その言葉が気になっていた将は行ってみることにした。

土曜日の午前十一時の約束だが、将は十分前に着いていた。待ち合わせ場所は、名古屋のオアシス21だ。ここは名古屋の中心部の栄にあり、ファッションやいろいろなグッズの店舗、回転寿司やファーストフードなどの飲食店が集まった商業施設だ。施設は水の宇宙船や緑の大地などがあり、イベントなども行われていて、楽しいひと時を過ごすことができる。

緑の大地のベンチに座って風香を待っている将の耳に、可愛らしい声が届いた。振返るとジーパン姿の風香が立っている。私服の彼女は、制服とは違った雰囲気だ。

スラリと伸びた足、キュッとあがったヒップは、彼女のためにジーパンがあるみたいに良く似合っていて、芸能人と見間違うほど魅力的に見える。身長は彩子と同じぐらいだ。肩にかかるサラサラの黒髪が似合っている。芸能人の仲間由紀恵に似ていて、少し薄化粧し

てきた顔は大人びて見える。

「お待たせ。時間は大丈夫ですか？　急に呼び出してごめんなさい」
「いや、いいよ。今日は五時までに帰ればいいから」
「用事があるんですか？」
「空手の道場に通ってるんだ。サボってもいいけど、館長がうるさいから」
「じゃあ強いんですね！　何段ですか？」
「白帯だよ。小さい頃身体が弱くて病弱だったから、健康のためにやってるだけなんだ。だからラジオ体操みたいなもんで、全然強くないよ。でもおかげで風邪を引かなくなったよ」
「あのぉ、腕組んでもいいですか？　イヤならいいんです」
「別に構わないけど」
「やった！」

風香は嬉しそうに腕を組んできた。将は悪い気はしなかったが、誰かに見られるのではないかとハラハラしていた。彩子に見られたら、それこそ絶交されるかもしれないと思うと、気がきではない。マクドナルドで昼食を済ませた二人は、デザートにアイスクリームを買って食べながら、あてもなく歩いた。

休日のオアシス２１は若者で賑わっている。若いカップルが多く、その中でも将と風香は、ルックスとスタイルの面でも際立っている。すれ違うカップルの中には、将と風香に羨ましそうな視線を送るものもいた。

風香は将とのかりそめのデートを満喫していた。彼女には将を落とせる絶対の自信があった。今まで何人ものボーイフレンドと付き合ってきたが、すべて風香が一目惚れをして落としたのだ。

3―7

ウィンドウショッピングを楽しんだり、水の宇宙船や緑の大地の施設を、将と一緒に歩くだけで風香は楽しかった。一日だけの約束なので、将は風香が楽しいときを過ごせるように、彼女に対して気を遣っていた。風香の楽しそうな姿を見ていると、彩子と付き合っていなかったら、風香と付き合っていたかもしれないと思った。

楽しい時間は早く過ぎるものと相場が決まっている。気がつくと時計は三時半になっている。しきりに時計を気にしている将に気がついた風香が、核心に触れてきた。いつのまにか風香は友達言葉になっている。

「もう帰る時間よね。今日はありがとう。とっても楽しかったわ。将君、最後にひとつだけ聞いていい？」

「いいよ」

「これからも、私と付き合ってくれないかしら？」

風香は、将がノーと言えないほどの魅力的な笑顔で尋ねた。男心をくすぐる声と、少し斜め右から見えるルックスは、相手から見られる角度も計算しているように思えた。将が一瞬、付き合ってもいいかな？　と思えるほど、風香は可愛い。

「大原さん、ゴメン。メールにも書いたように、希望の大学に入りたいんで、今は受験勉強に集中したいんだ。僕の性格から言うと、彼女が出来ると勉強に集中できなくなると思うんだ。まして君のように可愛い女の子だと、尚更そうなりそうで。だから申し訳ないけど・・、ゴメン」

「毎日会う必要はないの。将君が会いたいときだけでいいの。決して勉強の邪魔になるようなことはしないわ」

風香は、将が必ずＯＫの返事をする自信があった。今まで自分に言い寄られて断った男は一人もいない。風香は自分の魅力を充分理解していたし、それは唯一無二の風香のプライドでもあった。

「気持ちはありがたいんだけど・・」

「私のことが嫌いなの？　将君の好みじゃないの？　それとも、付き合ってる人がいるの？」

「違う違う。そんなことないよ。君みたいに可愛くて魅力的な女の子が自分の彼女だったら、すごく嬉しいよ。でも僕は意志が弱いから、さっき言ったように、すぐに君にのめり込んでしまって勉強どころじゃなくなると思うんだ。だから・・」

「じゃあ、大学に合格したら付き合ってくれるのね？　あと二年間待っていればいいのね？」

「正直なところ約束はできない。その時は、君も僕も気持ちが変わってるかもしれないし、何があるか分からないから」

「結局、私とは付き合えないということね！」

今まで彼女は、自分の誇り高きプライドを崩してまで交際を頼んだことはない。いつも男が言い寄ってきていた。彼女が好きになり、交際を申し込んだ相手で断ったものは一人もいなかった。

「分かったわ！　じゃあ、もう二度と会わない」

風香の言葉には怒りの感情が込められていた。彼女の誇り高きプライドはズタズタだった。風香は将を許せなかった。絶対に、絶対に許せなかった。

楽しい時間のまま風香と別れるつもりでいた将は、最後の最後で風香の機嫌を損ねてしまった自分が、何かとんでもないことをしたような気になっていた。ふと将の頭の中を、きっと後悔することになりますよ。と言った風香の言葉がよぎった。

3―8

風香と気まずい別れかたをしてから約一ヶ月が過ぎた頃、弁当を食べ終わり、クラスの友達と雑談をしている将の携帯に番号非通知の着信が入った。

「もしもし、中瀬です」

「中瀬将さんですね？　私、あなたと大原風香さんがデートしている写真を持ってるんですけど、あなたの彼女に渡してもいいですか？」

「どなたですか？　一体、何を言ってるんですか？」

「だから、あなたがデートしている写真を、あなたの彼女に渡していいかと、聞いてるんです」

「目的は何ですか？」

「今日の午後六時に、荒越公園に来てください。そうすれば分かります」

一方的に言うだけ言って電話を切った相手に腹が立ったが、将は荒越公園に行ってみることにした。

約束の十分前に着いた将は、公園の椅子に座って電話の主を待った。荒越公園はテニスコートが二面ある小さな公園だ。この時間にテニスをやっている人はいなく、公園内にも人影はない。

六時を五分ほど過ぎたとき、植え込みの木の中から五人の若い男が現れた。年の頃は二十歳過ぎに見える。将は彼らと視線を合わせないように、彼らと反対方向へ身体を向けた。

男たちは雑談しながら、将のほうへやって来た。将が立ち上がりテニスコートのほうへと歩き出すと、男たちは少し足早になり将を取り囲んだ。将が男たちの輪の中から出ようとすると、男たちが前に立ちはだかり行く手を遮った。

「すみません。僕、友達と待ち合わせをしてるので、通してもらえませんか？」
「兄ちゃん、お前の待ち合わせの相手は俺たちだ」
「違います。僕が待ち合わせしているのは女子高生で、あなた方じゃありません。人違いじゃないですか？」

「兄ちゃん、お前の名前は中瀬将って言うんだろう？　もしそうだったら、俺たちがお前の待ち合わせ相手だ」
「でも電話を掛けてきたのは女子高生です」
「お前はアホか！　掛けてきたのは女子高生かも知れないけどな、待っているのはその女子高生かどうか分からないだろ。俺たちなんだよ」

「分かりました。それで、僕を呼び出した理由は何ですか？」
「理由は自分の胸に手を当てて考えたら分かると思うけどな、少しお前に反省してもらおうと思ってるんだ」
「すみません、何のことか分からないんです。やっぱり、人違いじゃないんですか？」
　正直なところ、将は何のことか分からない。心当たりはまったくなく、見知らぬ男たちに言いがかりを付けられる覚えもない。

「分からないんだったら教えてやる。お前、ある可愛い女子高生の気持ちを踏みにじっただろ。その彼女がどんなに傷ついたか知ってるのか？」
「大原風香さんのことですか？　あなたがたは彼女の知り合いなんですか？」
「知らないよ。彼女とは一度も会ったことないし、顔も知らないけどな、彼女が傷ついて泣いているというのを聞いて、お前に罰を与えようと思って呼び出したんだ」

将は男の言ってることが理解できない。一体誰に彼女の気持ちを聞いたと言うんだ。会ったこともないのに、何故こんなことをするんだ。将はテレパシーで男たちの考えを読んでみたが、彼らの言ってることは間違いない。ただし、風香が彼らに、将に罰を与えるように頼んだということはなかった。なぜなら、男たちの意識の中に風香はいなかったし、風香以外の誰かが頼んだということもなかった。

今はっきり言えることは、男たちが将に対して暴力を振るおうとしていることだが、男たちの意識の中に将を襲う動機がないのだ。動機がないのに襲おうとすること事体が有り得ない。まるで彼ら全員が、何かに操られているかのように動機のないまま将を襲おうとしているのだ。

「兄ちゃん、お前に恨みはないけど、乙女心を踏みにじった罰を受けてくれ。殺すつもりはないけど、少し入院することになるのは覚悟してくれ」

言い終わると同時に、男たちが一斉に将に殴りかかってきた。彼らの目には、泣き叫ぶ将の姿が見えるはずだったが、彼らの目に映ったものは信じられない光景だった。

男たちが将に殴りかかった瞬間、将は彼らの輪の外に出ていた。テレポートしたのだ。男たちは、将がどうやって輪の外に出たのか分からなかった。輪の外で空手の攻撃のポーズを取った将は、さっきまでとは別人に見えるほど、圧倒的な威圧感を放っている。その迫力に、男たちは殴りかかるどころか、後ずさりするものもいるほどだ。それほどの強力なオーラだ。

「たかが高校生のガキに、お前ら何をびびってるんだ！　やっちまえ！」

リーダーとおぼしき男の声に、全員が一斉に殴りかかってきたが、将の目にはスローモーションのように見える。左右の回し蹴りと後ろ回し蹴りが、途切れることなく繰り出された。それは傍から見ていると、踊りを踊っているような綺麗な動きだが、踊りと違っていたのは、常識を超えた桁違いの速さだった。

おそらく五人の男たちには、将の蹴りはまったく見えていなかったはずだ。その速さは、プロの格闘家でも避けきれるものではない。彼らが倒れるのに十秒もかからなかった。手加減をした蹴りだったが、それでも一、二週間は痛むだろう。将は彼らに近づくと話しかけた。

「誰に頼まれたんですか？」

「分からないんです。ただ、あなたを襲わないといけないような気になって、自分を抑えられなかったんです」

さっきまで威勢の良かったリーダーは、桁違いの強さの将に、自然と敬語になっている。それは将を自分より上だと認めた証拠だ。

「俺も同じです」

「俺も」

「俺も」

リーダーの言葉に同調するように、他の四人も同じだと答えた。

将は全員の意識を覗いてみたが、ウソは言ってない。電話で呼び出した女子高生と思える声の主も、彼らの意識にはない。不可解なことだらけだ。彼らの意識の中に、将を襲わせた犯人の手がかりとなるものは何もなかった。まるで完全犯罪だ。苦痛に顔をゆがめている男たちを残して、将は公園を後にした。

3－9

将は風香とのデートのこと、公園に呼び出されたこと、そしてそこでの男たちとの不可解な出来事の一部始終を彩子に話すことにした。話すというより相談だ。自分ひとりの力では、今回の謎は解けないと思ったからだ。ある日の土曜日、将は彩子の家を訪ねた。

「相談したいことって何？　心配事でもあるの？」

彩子が心配そうな顔をして尋ねた。

「彩ちゃん、正直に言うから怒らないでね」

将の言葉に、わざとらしくプッと膨れた顔になった彩子は、その表情さえも可愛い。将は彩子以外の女性とは、何があっても二人だけで会わないようにしようと心に誓った。

「実は一ヶ月ほど前に、ある私立高校の大原風香という女生徒と二人で、オアシス21に行ったんだ」

「だから怒らないでって言ったのね！　怒らないわよ。正直に話してくれるんだったら。でも内容しだいよ」

「おいおい、全部正直に言うけど、まったく何もやましいことはしてないからね。それだけは信じてくれよ」

言いながら将は、何だか自分たちが夫婦で、自分の浮気が見つかって弁解しているような感じに思えた。その感じも何となく嬉しい。

「彼女と行くことになった理由は・・・」

将は下校途中で手紙をもらったこと、メールで交際を断ったが、一度だけ会って欲しいと言われ、会ったことを話した。気まずい感

じになって別れたことや、その後公園に呼び出されたことなども、包み隠さず全て話した。

「分かったわ。怒らないわよ。マサルくんに最初から彼女と付き合う気がないことが分かったから」

言いながら彩子が抱きついてきた。しっかりと将を抱きしめると、耳元で囁いた。将はドキドキしながら、両手を彩子の背中に回した。

「ありがとうマサルくん、正直に言ってくれて嬉しいわ」

コンコン。ドアをノックする音が聞こえた。何事もなかったかのように離れた彩子が言った。

「なあに？」

「オヤツ持ってきたけど邪魔だったかしら」

「邪魔に決まってるじゃない」

彩子はそう言いながらも、ドアを開けてオヤツを受け取った。恵子はオヤツを渡すと、そのまま下りていった。オヤツは将の大好物のモンブランと、ミルクティーだ。二人はオヤツを食べながら話を続けた。

「なるほどねぇ。う～ん、何か引っかかるわね」

彩子はモンブランとミルクティーを口に運びながら、必死で考えている。モンブランを食べ終わり、ミルクティーを飲み干すと彩子が言った。

「ご馳走様でした。マサルくん、分かったわよ！」

とっくに食べ終わっていた将は、彩子が食べ終わるのを待っていた。開口一番、彩子の言葉に驚いた将が尋ねた。

「本当に？　一体どういうこと？」

「マサルくん、鵜匠の話しのこと覚えてる？」
「彩ちゃんの仮説の黒幕のことだよね。そいつがいろいろな事件の真犯人で、鵜匠が捕まらないことには、また事件が起きるって言ってたよね？」
「そうよ。結果論だけど、マサルくんが大原さんと会ったことは正解だったわ。彼女と会ったことで、鵜匠の手がかりが掴めるかもしれないわ」

思いがけない言葉に、将は霧が晴れていくような気分になった。赤井が必死で調査して何も分からなかった鵜匠の手がかりが、彩子によって明らかになりそうだからだ。

「鵜匠を見つけるには、鵜の首に繋いである紐を手繰っていけばいいんだけど、今までの事件では紐が見つからなかったから、鵜匠にたどり着くことが出来なかったの。でも大原さんとマサルくんが会ったことで、紐が見つかりそうなの」
「凄い！　さすが彩ちゃんだ。どうやったら見つかるのか教えてよ」
「えへん！　教えてあげるから、オアシス２１でデートしてくれる？」

彩子はからかうように横目で将を見ながら言った。彩子とは毎日会っている将だが、その表情は、ドキッとするぐらい愛くるしく可愛い。
「もちろんＯＫ。マクドナルドも奢るよ。これからは、彩ちゃん以外の女の子とは一緒に行かないようにする」

「よろしい。じゃあ、教えてあげるわ。今までの事件で不思議だったのは、犯人に犯罪の動機がなかったことだけど、私は動機はあっ

たと思うの。ただその動機は、犯人の意識の中にはなくて、外から与えられていたと思うの。要するに誰かに操られていたのよ。だからマサルくんがいくら犯人の意識を調べても見つからなかったし、犯人自体、自分の動機じゃないから記憶になかったのよ」
「まるで、ロボットをリモコンで動かしてるようなものだね」
「そうよ。でも疑問があるでしょう？」

「二つあるよ。ひとつは、どうやって鵜匠に連絡をするのか？　二つ目は、鵜匠はどうやって犯人を操るのか？」
「その二つの疑問が分かれば鵜匠を捕まえられるんだけど、やっとその方法が分かったわ」
彩子は自信に満ちた表情で、力強く言い切った。

「マサルくん、大原さんの意識に入ることは出来る？」
「彼女の意識に入ったことがないからシグナルは分からないけど、どこの高校かは分かってるから、探して入ることは出来るよ」
「彼女の意識に入ったら、たぶん彼女が鵜匠と連絡を取ってるはずだから、探して欲しいの」
「なあんだ。大原さんの意識を探ればすぐに解決するのか」
「そんなに簡単じゃないわよ。彼女は鵜匠と会っていないし、鵜匠がいることすら知らないと思うわ」

「じゃあ、俺は彼女の意識に入って、何を調べたらいいの？」
「私が思うには、彼女はインターネットの闇サイトかどこかにアクセスして、マサルくんへの仕返しを依頼したと思うの」
「分かった。そのサイトで依頼を受けるのが鵜匠で、彼は何らかの方法で鵜を見つけて、操るための紐を付けるということだよね？」
「そうよ。紐を付けられた鵜は、彼の意のままになるってわけよ。そして、大原さんの依頼どおりのことをやった鵜は、やったという事実は覚えているけど、動機が分からないのよ。自分の意思でやる

んじゃなくて操られているんだから、いくら考えても分かるわけはないわ」

以前彩子は、テレビで注意を促していた闇サイトによる犯罪のことが記憶の片隅に残っていて、将の話を聞いたときに、今回の不思議な事件の解決策を思いついたのだ。

「じゃあ、来週早々に大原さんを見つけて、意識を探ってみるよ。どこの闇サイトにアクセスしたかを調べればいいんだね？」
「お願いね。思うんだけど、鵜匠には何か特別な力があるわね」
「俺みたいな超能力？」
「マサルくんほどじゃないかも知れないけど、人を操るんだからテレパシーみたいなものじゃないかしら」
「鵜匠を見つけたら、俺と鵜匠との一騎打ちになるな」

彩子は超能力者同士の戦いはどんなものなのか、想像もつかなかったが、殴り合いの喧嘩と違って想像もつかないだけに、不安が膨らむのを抑えることは出来なかった。

「彩ちゃん、このことは赤井さんにも話したほうがいいと思うんだけど」
「私もそう思ってたの。犯人を逮捕するのは、あくまで警察の仕事だからね」
「今から赤井さんにテレパシーで連絡するよ」

将は静かに目を閉じると、赤井にテレパシーを送った。五秒ほどで目を開けた将は、にこりとしてピースサインを出した。わずか五秒で全ての情報が赤井に伝わったのだ。

「彩ちゃん、俺、今日はこれで帰るよ」
「来週の日曜日はオアシス２１でデートよ。忘れないでね」

「了解しました！」
立ち上がって敬礼した将の右頬に、彩子はマシュマロのような軟らかい唇を、軽く押し当てた。

3－10

翌週の月曜日、昼食を食べ終わった将は机に腕を置いて頭を乗せ、昼寝をしているフリをして幽体離脱をした。一分弱で離脱した意識体の将は、風香のいる高校へと瞬時に移動すると、彼女を発見した。意識体の将は彼女の意識に潜り込むとすぐに抜け出し、自分の肉体に戻った。離脱してから十秒しか経っていない。風香のシグナルを覚えた将は、今晩、彼女の意識を探ってみることにした。一刻も早く鵜匠を見つけないと、次の犯罪が起きるからだ。

夕方六時に夕食を済ませた将は、ベッドに横になると幽体離脱した。離脱したあとの肉体は、傍から見る限りでは、目を閉じて眠っているようにしか見えない。意識体の将は、覚えている風香のシグナルを瞬時に見つけた。

彼女の意識に潜り込んだ意識体の将は、彼女がアクセスしたインターネットのサイトを見つけた。サイト名は、サイレント・パニッシャー。彼女の依頼は、将を少し痛めつけて欲しい。殺しはダメ。という内容だ。

サイレント・パニッシャーは、依頼者の要求を必ず実行すると謳っていた。ということは、将はまた狙われるということだ。風香は依頼に対する費用として、十万円を払っていた。

意識体の将は、なぜそこまで風香が自分を憎んでいるのかを探った。理由はすぐに分かった。それは彼女の唯一無二と言えるプライドが、将によってズタズタに傷つけられたからだ。

彼女にとってそのプライドは、自分の存在理由そのものなのだ。それが将によってズタズタにされたのだ。可愛さ余って憎さ百倍というコトワザのとおり、風香はプライドを傷つけられたことによって、将に持っていた恋心の百倍もの憎しみを持ってしまったのだ。

意識体の将は、良かれと思って一日だけのデートをした自分を、偽善者だと思った。彼女の気持ちを軽々しく考えた自分を、情けなく思った。お前は一体、何様のつもりだ！　自分を襲った犯人は風香ではなく、自分自身なのだ。

意識体の将は肉体に戻ると気持ちを切り替え、サイレント・パニッシャーにアクセスしてみた。そのホームページは極めてシンプルに作られていて、受付は電話のみとなっている。

将は調べたことを、テレパシーで彩子に伝えた。

「膳は急げよね。今から電話してみるわ」

「ちょっと待って。俺が彩ちゃんの意識に潜り込んでからにしてね」

将は彩子の部屋へテレポートすると、ベッドに横になり幽体離脱した。意識体の将は、彩子の意識に潜り込んだ。

「彩ちゃん、電話していいよ」

「しっかり私を守ってね。くれぐれも鵜匠に気づかれないようにね」

彩子は、サイレント・パニッシャーのホームページに載っている電話番号をダイヤルして、応答を待った。受付時間は、午前十時から午後七時までとなっている。五回の呼び出し音のあと、電話はつながった。

「はい、お電話ありがとうございます。サイレント・パニッシャーです」

電話の相手は若い女性の声だ。その女性は、決まり文句であると思われる言葉を続けた。

「当サイトは信用第一でやっております。今から当サイトの説明を致しますので、信用できないと思われたら電話をお切りください」

彩子はそのまま女性の説明を聞いた。

「当サイトでは、あなたのご依頼を必ず実行することをお約束します。ただし、依頼内容に制限があります。当サイトで出来ることは、人間関係に関することだけです。誰かに御仕置きをしたいけど自分

では出来ない、といったことなどを、あなたに代わって実行します。料金は依頼内容によって変わります。依頼するにしても、あなたの個人情報を細かく言う必要はありません。匿名でＯＫです。料金は後払いです。あなたの依頼が成功したあと、払っていただきます。今の説明で納得していただいたら、担当の者と代わりますので、依頼内容をお話しください。信用できないと思われたら、電話をお切りください。ではどうぞ」

説明は、録音されているテープを流している。意識体の将は、彩子が説明を聞いているときに、彼女の意識に潜り込んできた意識を捕らえていた。それは、意識体ではなくテレパシーだ。将よりも能力的にレベルが低い。そのために、彩子の意識に同化することで自分の存在を隠していた意識体の将に、相手は気づかなかった。

3―11

意識体の将は、侵入してきた鵜匠と思われるテレパシーのシグナルを記憶した。これで電話の相手が誰なのか、確実に見つけることができる。やはり彩子の推理は正しかった。鵜匠は彩子の調べが済んだのか、すぐにテレパシーが切れた。

テープの女性の声が終わった後、彩子が電話を切らずにいたので、相手は彩子が納得したと思ったのだろう、担当者と思われる男が電話に出てきた。

「お客様、ご依頼内容を言ってください。人に関する恨み辛みを解決します。殺人もやります。お客様は私に会う必要はありません。ご依頼事が成功したら、料金を指定口座へ振り込んでいただきます。そのときに名前が必要なので、偽名でいいので、思いついた偽名だけ教えてください。何か質問ありますか？」

「料金を聞きたいんですけど」

「相手に加える制裁内容によって違います。高いほうから順番に言いますと、殺人は百万円、半殺しは三十万円、相手を犯罪者にするのは二十万円、少し痛めつけるのは十万円です。今言ったこと以外のご依頼の場合は、内容をお聞きしてから決めさせていただきます」

「依頼するとしたら、何を言えばいいんですか？」

「はい。まず制裁を加える相手の名前と居場所、やって欲しい制裁内容の二つで結構です」

「私が警察に捕まることはないんですか？」

「絶対にありません。保障します」

「そう言われても、何を根拠にあなたの言葉を信用したらいいんですか？」

「たとえば、尾張旭のストーカー通り魔事件、千葉の高校教師による女生徒強姦未遂事件、堺市の大手企業に努めるサラリーマンの痴漢事件などをご存知かと思いますが、あの事件は私がやらせたものです。逮捕された犯人こそが、制裁を受けた人たちです。犯人を逮捕したことで、警察は事件が解決したと思っています。私に仕事を依頼した依頼人は、どこにも出てこないし、探しようもありません」

「分かりました。私の名前は奈津子です。料金のこともあるので少し考えてからかけなおします」

「はい。お電話お待ちしております。参考までに申しますと、横浜で一週間後ぐらいに小さな事件が起きます。依頼者は主婦の方で、生意気な近所の主婦に、二度と人前に顔を出せないように恥をかかせて欲しいという依頼です。ちなみに料金は五万円です」

そう言うと、男は自分から電話を切った。意識体の将は自分の肉体に戻ると、起き上がった。

「マサルくん、何か分かった？」

彩子は早く結果を知りたいらしく、身を乗り出して聞いてきた。

「鵜匠のシグナルを捕らえた」

「やったね！　これで鵜匠が誰なのか分かるわね」

「でも、分かっただけでは捕まえることは出来ないよ。鵜匠が実行

犯だということが証明されないと。でも鵜匠は超能力者だから、証拠を掴むのは難しいな」

「考えたら、何だか変よね」

「何が？」

「テープの声が終わったあと、鵜匠と思われる男が詳しく説明したわよね。殺人の依頼もＯＫと言ったけど、もし電話を掛けてきたのが警察だったら、すぐに捕まるんじゃないの？　それなのに、どうしてあそこまで言ったんだろう？」

「理由は簡単さ。テープの声が流れているときに、鵜匠が彩ちゃんをテレパシーで探ってたんだ。それは電話を掛けてきた相手が、どんな人間なのかを調べるためだ。テレパシーを使うと全てが分かるからね。もし相手が警官だとしたら、違う説明をすると思うよ。だから鵜匠の正体もサイトの正体も、絶対にバレルことはないよ。なにせ相手は超能力者だからね」

「鵜匠が私の頭の中を探ったということは、マサルくんみたいに幽体離脱も出来るのかしら？」

「その辺は分からない」

「それと、一週間後に横浜で事件を起こすと言ってたけど、それって止めること出来る？」

「それにはまず、鵜匠の意識に潜り込まないとダメだ。あとで鵜匠を探しに行ってみるよ。じゃあこれで帰るから」

「うん分かった。じゃあまたね」

　将は自分の部屋へテレポートした。鵜匠のこともそうだが、風香を傷つけたことを後悔していた。ノーならノー、イエスならイエスとはっきり言うべきだと思った。今回の風香との一件は、自分の曖昧な行動によるものだと将は深く反省したが、今となってはどうすることも出来なかった。

3―12

時計を見ると、午後十時になっている。将はベッドに横になると、幽体離脱した。意識体の将が鵜匠のシグナルを見つけるのに、五秒も掛からなかった。鵜匠は、神戸市の４ＬＤＫの高級マンションに住んでいる。そのマンションは、神戸の綺麗な夜景や、六甲山の山並みも眺望できる場所にある。

ソファーでくつろいでいる鵜匠は、二十代後半ぐらいに見える。いわゆるイケメンと言われるルックスだ。隣には、芸能人と見間違うような女性が座っている。年の頃は、二十歳を少し過ぎたぐらいに見える。二人はウィスキーを飲みながら、他愛のない話をしている。

このマンションがサイレント・パニッシャーの拠点かどうかは、分からない。意識体の将は、まず女性の意識に潜り込み、鵜匠に関する情報を探ることにした。鵜匠は超能力者だ。慎重にやらないと、見つかってしまう可能性がある。

女性の名前は小林裕美。年齢は二十二歳。鵜匠の名前は野崎真也と分かった。野崎の年齢は二十八歳だ。彼女は野崎が超能力者だとは知らないし、野崎の闇サイトのことも知らない。

裕美の意識から抜け出た意識体の将は、野崎の意識に潜り込んだ。その瞬間、野崎が叫んだ。

「誰だ！」

意識体の将は野崎の声を聞き終える前に、自分の肉体に戻った。気づかれないように潜り込んだつもりだったが、野崎に見つかってしまったのだ。幸い、すぐに抜け出たので、将の正体は野崎にはバレていない。

「急に大声出してどうしたん？」
「何でもない。誰かの気配がしたような気がしただけや」
心配そうに尋ねた裕美に、野崎は少し青ざめた表情で答えた。
「ここは十階よ。セキュリティも掛かっているし、誰も入って来れへんわ」
「そうやな。きっと俺の勘違いだ。ちょっと疲れとるのかもしれへんな」
野崎は自分に言い聞かせるように言った。

彩子と将は赤井の自宅に来ていた。彩子は風香の一件から始まって、闇サイトを見つけたこと、そこへ電話をして聞いた内容を順番に話していった。

「やっぱり彩子ちゃんの仮説は正しかったんだ。いろいろと起きた動機のない事件の黒幕は、鵜匠だったのか」
「鵜匠の名前は野崎真也で、歳は二十八歳。神戸の高級マンションに住んでいます。彼もマサルくんと同じ超能力者です」
「将君は善人だから安心だけど、その野崎が超能力者ということは、大変な事件が起きるな。たとえが悪くて申し訳ないけど、言い換えれば超能力者は究極の兵器だから、その能力を悪用されたら何でもできるし、誰にもそれを止めることは不可能だ」
「大丈夫です。と言っていいのかどうか分からないんですけど、野崎の超能力は僕よりもレベルが低いです。使えるのは、テレパシーぐらいじゃないかと思ってるんですけど・・」

「野崎の能力を確かめることは出来ないのか？」

「意識に潜り込めば分かるんですけど、潜り込んだらバレるので出来ないんです。でもこの前、一瞬だけ入ったときに感じたのは、テ

レパシーだけだったように感じたんです。テレパシーと言っても、僕のとは違う感じでしたけど」

「君の正体はバレなかったのか？」

「すぐに抜けたので大丈夫だったんですけど、たぶんこれからは警戒されると思います。それで今後、どうしたものかと作戦を練るために、赤井さんに連絡したんです」

「状況は分かった。二人とも良くやってくれたね。ありがとう。さて、じゃあ、作戦を練るとしようか。その前に、彩子ちゃんはまた鵜匠へ電話をするの？」

「三人で作戦を練って、必要ならかけます。だって私しかかけられないでしょう？　野崎は超能力者だから、電話を掛けてきた相手のことをテレパシーで調べるんだから」

「そうだな。その時は彩子ちゃんに頼むしかないな」

3―13

以前野崎は小さな町工場に勤めていた。町工場ではいろいろな機械に使うネジや座金、ボルト、ナットなどを作っている。仕事は単調なうえに、職場環境は悪く、そのうえ給料も安い。その仕事は嫌いだったが、生活していくために仕方なくやっていた。中学卒業と同時に働き始めた野崎は、転職しようにも職が見つからなかった。

そんな矢先、仕事の疲れからか居眠り運転をしてしまい、交通事故を起こしてしまったのだ。幸い人身事故ではなく自損事故だった。五十キロのスピードで電柱に激突したのだが、運良く大怪我には至らなかった。

救急車で運ばれた野崎は、すぐに意識が戻ると思われたが、一週間経っても戻らず、医者は植物人間になるかもしれないという診断を下した。野崎が勤める工場の同僚たちが心配する中、十日目に意識が戻った。

野崎は意識をなくしている間の記憶はなかったが、入院前と比べて、何かが自分の中で変わったような気がしていた。退院してからしばらくは、その何かが分からなかった。

ある日曜日、同僚の野村と喫茶店に入った野崎は、何気なく店内を見回してみた。そのとき野崎の視線が、二人連れの若い女性に釘付けになった。野崎を見ていた野村が、からかうように言った。

「野崎、あの二人連れの女性、メッチャ可愛いな。芸能人にも引けを取らへんで。声かけてみよか?」

学歴と仕事にコンプレックスを持っている野崎は、声をかける勇気など持ち合わせていない。孤児院で育った野崎はクォーターだ。日本人離れしたルックスは道行く女性の目を引くのだが、コンプレ

ックスが邪魔をして声をかけることは出来ない。

「いや俺は遠慮する」

「またかよ。当たって砕けろだ。行動せえへんことには、一生彼女は出来へんで。それともお前、彼女たちが声を掛けてくるのを待ってんのか？　そんなこと絶対あらへんで」

「そうやなくて、彼女らが俺のことをどう思ってるのかが分かれば、ええんやけど」

「お前はアホか。そんなんやと折角のチャンスを逃してしまうで。まぁいっぺん、彼女らが何思うてるんか、超能力でも使って調べてみな」

からかうように言った野村のその言葉がきっかけだった。野崎は一人の彼女を見つめると、彼女の考えていることを読み取るべく神経を集中してみた。すると彼女の考えが手に取るように野崎に聞こえてきたのだ。それは聞こえるというより、彼女の意識がそのまま野崎の頭に入ったような感覚だ。野崎は数秒の間に、彼女に関するすべてのことを知ってしまったのだ。

野崎は不思議な出来事に何がなんだか分からなかったが、今度は彼女に自分に声を掛けるように念じてみた。彼女たちに声を掛けようと野村が立ち上がったのと同時に、野崎が念を送った女性も立ち上がった。出鼻を挫かれたような顔をしている野村には目もくれず、立ち上がった女性は野崎を目指して歩いてきた。

「あのう、もしよろしかったら、私たちの席で一緒にお話しませんか？」

「いいですよ。喜んで！」

野崎は奇跡が起きたと思った。自分が念じたとおりになったのだ。

今まで神様はいないと思っていた。なぜなら、いくら神様にお願いしても何も変わることがなかったからだ。しかし今は、神様の存在を信じざるを得なかった。

女性の誘いに野崎は満面の笑みで応えた。イギリス人の血が四分の一混じったクォーターの野崎の笑みは、声をかけた女性を虜にするには充分過ぎた。

野村と一緒に彼女たちの席に移った野崎は、今日一日は彼女たちと一緒に行動することに話をまとめた。野崎の積極的な行動と会話に、野村は驚きを隠せない。野崎に声を掛けてきた女性は小林裕美と名乗り、連れの女性は、山村美和と名乗った。

彼女たちは神戸市内に住んでいる。自宅は高級住宅街にある。会社の汚い寮住まいの野崎たちとは住む世界が違っていた。彼女たちの話を聞いていた野村は、今日一日限りの付き合いだと思っていた。

「今日はとっても楽しかったわ。おおきに。俺たちこれで帰るわ。あんたらも気いつけてな」

野崎が礼を言って改札に向かおうとしたとき、裕美が小さなメモを渡しながら言った。

「真也さん、これ私の電話番号。待ってるから必ず連絡してね。約束よ」

「分かった。約束するよ」

会社の寮に戻った野崎は興奮していた。裕美と知り合ったことではなく、自分の不思議な能力に対してだ。なぜか自分に身に付いた能力は、本物だと思った。今まで中卒ということが足かせになり、選択肢のなかった仕事に悩んでいたことも些細なことに思える。この能力を使えば何でもできる。野崎の興奮は増すばかりだ。野崎は翌日、退職届を提出することにした。

会社を辞めた野崎は、六畳一間の安いボロアパートを借りた。部屋にはパソコンと電話を置き、商売を始めることにした。野崎は身に付いた能力を使って、金儲けをしようと考えたのだ。

いろいろと考えた末に、自分や同僚たちの経験を元に、仕置き業を考え付いた。依頼者に代わって、制裁を加えたい相手に仕置きをするのだ。野崎の能力を使えば証拠も残らず、完全犯罪が成立する。客を集めるにはインターネットが効果的だと考え、パソコンを置いた。

インターネットで調べてみると、世の中には、ある人に対して恨み辛みを持っている人や何らかの不満を持っている人が、驚くほど多いのだ。その人らは相手に制裁を加えたがっていたが、自分が犯罪者になるのは嫌なのだ。そのジレンマとも思えるニーズに、野崎の仕事が的中したのだ。野崎は自分の能力をフルに発揮して、依頼された仕事をこなしていった。

仕事は簡単だ。野崎の能力を使えば、相手は野崎の意のままに動いてくれる。警察に逮捕されても、犯人は野崎と会ったことも話したこともないので、野崎のことが知られる可能性はゼロだ。

仕事の依頼は多く、一年も経たないうちに高級マンションを手に入れることが出来た。野崎の表向きの仕事は何もない。恋人の裕美には、インターネットを使って、いろいろな商品の販売をやっていると言ってある。裕美はボロアパートのことも、野崎の超能力のことも知らない。

野崎は自分の超能力が無くならない限り、この仕事は永遠に続くと思っていた。それが突如自分の意識の中に、誰かが侵入してきたことに気づいてから、不安が広がっていくのを抑えることが出来なくなっていた。

3―14

横浜市内の団地に住む加納玲子は、今日も近くの公園で三歳になる子供を遊ばせながら、仲良しの同年代の主婦らと談笑していた。毎日家事を済ませるとここに来て、友達と談笑するのが日課になっている。気の合う友達との取り留めの無い話は楽しいものだ。

玲子たちが話しに夢中になっていると、一人の女性が話しの中に割り込んできた。彼女の名前は杉本恵理子。歳は三十六歳。恵理子は玲子たち近所の主婦の間で評判が悪い。その原因は彼女自身にあった。とにかく自慢が多い、人をけなす、あること無いことを噂として流す、我がまま、短気、仕切りたがるなど、人間関係を上手くやっていくための条件から、外れることだらけなのだ。

玲子たちの話に強引に割り込んできた恵理子の自慢話が始まった。一流企業に勤める夫の自慢、家族で行ったオーストラリア旅行の自慢、六年生の息子がクラスで一番になったこと、持っているブランド品の自慢など、立て板に水のように良く喋った。

うんざりして聞いている玲子たちにはお構い無しに、恵理子の自慢話は続き、それが終わると団地の主婦の悪口を言い始めた。楽しかった談笑の場は恵理子の独壇場になり、玲子たちはひたすら逃げ出すタイミングを伺っていた。

ふと子供たちのほうを見た玲子は、息子の康介が滑り台の階段を昇ろうとしているのが目に付いた。

「康介、危ないわよ！」

慌てて駆け出した玲子に続いて、仲良しの四人の奥さんも子供のほうへ駆け寄った。残された恵理子はまだ喋り足りないような表情

をすると、公園の方を二度、三度と振返りながら帰っていった。
恵理子が帰ったあと玲子たち五人は再び集まり井戸端会議を始めたが、今度は恵理子の悪口が話題となった。恵理子はさっき、玲子たち五人の着ている服について、安物、いつも同じ服、亭主の給料が安いんじゃないのかなど、言いたい放題を言っていた。悪気はないのかもしれないが、相手に対する気配りの欠片もない。
同じ団地の主婦らに対する誹謗中傷や言いたい放題の傍若無人ぶりに、団地の主婦らも激怒していたが、玲子を含め誰も恵理子に面と向かって抗議できるものはいない。
時間はやがて、午後四時になるところだ。玲子と仲良し主婦らは、子供を連れて帰宅し始めた。

「じゃあ、また明日。バイバ～イ」
玲子が歩き始めたとき、一緒に遊んでいた主婦の一人が声を掛けてきた。仲良し主婦の河合明美だ。

「玲子さん、恵理子のクソババアには本当に腹が立つわね。誰かガツン！　と言ってくれないかしら。それか思いっきり恥をかかせて、人前に出れないようにしてやりたいわ。本当に腹が立つ！」
「明美さん、私も同じ想いよ！　何とかギャフンと言わせてやりたいわね。と言っても、恐くて何も言えないけどね」
恵理子に対して二人とも我慢の限界をとっくに超えていたが、面と向かって言えない以上、ただ我慢するしかなかった。

団地に戻った玲子は、パソコンの電源を入れるとメールを確認した。新しいメールは届いていない。ＹＡＨＯＯの画面に切り替えると、我慢の限界というキーワードで検索を始めた。検索をやりながらランダムにサイトを開いているうちに、サイレント・パニッシャーというサイトに行き着いた。サイトの説明を読んでいるうちに、これだ！　と思った玲子は、表示されている電話番号をダイヤルし

てみた。
　サイトの説明を聞いたあと、サイレント・パニッシャーと名乗る男が出てきた。玲子はしばらく考えた後、男に質問してみた。
「制裁して欲しいのは主婦なんですが、人前に出れないように恥をかかせてやりたいんです。怪我を負わせるとか、暴力を加えるとかじゃなくて」
「分かりました。それだったら簡単です。料金は五万円です。結果を見ていただいて、納得できたら振り込んでください。よろしいでしょうか？」
「はい。お願いします」
「振り込むときの名前を教えてください。本名でなくて結構です」
「恵理子です」
　警察で取調べを受けていた恵理子は泣きながら謝ったが、万引きをしたという事実を消すことは出来ない。恵理子は自分の人生はおろか、夫と子供の人生までもが崩れ落ちる音を聞いていた。その音は恵理子にしか聞こえていない。
「奥さん、どうして万引きなんかしたんですか。万引きするほど家計が苦しいわけじゃないでしょう。たかだか五百円のハンカチですよ」
「分からないんです。どうして万引きなんかしたのか、自分でも分からないんです。お金もカードも持ってます」
　恵理子は言いながらサイフを開いて見せた。財布には現金十二万円と、クレジットカードが入っている。
「お金は払いますから、どうか許してください。お願いします。どうか家族には言わないでください。お願いします」
　必死で頭を下げる恵理子に、普段の傲慢な態度はまったくない。
「奥さん、万引きは犯罪なんです。謝ったら済む問題じゃないんで

す。明日の朝刊に載ると思いますが、仕方ないですね」

昼食を済ませ、いつものように子供を連れて公園に行った玲子は、仲良し主婦らの話の盛り上がりに驚いた。話題は恵理子の万引きだ。

「玲子さん、今朝の朝刊見た?」

仲のいい明美が嬉しそうな顔をして聞いてきた。

「やけに嬉しそうだけど、もしかしたら、杉本さんの万引きの記事じゃないの?」

「ピンポ〜ン。今皆で、ざまあみろ! って話してたの。これで団地も平和になるわね。良かった良かった」

玲子はしばらく公園で遊んだあと銀行へ行くと、恵理子という名前で五万円を振り込んだ。ウップン晴らしには安い買い物だと思った。

3―15

赤井と将、彩子の三人は、赤井の自宅で野崎逮捕に向けて話し合っていた。

「ところで将君。あれからいろいろ考えてみたんだが、三人とも勘違いしてるところがあると思うんだ」

「何をですか？」

「ひとつ聞きたいんだが、鵜匠の野崎に君の正体がバレるのはまずいのかな？と言うのは、仮に君が超能力者だと野崎にバレたとして、何か問題があるのかということなんだ」

「もし僕の正体を野崎がマスコミにでも公表したら、大変なことになるんじゃないですか？」

「そこだよ。それは俺たちが勝手に思ってるだけだろう。野崎がマスコミに言ったとして、誰がそれを信じる？　君が超能力者だという証拠は何もないだろう？　野崎が超能力で犯罪を起こしてると言っても、誰も信じないのと同じだよ」

「なるほど。超能力が盲点でしたね。確かに人前で超能力を使わなかったら、何も証拠がないですよね。テレポートや念力やソウルノートの話をしたとしても、空想好きのたわごとだと思われて終わりですよね」

「だったら野崎を恐れることはないわ。これで作戦が立てやすくなるわ。さすが赤井さんですね。だてに歳を取ってないわけだわ」

「おいおい彩子ちゃん、それは褒めてるのか、バカにしてるのかどっち？」

「もちろん褒めてるんですよ。尊敬している赤井刑事をバカにするわけがないじゃないですか。ねぇマサルくん？」

「彩ちゃんの言うとおり。赤井さんは頼もしい味方です」
「よし！　今日の昼飯は寿司だ。ただし、百円の回転寿司だけどな。何だか二人に上手く乗せられたような気がするけど、まぁいいか」
野崎逮捕の名案が浮かばず完全に行き詰っていた二人だったが、赤井の意見で光が見えた気がした。

「作戦としては、まず野崎の意識に入って、彼の超能力がどんなものかを調べることですね」
将が言ったことに、彩子が不安げに尋ねた。

「私は超能力者じゃないから分からないけど、もし野崎の意識に入ったときに、意識体のマサルくんが閉じ込められて出られなくなるってことはないの？　そうなったらマサルくんの肉体は生きる屍になるわ」
「それは大丈夫だと思う。意識体の僕がソウルワールドに行ったとき、実験のために意識体をひとつ止めてみようとしたことがあったんだけど、止められなかったんだ。それに野崎の能力は僕よりレベルが低いと思うから、心配はいらないよ」
「将君が大丈夫と言うんだったら心配ないだろ。俺たちには超能力のことは全然分からないからな。ところで将君、暗示を解くことは出来るのか？」

「今から暗示を解く実験をやってもいいですか？　赤井さん実験台になってください」
「おう！　いつでもいいぞ。でも事件だけは起こさないように頼むよ。将君のことだから、大丈夫だとは思ってるけどな」
「じゃあ今から始めます。赤井さんはそこに座っててください」
将が言ってから約一分経った頃、将が再び口を開いた。

「赤井さん、今どんな感じですか？　さっきと何か変わった気がし

ますか？」
「いや。別に何ともないし、何も変わったことはないよ」
「分かりました。じゃあ彩ちゃん、一回だけ手を叩いてくれるかな」
彩子は言われたとおりに、パチンと一回だけ手を叩いた。すると赤井が立ち上がり玄関に行くと、頭に靴を乗せて戻ってきた。あまりの可笑しさに、将と彩子は腹を抱えて大笑いをした。

「赤井さん、何をやってるんですか。その姿は、ただの間抜けですよ。あぁぁ、あんまり可笑しくて、お腹の皮がよじれる。アッハッハッハッハ」
二人は涙を流しながら笑い転げていたが、当の赤井は、自分はバカなことをやってるなと思いながらも、なぜやってるのかが分からない。赤井の頭に乗っている靴を取った将は、赤井に座るように言うと次の実験を始めた。

「彩ちゃん、もう一度、手を叩いてくれるかな」

「ちょっと待った！　将君、俺は自分が情けないよ。どうして頭に靴を乗せないといけないんだ？　訳が分からんよ」
「赤井さん、今度は何も起きないはずだから大丈夫ですよ。彩ちゃん、手を叩いて」
彩子は躊躇することなく、手を叩いた。赤井は座ったままだ。何も起きない。将が彩子に目配せをした。彩子は頷いてもう一度手を叩いたが、何も起きない。

「将君、何やってるんだ？　実験は失敗なのか？」
「違います。実験は大成功です。僕の思ったとおりです。暗示の解き方が分かりました」
「どう成功だったのか説明してくれないか。さっぱり分からん」
「実は二つ実験をしたんです。ひとつは暗示をかけて、赤井さんを

操る実験。二つ目は暗示をかけたあと、それを解く実験です。二つとも成功でした」

「ということは、君は野崎と同じように、人を操ることができるのか？」

将は返事をする代わりに大きく頷いた。なんという少年だ。この少年の能力に限界はないのか。赤井は、何事もなかったかのように平然としている将を、改めて凄い少年だと思わざるを得なかった。

「マサルくん、それでいつやるの？」

「善は急げだ。今から野崎の意識に入ってみるよ」

「将君、本当に大丈夫だろうな？　くれぐれも気をつけて慎重にやるんだぞ」

赤井は自分たち普通の人間と違って、目に見えない意識体の状態で戦おうとしている将が心配だった。それにしても不安はあるはずなのに、平然としている将を見ていると、逆に自信に満ちているように見える。

将の説明では上手くいきそうに思えるが、何か落とし穴がありそうな気がする。その根拠は何もないから説明出来ないが、強いて言うなら、長年の刑事の勘というものだ。それが当たらなければいいが。赤井はそう思うしかなかった。

3―16

将はその場に横になると静かに目を閉じ、幽体離脱を始めた。一分弱で離脱した意識体の将は、離脱したことを赤井と彩子に知らせると、野崎のところへと移動した。

野崎のシグナルも居場所も分かっているので移動は一瞬だ。時間は午後の三時。野崎はボロアパートのパソコンの前にいた。電話中だ。電話はサイレント・パニッシャー専用となっているので、仕事の依頼を受けてるのだろう。

野崎が受話器を置いた。意識体の将は彼の意識に潜り込んだ。違和感を感じた野崎は、誰かがテレパシーを送っていると思い、自分の周りに意識を集中して調べ始めた。

意識体の将は、意識の中にいるのを悟られないように、慎重に調べ始めた。すぐにソウルノートを見つけた意識体の将は、ノートを見て驚いた。それは今まで見てきたソウルノートとは違っていて、初めてみるものだ。今まで見たのとは色が違うのだ。

野崎のソウルノートは透明で薄い水色をしている。実に綺麗だ。ひと目で、人とは違う特殊な何かを持っていると分かる。意識体の将は、ソウルノートに書かれていることを読んでいった。

調べていくうちに、野崎が超能力を手に入れた原因は、自分の場合と酷似していることに驚いた。将は空手の試合で、相手の回し蹴りを即頭部に受けて失神ＫＯ負けをしてしまった。それが原因となって超能力が身に付いたのだが、野崎は交通事故により意識不明となり、それが原因で超能力が身に付いたのだ。

野崎が起こした事件というか請け負った制裁の方法は、二件の依頼を組み合わせたものもあった。

たとえば東海市で起きたストーカー殺人事件は、ある女性を殺して欲しいという依頼と、ある男を死刑にして欲しいという依頼の組み合わせだ。殺して欲しい女性を、死刑にして欲しいという男に襲わせたのだ。

名古屋の高校生が五人の高校生に袋叩きにあった事件は、痛めつけて欲しい高校生を、刑務所に送り込んで欲しい五人の高校生に襲わせたのだ。だから被害者と加害者の間には何の関係もない。

依頼者の動機は様々だ。その中には到底、正当と思えない理由もあったが、野崎は理由に関係なしに、依頼があれば引き受けていた。

周囲をテレパシーで調べていた野崎は、誰かが自分の意識の中に入り込んでいるのだと知った。

「見つけたぞ！　勝手に俺の意識に入りやがったな！　この前入ったのもお前だな」

「そのとおりだ野崎。俺は中瀬将だ。お前のやってることは犯罪だぞ。すぐに止めるんだ」

「犯罪じゃない。人助けだ。その証拠に依頼者があとを絶たないし、彼らは俺のやったことに喜んでいるんだ」

「どんな屁理屈を言っても、やってることは犯罪だぞ。事実が証明している」

「いいか中瀬。世の中には、成敗されたほうが世のためになるという人間もいるんだ。そいつらを野放しにしていると犯罪が増えるし、辛い思いをする人たちが増えるんだ。だから俺が依頼を受けて成敗してるんだ。俺がやってることは、むしろ褒められて然るべき事なんだぞ」

「だが、成敗される人の基準が間違ってたらどうする？」

「お前も超能力者なら分かるはずだ。俺たちに隠し事は出来ない。ウソもつけない。だから俺が悪人だと決めた人間は悪人なんだ。間違うことは絶対にない！」

「野崎、お前はどうなんだ。悪人じゃないのか？」

「どうして俺が悪人なんだ？　日本は法治国家だが、矛盾点もたくさんある。法がすべて正しいとは言えないし、法があるために善人が苦しみ辛い思いをすることだってたくさんあるんだ。だから俺が法に代わって、そういう人たちを救ってるんだ」

「そのためには何をやってもいいのか。人殺しも許されるのか？」

「そのとおりだ。日本には死刑制度があるだろう。あれは言ってみれば、法に名を借りた殺人だ。俺は非合法的にそれをやってるだけだ。単なる金欲しさに無作為に人殺しなどしていない。無作為殺人や私利私欲のための殺人は犯罪だが、俺がやっているのは世のため人のためだ。要は、法が決めるか俺が決めるかの違いだけだ」

「お前がやらなくても、警察が逮捕できるように仕組めば済むことじゃないのか。理由はどうであれ、法治国家だから法の裁きに任せるべきじゃないのか」

「それじゃ聞くが、もしお前の両親が金欲しさの強盗に殺され、犯行当時に精神的に不安定だったという理由で犯人が無罪になったらどうする？　それが法の判断だからと納得するのか？　そのまま犯人が釈放され、次の殺人が起きたらどうする？」

「それにお前は殺人のことばかりに目が行ってるが、殺人は依頼のうちの一パーセントに満たないんだ。ほとんどは、反省を促すための法の裁きを受ける程度の制裁だ。その一人が裁きを受けることで、たくさんの人が救われるという事実をどう思う？　俺の超能力は、そのために与えられたものだ。だからと言ってすべてボランティアではできない。俺も生きていかないといけないから、報酬をもらってるんだ。俺の考えが間違っていると言えるのか？」

「確かにお前の考えがすべて間違っているとは思わないが、もしそういう考えの人が増えたら、何のための法律か、何のための法治国家かということになるんじゃないのか。法が矛盾しているからと言って、個人の判断で罰を決めていたら、無法地帯となる可能性もある。法が出来た理由は、そこにあるんじゃないのか」

「分かった。しかし、現実を見てみろ。俺への依頼が全てを物語っているぞ。依頼者は俺と同じ考えなんだ。俺を罰するというのなら、依頼者も罰するべきじゃないのか？　そもそも俺がいるからという理由よりも、依頼してくる人間がいるほうがおかしいんじゃないのか？」

「確かにそうだな。依頼するほうが間違っていると思う」

「俺の生い立ちも、苦労したこと、辛かったことも、お前は俺の意識の中にいるから全て分かってると思うが、その俺が天から授かった能力を利用して何が悪い？　それも悪用してるわけじゃないぞ。世のため人のためにやってるんだぞ。依頼者は悪人でもヤクザでもない、ごく普通の人たちだ。その人たちの願いを叶えてやって何が悪い？　もしお前がその人たちから、同じような依頼を受けたらどうするんだ？　このあと電話が掛かってきたら、お前が対応してく

れ。お前の模範的なやり方を見せてくれ」

「分った。俺の考え方で対応しよう。それで俺のやり方に納得したら、お前は今までのやり方を改めて、俺の考えのとおりにやるんだな？」

「その答えは、お前の結果を見てからだ」

3－17

意識体の将は野崎の意識から抜けると、自分の肉体に戻った。起き上がった将を見て彩子が声を掛けてきた。時計を見てみると、幽体離脱してから五分も経っていない。

「マサルくん、どうだった？　何か分かったの？」

「将君、何があったんだ？　何かダメージでも受けたのか？」

「大丈夫です。何ともありませんから。野崎といろいろと話をしたんですけど、正義とは何か、何が正義か、何を根拠に善悪を決めるのかなど、いろいろな疑問が出てきて分からなくなったんです。言葉で話すのは時間がかかるので、テレパシーで伝えます」

将はそう言うと、野崎とのやり取りをテレパシーで二人に伝えた。時間的には五秒も必要ない。

「赤井さん、どう思いますか？　彩ちゃんはどう？」

「将君、ここに百人の人がいるとしよう。百人全員が美味しいと言う料理は、何だと思う？　彩子ちゃんは何だと思う？」

「僕はラーメンだと思います」

「私はカレーライス」

「なぜそう思う？」

「魚の嫌いな人とか肉の嫌いな人とかはいるけど、ラーメンの嫌いな人は聞いたことがないです」

「同じ意見です。カレーライスって、子供から大人まで誰でも好きでしょう」

「でもそれは、百パーセントとは言えないよな。君らがそう思ってるだけで、根拠はないだろう？　ただ、皆が好きなはずだと思ってるだけだろう？」

「確かにそうですけど」

「結論から言うと、全員を納得させられるものは何もないんだ。何かにつけて、必ず何人かは反対意見を言うものだよ。それが良いとか悪いとかじゃなくて、人の考えは十人十色だから仕方のないことなんだ」

「赤井さん、話の途中で大変申し訳ないんですけど、僕、野崎のところへ行って、依頼者からの電話に出てみます。逃げたと思われるのは嫌なんで」

「分かった。話の続きはまた後にしよう。何か困ったことがあったら、すぐに連絡してくれよ」

「はい、分かりました。じゃあ、行ってきます」

将はそう言うと、野崎のボロアパートへテレポートした。

「わぁ！　だ、誰だお前は！」

突然現れた将に、野崎は大声を張り上げて椅子から転げ落ちた。尻餅をついたまま後ずさりした野崎は背中が壁にぶつかり、それ以上進めないことを知ると、近くに置いてあったゴルフクラブを握り締めた。

野崎は怯えた様子を見せながらも、テレパシーで将の考えを読み取ろうとしたが、将は意識にガードを張ってそれを防御した。自分の能力が使えないと知った野崎の額から汗が流れ始めた。

将はそんな野崎を見ながら、右手を前に差し出した。その瞬間、野崎の隣にあったもう一本のゴルフクラブが、将の手に飛び込んできた。ゴルフクラブを握った将が、それをパソコン台に立てるように置くと、あろうことか、ゴルフクラブがパソコン台にめり込んだのだ。常識では考えられない現象だ。

驚きのあまりポカンと口を開けている野崎めがけて、将の超ハイスピードの右回し蹴りが放たれた。手加減なしのその蹴りは、想像を絶する凄まじいスピードだ。蹴りは野崎の頭部すれすれをかすめた。

野崎は、超能力、身体能力とも、自分と桁外れの男を目の前にして、ただ震えることしか出来ない。とても自分の太刀打ちできる相手ではない。余りにもレベルが違いすぎていた。殺される。野崎は死を覚悟したが、その予想はまったく外れてしまった。

「俺が誰だか分かるか？　さっき意識の中で会ったばかりだから、覚えているだろう？」

「お前が中瀬か。俺とはレベルが違いすぎる。お前の好きなようにしてくれ」

「どういう意味だ？」

「俺を殺しに来たんだろう？」

「どうしてそう思うんだ？」

「さっきお前が意識に入り込んでいたとき、お前の怒りを感じた。今はお前が意識をガードしているから読めないけど、たぶん今も怒ってるはずだ。だから肉体に戻ってここにやってきたんだ。そうだろう？」

「そんなつもりは毛頭ない。殺そうと思えば、意識に潜り込んだほうが簡単だ。お前のソウルノートを引き抜けば、お前は死ぬからな。肉体にダメージを与えて殺すよりは、はるかに楽で、傍から見れば心臓発作にしか見えないしな」

淡々と話す将を見て、野崎は心底恐ろしいと思った。自分が思っている以上に能力の差が違いすぎるのだ。自分は人を操れることで神になったような気がしていたが、将は常識では考えられない能力を秘めているのだ。

3―18

「ソウルノート？　何だそれは？」

「それは人の意識の中にある、自分で自分の人生に起きることを書いたノートだ。人生で自分の身に起きることは、すべてそのノートに書いてあるんだ。それは産まれてくる前に自分で書くんだ。この世での修行計画書と言ったほうが分かりやすいだろう。修行だから苦しいことや辛いことのほうが多い。それを乗り越えると魂が成長するんだ。それから逃げたり自殺したりして修行を放棄すると、次の人生に持ち越されるんだ。ソウルノートを抜き取れば人は死ぬ。そして、俺は抜き取ることが出来る」

中瀬は神だ！　話を聞いてるうちに、野崎はそう思えてきた。神様が目の前にいる。野崎はもはや、敵意も恐れも一切の欲も頭の中から消えていた。

「中瀬、お前は神なんだろう？　いや、絶対、神に違いない」

「違う。俺は神なんかじゃない。名古屋の高校に通っている普通の高校生だ。病気もするし、悩むことだってある。少し違うのは、常識では考えられない能力を持っていることだ。この能力はお前が言ったのと同じで、世のため人のために使うように与えられたものだ。だから俺はそのためにこの力を使っているんだ」

「教えてくれ！　俺は子供の頃から辛い人生を歩んできた。それはソウルノートに書いてあるのか？　俺が自分で選んだことなのか？　もしそうだとしたら、何のためにそんなことを選んだんだ？」

「さっき言ったように、この世は魂の修行の場なんだ。考えてみれば分かると思うが、修行に楽な修行はないだろう？　楽だったらそれは修行じゃない。プロスポーツにしたって同じだ。プロ選手は毎日毎日、辛くて厳しい練習をするし、そうしないとプロとしてやっていけない。ソウルノートに書いてあるのは、人生の修行なんだ。修行の目的は魂の成長だ。これが答えだ」

二人が話しているところへ、電話の呼び出し音が鳴った。野崎は受話器を取ると将へ渡した。いつものどおりのサイト説明の女性の声が流れ、そのあと依頼者が話し始めた。

「某企業に勤めているサラリーマンですが、上司を成敗して欲しいんです。成敗と言っても、転勤させるか辞めさせるか、要するに私の部署から居なくなるようにして欲しいんです。出来ますか？　費用はいくらですか？」

「その前に聞かせて欲しいんですが、なぜその上司が居なくなったほうがいいんですか？」

「とにかくひどい上司なんです。到底、達成できないような予算を押し付けて、実績が悪いと罵詈雑言を浴びせるんです。言葉の暴力ですよ。明らかにパワーハラスメントですけど、誰も言い返せないんです。その上司は一日机に座って、新聞読んだりネットサーフィンしてるだけなんです。会社の交際費は私用に使っていると言う噂だし、上層部には上手に取り入ってるので、受けがいいんです。同じ部署の人間で、あいつのために鬱病になったものが三人もいるんです。皆、疲弊しきっているんです。あの男が居なくなれば所内も明るくなるし、皆のやる気も出ます。とにかく、あいつに居なくなって欲しいというのは、部下全員の意見なんです。お願いです。あいつが居なくなるようにしてください」

依頼者の話を聞きながら、将はテレパシーで相手の頭の中を覗いてみたが、ウソは言っておらず、言ってること以上に、その上司はひどい男だった。解決するには依頼者の言うとおり、その上司を追い出すしかない。

将は五分後にもう一度電話するように言うと、一旦受話器を置いた。野崎に依頼者から聞いた内容を伝えると、野崎が口を開いた。

「中瀬、どうするつもりだ？　その上司を追い出すことぐらい、お前にとっては簡単なことだろう？　要は依頼を受けるか受けないかを決めるだけだ。どうするんだ？」

「受ける」

「アッハッハッハッハ。結局、お前は俺と同じなんだ。偉そうなことを言ってるけど、自分の考えが間違いだと認めたんだ。俺の考えが正しかったと認めたんだ！」

「お前とは違う。お前は依頼されたことは、理由も聞かずに受けてる。お前は世のため人のためということを言いながら、自分の私利私欲のためにやってるだけだ。世のため人のためというのは、体裁のいい隠れ蓑だ。俺は理由を聞いて納得しないとやらないし、どんな理由であろうと殺人はやらない。俺の力はお前と違って、困っている人たちを助けるために与えられたものなんだからな」

「中瀬、お前が何と言おうと、俺は俺の判断で実行する。お前に文句は言わせないぞ」

「野崎、お前のやり方は、困っている人たちのためになっていない。本当に困っている人たちのことを思うのなら、ボランティアでやるべきだし、依頼内容も良く理由を聞いて判断すべきだ。お前は金儲

けのために、見境なくなんでもやっている。もちろん生活費は必要だが、それは働いて稼ぐべきじゃないのか？」

「お金をもらうことが、そんなに悪いことなのか？　お前に文句は言わせない。大きなお世話だ。人のことにいちいち干渉するな。余計な口出しをするな」

そのとき電話の呼び出し音が鳴った。受話器から聞こえてきた声は、さっきの依頼者だ。将は依頼を受けることを約束し、費用は要らないと伝え、電話を切った。

「これ以上言っても平行線みたいだな。野崎、もし今後お前が俺を怒らせるようなことをしたら、お前の超能力を使えなくする。それだけは忘れるな」

将はそう言うと自宅へとテレポートした。目の前から煙のように消えた将を見て、野崎は改めて次元の違いを痛感した。あいつは一体、どれだけの能力を持っているんだ。将が言い残した言葉が、野崎に鋭く突き刺さっていた。

3－19

将は赤井の部屋へ戻ると、再び野崎との一部始終を赤井と彩子にテレパシーで伝えた。

「二人に聞きたいんだけど、僕の考えは間違ってますか？」

「私はマサルくんの考えは正しいと思うわ。だってマサルくんは野崎と違って、困っている人たちのことを真剣に考えて、どうするかを決めてるんだもの。野崎は私利私欲を第一優先にして、マサルくんが言うように、世のため人のためと言う言葉を隠れ蓑にしてるわ。仮に、結果的にマサルくんと野崎のやることが同じだとしても、それを決断するまでのプロセスが全然違うから、野崎とマサルくんは同じじゃないわ。自信を持って自分の考えに従うべきよ」

「建前で言えば俺は刑事だ。どんな理由であろうと法に従うだけだ。法を破るものは逮捕する。しかし本音は、俺は人間だから臨機応変に行動する。見ざる言わざる聞かざるも得意だし、人間としての感情も持ち合わせている。人の心の痛みも分かるつもりだ。俺の場合、人前で本音を言うと問題になるから言わないけど、自分の考えに従って決めることにしているよ。将君と同じように、困っている人を助けるためにな」

「ありがとう彩ちゃん。ありがとうございます赤井さん」

将は二人に相談したことで、迷いが吹っ切れた。頭の中に立ち込めていたモヤモヤとしていた霧が、サ～っと晴れていくような感じになった。

「赤井さん、話は変わりますけど、さっきの話の続きを聞かせてください」

「何のこと？　どんな話をしていたっけ？」
「人の考えは十人十色だから仕方のないこと、って言ってたでしょう」
「将君、その先は必要ないよ。今、彩子ちゃんが言ったことが答えだ」
「そうですね。二人のおかげで自信が湧きました。これからも自分の考えに従って行動します。もし道を外れそうになったら、教えてくださいね」
「それで、野崎が事件を起こさせようとしている人たちを止めないといけないだろう。止めることはできるのか？」
「はい大丈夫です。いまから幽体離脱して、その人たちの暗示を解いてきます」

将は横になると幽体離脱した。意識体の将は野崎が暗示をかけた人たちのことを、野崎の意識から全て掴んでいた。今の時点で十二人だ。意識体の将は順番に彼らの暗示を解いていった。全員の暗示を解くのに十秒もかからなかった。
意識体の将は、そのまま野崎の意識に潜り込んだ。野崎は新たに依頼を受けていた。そのために暗示をかけられた人が二人増えていた。

「中瀬だな。何のために俺の意識に入り込んできたんだ？」

「お前が暗示をかけてた十二人は、全員俺が暗示を解いてきた。お前、また依頼を受けたな。その人たちの暗示も解く。もう止めろ。さっき言ったように、依頼理由を良く吟味して、制裁を加えたほうが困っている人たちの役に立つと思える依頼だけにしろ」

「中瀬、油断したな！　お前が俺の意識に入るのを待ってたんだ。もうお前はそこから永遠に出られないぞ！」

野崎の自信たっぷりの想いが伝わった瞬間、意識体の将の周りの光景が瞬時に変わった。今まで見えていた野崎の意識が見えなくなり、ガラス張りの部屋のような感じになったのだ。野崎の意識が消え、何もない無の空間になった。意識体の将は抜け出そうと試みたが、ガラス張りの部屋を通り抜けることが出来ない。何度やっても抜け出せない。

赤井の家では、二人が、将の様子がおかしいのではないかと思い始めていた。

「赤井さん、マサルくんが幽体離脱してから二時間経ちますけど、マサルくんに何かあったんじゃないですか？　何だか胸騒ぎがするんですけど」

彩子に言われるまでもなく、赤井も不吉な予感がしていた。底知れない力を持った将が、まさか野崎に捕まるわけがないと思っていたが、一抹の不安を拭い去ることは出来そうもない。

「俺も同じことを考えていたところだよ。将君に限ってそんなことは有り得ないと思うけど、もしかして野崎の意識の中に閉じ込められてしまったんじゃないかな。将君は、野崎は自分よりレベルが低いから大丈夫だとは言ったけど、目に見えない意識の世界だから、常識じゃ考えられないことが起きるかもしれないしな・・」

赤井の言葉が、重みを持って彩子にのし掛かってきた。居ても立ってもいられなくなった彩子は、将の肩を揺さぶりながら必死の想いで声をかけた。

「マサルくん、マサルくん、起きてちょうだい。お願いだから目を開けて！」

彩子は涙ぐみながら必死で声をかけ続けた。将は以前、肉体を揺

すれば意識体の自分にその感覚が届くから、すぐに肉体に戻ると言っていた。彩子はそれを覚えていたのだが、将は目を閉じたままで全く反応しない。

しばらく揺すっていた彩子は、全く何の反応もしない将の姿に大声で泣き出してしまった。その泣き声が赤井の不安を大きくさせた。赤井はゆっくりと彩子の肩に手を掛けて起こすと、

「彩子ちゃん、将君ならきっと大丈夫だ。彼は神の子だよ。俺は彼に会ったときから、そう思ってる。神の子が、たかだかテレパシーしか使えない相手に負けるわけがない。そうだろう」

彩子は声に出さずに頷きながら、手の甲で涙を拭いた。それから沈黙の時間が過ぎていった。時刻は午後七時になっている。将が離脱してから三時間が経っていた。

「彩子ちゃん、今夜はここに泊まらないか？　一晩様子を見て、明日の昼までに将君の意識が戻らなかったら病院へ運ぶから」

「分かりました」

彩子は小さな振るえる声で、そう応えるのが精一杯だった。返事よりも大粒の涙がこぼれるほうが多かった。

3－20

赤井は将と彩子の家へ電話をして、今夜は二人とも自分の家へ泊まると告げた。二人の母親は刑事の家だということで、まったく何も心配していない。

意識体の将は自分のことより、赤井と彩子が心配してるかと思うと、二人のほうが気になった。何とか二人に連絡を取りたいが、どうすることもできない。野崎の意識の異空間はテレパシーも遮り、意識体の将は、まるで圏外の携帯電話のような気がして苦笑いをした。

焦っても仕方がない。意識体の将は自分に言うと、脱出する策を考えることにした。物理的な肉体ではないので何か出来る気がする。ソウルワールドでは、何をするにしても思うだけいい。何かを欲しいと思えば、思うだけでそれが現れる。行きたいところを思うだけで、瞬時にそこへ移動できる。意識体の世界では想いが全てだ。ならば、この異空間は出られないと、野崎に暗示をかけられた空間ではないのか。

「中瀬、油断したな！　お前が俺の意識に入るのを待ってたんだ。もうお前はそこから永遠に出られないぞ」と言った野崎の言葉そのものが暗示だったのだ。

意識体の将は野崎の簡単な暗示にかかってしまい、自ら異空間を作ってしまったのだ。自分で勝手に想像して作った意空間の中にいるのだ。今頃野崎は、大笑いをしているだろうと思ったが、不思議と腹は立たない。むしろ相手を甘く見すぎて墓穴を掘った自分に腹が立った。

中学三年のとき空手の試合で、自分よりはるかに格下の相手の回し蹴りをくらって、失神ＫＯ負けをしたときのことが思い出された。

あのときの教訓が、全く生かされていなかった。
俺は何という愚か者だ。油断大敵という言葉の意味を、分かったようで分かっていなかった。ひとしきり反省した意識体の将は、気を取り直して脱出することにした。脱出したらやることはひとつ、野崎の超能力を永久に使えなくすることだ。

意識体の将が自ら野崎の暗示を解くと、異空間が一瞬のうちに消えてなくなり、周りは野崎の意識となった。

「ただいま、野崎。俺の帰りが遅かったから、待ちくたびれたんじゃないのか？」

「中瀬、お前、どうやって抜け出した？」

「お前とはレベルが違うんだ。覚悟は出来てるな！　今からお前の超能力を使えなくする」

「待ってくれ中瀬！　頼むからそれだけは止めてくれ！　お前が知っているように、俺は小さいときから苦しくて辛い思いをしてきた。しかし、この超能力のおかげで、俺の人生は好転し始めたんだ。辛い経験をした分、今からの人生が良くなってもいいだろう？　人生は山あり谷ありというじゃないか。谷ばかりだった俺が、これからの人生は山に登っても許されるんじゃないのか？　山に登るためにはこの能力が絶対に必要なんだ。頼むから、能力を奪うのだけは止めてくれ。頼む！」

「手遅れだ。お前は俺を閉じ込めた。一生、出すつもりはなかったはずだ。その証拠に俺の話を聞こうとはしなかった。俺はお前のように自分勝手で、口先だけの人間を信用しないし絶対に許さない。殺されないだけましだと思え！」

意識体の将は野崎のソウルノートを抜き取ると、ソウルワールドへ移動した。ソウルワールドでは、何も書かれていないソウルノートが次々と現れてくる。それに意識体が修行計画を書き、そのソウルノートを持って赤ちゃんの意識に入り、この世に産まれてくる。

意識体の将は新しいソウルノートを手に取ると、野崎のソウルノートをそれに重ねた。野崎のソウルノートは透き通った水色で、実に綺麗だ。野崎の修行計画が新しいソウルノートに移し替えられた。

新しいソウルノートを持った意識体の将は、それを野崎の意識に戻した。ソウルノートを抜かれたときと戻されたときに、野崎は一瞬、目まいがしたような気がしたが、それ以外には何も違和感を感じていなかった。超能力が無くなったことも、まだ気づいていなかった。

第４章　真導子と神導子

意識体の将は自分の肉体に戻ると目を開けた。予想していたように、赤井の部屋でフトンに寝かされていた。胸に重みを感じた将は、その重みは彩子が胸に頭をもたれて眠っているのだと知った。将は眠っている彩子の髪の毛を、優しく撫でた。

彩子は母親に髪の毛を撫でられていた。彼女は幼稚園の年少さんだ。優しい母は、彼女が疲れると優しく髪の毛を撫でながら、膝枕で寝かせてくれた。彩子は母に髪の毛を撫でられながら眠るのが好きだ。何とも言えない安心感と、心から安らぎを感じるからだ。

「お母さん・・・」

彩子は寝言を言いながら薄目を開けた。母親の膝枕だと思っていたが、違っていた。寝ぼけていた彩子は、自分が何処にいるのか、どうなっているのかが分からない。意識がはっきりしてくると、髪の毛を撫でていたのは母親じゃないことが分かった。

ゆっくりと頭を起こした彩子の目に映ったのは、将の笑顔だ。彩子はその途端、大粒の涙が溢れてくるのも構わず、将の首に抱きついた。もう離さないとばかりに強く抱きついた。

物音に気がついた赤井が目を覚ました。将の首に抱きついている彩子の姿が目に入った赤井は、将が笑顔で小さく手を振っているのを見つけた。

「将君。無事だったか！　心配したんだぞ！」

赤井は何かを確かめるように、無言で何度も頷きながら、将の頭を荒々しく撫でた。将が彩子を撫でたのとは大違いだが、赤井の気

持ちがこもっていて、将は涙が溢れてきた。時間は午前五時だ。彩子が将から離れると、将は起き上がり口を開いた。

「二人とも心配してたでしょう。ごめんなさい。ちょっと油断して野崎の暗示にかかってしまい、帰りが遅くなってしまいました。でも、もう大丈夫です」

「良かったぁ。マサルくん、本当に心配したんだよ。いくら肩を揺すっても、全然反応がないし、このまま一生目が覚めないんじゃないかと思ったんだよ」

彩子は言いながら、また大粒の涙を流し始めた。それは安心したのと嬉さから自然と出た涙だった。赤井もつられて涙を流していた。赤井の目もはばからず、しばらく彩子の頭を抱いていた将は、野崎とのやりとりの一部始終をテレパシーで二人に伝えた。

「そうだったのか。それで野崎は超能力を使えなくなったのか？」

「明日、野崎のところへ行って様子を見てきます。今度は意識体じゃなく、テレポートで行くから大丈夫です。野崎の超能力は無くなってると思うから、何も心配はいりませんよ」

「マサルくん、過信はダメよ。油断大敵だからね」

「俺は本当にバカだよ。彩ちゃんの言うように、油断大敵というのを経験してるのに、また同じ失敗をしてしまったんだから。あ～ぁ、情けない」

「二度あることは三度あるって言うから、くれぐれも気をつけてね。」

「今度ばかりは、油断大敵というのが身にしみて分かったから、気を抜かないようにするよ。ちょっと遅かったけどね」

「夜明けも近いけど寝るとするか。寝不足だと、ポカミスを起こしやすいからな」

4―1

野崎はマンションにいた。コーヒーを右手に持って、ベランダから景色を眺めている。将はリビングに現れるとソファーに座った。五分ほどして野崎がリビングに入ってきた。ソファーに座っている将を見つけると何事もないかのようにソファーに座ったが、明らかに動揺しているのが分かる。

「中瀬、何しに来た！」

「お前に意識の中に閉じ込められたんで疲れてるんだ。喋るのも億劫だから、テレパシーで話してくれ」

将は野崎の超能力を調べるために言うと、テレパシーで話しかけた。

「野崎、今度は俺がお前を意識の中に閉じ込める番だ」

野崎の顔色が変わったが何も言ってこない。

「どうした野崎、怖くて何も言えないか！　それとも、泣きながら土下座して、許しを請うか？」

野崎は何も言わない。将は野崎の頭の中を読んでみることにした。

「助けてくれ。俺が悪かった。許してくれ」野崎の声が聞こえた。

野崎は超能力を使えなくなっていたのだが、本人はまだそのことに気づいていない。将はテレパシーを使うのを止めて話し始めた。

「野崎、俺が昨日お前に言ったことを覚えているか？」

「俺を絶対に許さないんだろう」

「そのとおりだ」

「そのために来たんだな！」

「違う。昨日のうちに用は済んでる。ここに来た理由は、お前の様子を見に来ただけだ」
野崎は将が言ったことを思い出してみた。
「お前とはレベルが違うんだ。野崎、覚悟は出来てるな！　今からお前の超能力を使えなくする」と、言っていた。
「中瀬、お前まさか、本当に俺の超能力を奪ったのか！」
「俺に聞くな。自分で試してみろ。今、ガードは張ってないから、俺の心を読んでみろ」
野崎は将の心を読み始めたが、何も見えない、何も伝わってこない、何も感じない。野崎は超能力が消えたことを悟った。野崎の目から大粒の涙が溢れ出し、みるみる怒りの表情に変わっていった。鬼の形相で将を睨み付けると、テーブルの上のガラスの灰皿を、将の顔面に投げつけた。
将は飛んできた灰皿を避けようとしない。灰皿は顔面にぶつかる五センチ手前で止まった。空中で止まったのだ。野崎はコーヒーカップも投げたが、同じように空中で止まり、将には当たらない。
まるでお化けでも見たかのような顔をしている野崎目がけて、空中で止まっている灰皿とコーヒーカップが飛んでいった。咄嗟に両腕で顔をガードした野崎の前で、灰皿とコーヒーカップは止まった。野崎が恐る恐る両腕を降ろすと、灰皿とコーヒーカップはゆっくりとテーブルの上に降りていった。
「中瀬・・」
野崎がその先を言おうとした瞬間、目の前から将の姿が消え、野崎は後ろから肩を叩かれた。振り向くと将が後ろに立っている。飛

び上がって驚いた野崎は、顔面蒼白になっていた。無謀にも将に戦いを挑んだ自分を後悔した。野崎は大きく深呼吸をすると、ゆっくりと懇願するように言った。

「中瀬お願いだ。お前の言うとおりにする。だから、俺の超能力を返してくれ。頼む」

「それは出来ない」

「頼む。もう二度と私利私欲には使わないし、お前に歯向かうこともしないと約束する。信じてくれ。だから超能力を返してくれ。このとおりだ」

野崎は言いながら土下座をした。将はテレパシーで野崎の心を読んでみた。言ってることはウソではなかった。

「野崎、お前の心を読んでみた。ウソではないことは分かったが、超能力を元に戻すことは俺にも出来ないんだ。元に戻す方法を知らないんだ」

「冗談だろう！　そんなバカなことがあるか！　何か方法があるはずだ。頼むからその方法を見つけてくれ」

「もしダメだったら？」

「お前のことを世間に公表する」

「何のために？」

「お前に対する復讐だ！」

「誰もそんなことは信じないぞ。俺が超能力を使わない限り、何も証拠がないんだからな。逆にお前が精神異常者扱いされるだけだ」

「あぁ、俺の人生は終わったぁ！　また惨めな生活に逆戻りだ。それもこれも、中瀬、すべてお前のせいだ。この恨みは一生忘れないからな」

「野崎、逆恨みもいい加減にしろ。高校生の俺が偉そうなことを言える立場じゃないことは分かってるが、世の中の人たちは超能力なしで生きているし、自分で人生を切り開いてるんだ。お前は努力が足りないんじゃないか。必死でやれば、道は開けるんじゃないか、俺はそう思ってる。超能力を使えば俺に出来ないことはない。極端な言い方だが、核兵器よりも俺は恐ろしい人間兵器にだってなれるんだ。証拠を残さず銀行強盗もできる。俺に出来ないことは何もないんだ。でも学校のテストは実力でやってるし、今まで超能力を私利私欲に使ったことは一度もない。これからの自分の人生も、超能力なしで自分の努力でやっていくつもりだ。努力は必ず報われると思ってやってるんだ。だから野崎さん、あなたももう一度、一から頑張ってください。偉そうなことを言って、済みませんでした」

　将は野崎に軽く頭を下げると、赤井の家へテレポートした。野崎は将にいろいろなことを学んだと思った。超能力以外に将は、生きていくうえで大事な自分の哲学を持っているような気がする。

　自分は狩をするのにライフルしかないと思っていた。今までライフルに頼って狩をしてきた。ライフルを取り上げられた今、狩ができないと言って泣き叫んでいるが、将は違う。将はライフルを持っているにも関わらず、それを使わずに、自分で考えたいろいろなワナで狩をしているのだ。

　野崎は自分もワナを作ってみようと思った。生きていくためにはそれしかないと思い始めた。ライフルは弾がなくなったら終わりだ

が、ワナは創意工夫でいくらでも作ることが出来る。十歳ほど歳の離れた将に、人生で生きていくために一番大事なことを教えてもらったと思った。

4―2

「将君、どうだった？」

「はい。彩ちゃんの推測どおり、野崎の超能力は無くなりました。動機のない犯罪はもう起きないです。でも野崎の犯行を実証することは出来ないです。何も証拠がありませんから」

「サイレント・パニッシャーのホームページは無くなるだろうけど、マサルくんが引き受けた件はどうするの？」

「あれは実行するよ。現役の刑事さんの前でこんなことは言いにくいんだけど、野崎と話してて、非合法的な裁きも必要かなと思ったんですけど、赤井さんはどう思いますか？」

「現役刑事の俺が言ったらいけない言葉だけど、オフレコで本音を言えば、必要だな。野崎の考えを全面否定は出来ないけど、あいつは私利私欲を優先して、見境なしに殺人までやったからダメなんだ。俺は法が絶対だとは思っていない。もし非合法的にやるとしても、最終的には法で裁かれるような形に持っていくのが最良の方法だと思う。それだと合法だろう。

話は変わるけど、本来、病院は病気を治すことを主にするより、病気を予防することを主にするべきだと思うんだ。なぜかと言えば、皆が健康だったら病院も薬も少なくて済むからね。しかし現実はそうじゃないよね。だから我々も、病気になったら病院に行けばいいという考えじゃなくて、病気にならないためにはどうしたらいいかに、力を入れるべきなんだ。それが一番大事なことだと思うんだ。事件も同じで、起きてしまってから犯人を逮捕する、二度と同じ事件が起きないようにする、というのも大事なことだけど、理想論で

言えば、事件を未然に防ぐことが最も大事なことなんだ」

「理想ではそうですけど、実際困っている人は山ほどいるわけだから、事後処理みたいなパニッシャーが必要だと思います。赤井さんが昨日言ったように、全ての人を満足させることは出来ないから、事前処理までは不可能ですね。事後処理にしても、僕みたいな能力を持った人間が他にもいて、協力してくれれば助かるんですけど」

「ねぇマサルくん、野崎の超能力はソウルノートを取り替えたから消えたんだよね？」

「そうだよ」

「だったら、またソウルノートを同じものに取り替えたら、超能力も元に戻るんじゃないの？」

「あっ、そうか。そんな当たり前のことを考え付かなかった」

「野崎は強力なテレパシーという超能力を持っていたけど、彩ちゃんが持つとしたら、どんな力が欲しい？」

「そうねぇ、私だったら病気を治してあげられる力が欲しいわ。心の病気も含めてだけど」

「なるほど。彩ちゃんにピッタリだね」

ソウルノートを取り替えることで癌は治せたが、それ以外の病気は自分には治せない。自分にもないその能力があれば、たくさんの人を救うことができる。赤井にも何か超能力があれば、事件を未然に防げるだろうし、不幸な事件も最小限で食い止めることが出来る

かもしれない。そんなことを漠然と考えていた。

4―3

野崎は、ボロアパートを解約していた。超能力が無くなった今、サイレント・パニッシャーのホームページも閉じるしかなかった。ボロアパートを出る一日前、依頼の電話に出てみたが、相手の心を読み取ることは出来なかった。恋人の裕美の心も読めない。今の野崎に残されたものは、高級マンションと小林裕美、それに挫折感と、将に対する憎しみだ。将から学んだと思ってたことも、怒りのほうが先に立ち、野崎の記憶からは消えていた。

「絶対に超能力が使えるようになってやる！　そのときは中瀬、お前を真っ先に始末してやるから覚えてろ」

ソファーに座り、ウィスキーの水割りを飲みながら、野崎は心に固く誓った。隣に座っていた裕美が野崎の様子に驚いたのか、ウィスキーグラスを口から離すと聞いてきた。

「真也さんどうしたん？　恐い顔して。何かあったん？」

裕美は一週間ほど落ち込んで全く元気のなかった野崎の目に、鋭い光が見えたような気がした。何があったにしろ、野崎が元気になったのが嬉しかった。一時は魂の抜け殻みたいになっていた。精気も元気もない野崎は、まるで生きる屍のようだった。

野崎は何を思いついたのか、パソコンを立ち上げると、しきりに何かを検索し始めた。裕美が気になって問いかけても、画面に夢中になっている野崎の耳に、裕美の声は届いていない。その後もネット検索は一週間ほど続いている。

「やっと見つけたで！　これや」

検索に熱中していた野崎は、何を見つけたのか興奮したような口ぶりで力強く言った。裕美は野崎が、以前の自信に満ち溢れた表情に変わったのを、はっきりと感じた。野崎の何かが変わる。そんな気がする。

「裕美、しばらく旅に出るから留守番頼むわ」

「行き先は何処なん？　何日ぐらいやの？」

「行き先は今は言えへん。何日ぐらいになるんかは、行ってからやないと分からへん。携帯持ってるから、いつでも連絡つくやろ」

「分かった。気いつけてな。ほんで、いつ出発すんの？」

「善は急げや。明日の朝一番に出発や。俺の新しい人生へ向けての再出発や。帰ってきたら変わってるからな」

野崎はどうして落ち込んでたのか、何が再出発なのか裕美には全然分からなかったが、野崎の精気に満ちた表情を見ていると、ふと、自分とは住む世界が違うような気がした。

野崎は翌朝早く出発した。行き先は青森県下北半島に位置する恐山だ。恐山は、高野山、比叡山と共に数えられる日本三大霊場のひとつだ。ネット検索で見つけた、ある人物に会うためだ。その人物が自分の運命を握っていると確信したのだ。その人物の名前は真導子と書いて、「しんどうし」と読む。ネットでは性別、年齢とも分からない。

野崎はネット検索の口コミで、真導子を探し当てたのだ。最初から真導子を探していたのではなく、自分の欲求を満たす人物を検索していたとき、偶然、興味を引く闇サイトを見つけ読んでみたところ、真導子を見つけたのだ。

大阪伊丹空港を出発した野崎は青森空港に降り立つと、カーナビ付のレンタカーを借りた。陸奥湾を望む国道二百七十九号線を北上

し、目的地までの距離、約百二十キロを走る予定だ。
真導子は恐山の麓に住んでいる。住所は定かではないので、近所の人に聞きながら行くしかない。野崎は陸奥湾を眺めながらのドライブをするつもりなど、毛頭ない。とにかく一刻も早く真導子に会いたかった。

野崎が恐山に着いたのは、午後二時を少し回ったころだ。近所の人に聞いてみたが、真導子なんて聞いたことがない、と言う返事しか返ってこない。ウソだったのか！　そう思いながらもここまで来た以上は、手ぶらで帰るわけにはいかない。自分の今後の人生の全てがかかっているのだ。
半分諦めつつレンタカーで走っていた野崎は、古い民家の縁側に座っている老人が目に付いた。クルマを停めた野崎は老人に近づくと声をかけた。老人はシワクチャの顔をしている。

「こんにちは。いい天気ですね。僕は大阪から、ある人を探しに来たんですが、教えてもらえないでしょうか？」
老人は、シワクチャの顔をさらにシワクチャにしながら微笑むと、
「わしが知ってる人ならいいですよ。名前は何と言うのかな？」
「私は野崎と申します。探してるのは、真導子という人です。いろいろな人に聞いたんですけど、誰も知らないので、もしかしたらここには居ないのかなと思ってるんですけど・・」

「真導子を知ってる人は、ほとんどいないだろうな」
老人の口ぶりに光が見えたような気がした野崎は、身を乗り出しながら続きを聞いた。
「ちょっと待ってもらえるかな。分りにくい所だから地図を書くから」
老人は奥から新聞に入ってたチラシを持ってくると、その裏に地図を書き始めた。真導子は、道路から外れた道とは思えない道を入

った雑木林の中に住んでいるという。

4―4

野崎は老人に礼を言うと出発した。地図を頼りに近くまで来ると、クルマを停めた。ここからは徒歩になる。老人の書いた地図には、獣道と思えるような道が書かれている。その道の入り際に、長さ五十センチほどの古びた角材が立っている。よく目を凝らして見てみると、真導子と彫ってある。

野崎は期待に胸を膨らまし、獣道へ入っていった。三百メートルほど進むと、汚い古びた納屋みたいなものが見えてきた。真導子の家だろう。家の周りには、野菜が乱雑に植えてある。人がいる証拠だ。家の前に来た野崎は声をかけた。

「真導子さんはいらっしゃいますか？　私は大阪から来た野崎と申します。真導子さんに助けていただきたくて、やってきました。どうか私を助けてください。お願いします」

一分ほどすると引き戸が開いて、性別不明の老人が現れた。真導子という名前からして性別不明だ。歳は八十から百歳ぐらいに見えるが、眼光は鋭い。

「話を聞くから入れ」

「よろしくお願いします」

野崎は頭を下げると、真導子と一緒に家の中に入った。部屋は六畳と八畳ぐらいの二間だ。電気はなく、屋根につけた明り取りからの日の光が照明となっている。外から見るのと違って、部屋は綺麗に片付いている。中央には神棚に似たものがあり、仏像みたいなものが祀ってあるが仏像ではない。初めて目にするものだ。

「助けて欲しいとはどういうことじゃ？」

「はい。実は私は人の心を読み取ったり、操ったりする能力を持っていました。その能力を、ある男に消されてしまったんです。お願いというのは、その力を元に戻してもらいたいんです」

「何のために戻すのじゃ？　その力がなくても生きていけるじゃろう」

「正直に言います。その力で、依頼された仕事をやってきました。人殺しもやりました。理由は金を稼ぐためです。その力が私の全てなんです」

「お前は悪人じゃな？」

「そうです。悪人です」

「力が戻ったら、また同じことをするのか？」

「はい」

「ホッホッホッホ。正直なやつじゃ」
何が可笑しいのか、真導子は小さな声で笑った。

「わしも悪人じゃ。良かろう、お前の力を戻してやろう」

「えっ！　本当ですか。本当に出来るんですか！」

「分らんが、やってみよう」

真導子はそう言うと、中央の祭壇に祀ってある仏像らしきものの前に座った。意味不明の言葉というか、呪文みたいなものを唱え始めた。両手を胸の前で組み、呪文を唱えている。

呪文が終わると野崎を自分の前に座らせ、右手を野崎の額に当てた。真導子は目を閉じると、再び意味不明の呪文を唱え始めた。真導子の額に汗が滲んでいる。五分ほど経った頃、大きく息を吐いた真導子は静かに目を開け、額に当てている右手を離した。真導子が息を吐いた瞬間、野崎は自分の中で何かが変わったような気がした。

「終わりじゃ。終わったぞ。力が戻ったか、あるいは別の力が備わったかは、自分で試してみることじゃ」

真導子は何事もなかったかのように呟いた。心なしか、疲れているように見える。相当なエネルギーを使ったのだろう。野崎はカバンから袋を取り出すと、真導子に渡した。袋には百万円の札束が入っている。

「真導子さま、ありがとうございました。これは心ばかりのお礼です」

家から出た野崎は深々と頭を下げると、真導子の家を後にした。今夜は恐山のホテルに泊まり、明日、大阪に帰ることにした。力を試すのは大阪に帰ってからにした。野崎は未来が見えたと思った。それと同時に、将への復讐心が脹らんでいくのも感じていた。

4―5

野崎は神戸の高級マンションのベランダから夜景を眺めながら、ウィスキーの水割りを飲んでいた。十階のベランダからの眺めは素晴らしく、頭の中を空っぽにしてウィスキーを飲みながらの時間は、野崎にとっての至福のひと時となっている。

将に消された超能力が元に戻った今、野崎は心行くまでこのひと時を堪能していたい気分だ。超能力を消されたとき、自分の人生は終わったと思っていたが、恐山の真導子の手によって超能力が戻り、新たな人生が開けたという実感を噛み締めた今、それも遠い過去のような気がする。

恐山で目的を果たした野崎は自宅へ帰ってきた翌日に、超能力が使えるようになったかどうかを試してみた。恋人の裕美を呼んで彼女の考えを読んでみた。戻っている！　野崎の顔に不敵な笑いが浮かびあがった。

次に野崎は裕美に服を脱ぐようにテレパシーを送った。裕美はわけが分らないまま、いきなり服を脱ぎ始めた。満足そうに無言で頷いた野崎は、真導子が言ったことを思い出した。

「力が戻ったか、あるいは別の力が備わったかは、自分で試してみることじゃ」

もしかしたら別の力も備わっているのではないか？　そんな気がした野崎は、その別の力を試すべく実験をやってみた。実験をやるといってもやり方が分からない。

野崎は超能力を誰にも知られたくなかった。裕美に帰るようにテレパシーで念じると、裕美は首をかしげながら、何も言わずにマンションを出て行った。

一人になった野崎は、将のようにテレポートしようとしてみたが、何も起こらない。次にテーブルの上の灰皿に、動けと念じたが灰皿はピクリともしない。やはりダメか。そう思いながらも、やり方を変えてみることにした。ただ念じるのではなく、灰皿が浮かび上がるところをイメージしながら、再び念を送ってみた。するとどうだ。灰皿が浮かんだのだ。

「やったぞ！　アッハッハッハッハ。中瀬覚えてろ。俺の前に土下座させてやる。いくら泣きわめいても許さへんぞ。必ずお前をあの世へ送ってやるからな」

テレパシー以外に念力まで使えるようになった野崎は、スーパーマンになった気分だ。サイレント・パニッシャーのサイトは閉鎖したが、今度はバレないように別の手を考えていた。別の手も私欲を肥やすための手段だ。

明朝、野崎はマンションを出ると、中古車販売店へと向かった。作戦を実行するための足となるクルマを買うためだ。目立たないように、ありふれたトヨタカローラの中古車を買った。五年落ちで色はシルバーだ。契約を済ませると、近くの地方銀行へと足を運んだ。

時間は十一時。四台あるＡＴＭコーナーはどれも混んでいる。野崎は並んでいる客を見回しながら、彼らの頭の中を覗いていった。その中に、ある中堅企業の社長婦人を見つけた。彼女の名前は島村良恵、四十八歳。頭の中を覗いたところ、会社はかなり儲かっている。

野崎は五十万円を二回に分けておろすようにテレパシーを送った。良恵は駐車場に停めてある彼女のクルマの前まで来ると、そこで待っている野崎へ、おろしたばかりの百万円を渡した。彼女の記憶は、現金をおろして野崎に渡したところだけが空白となっている。

現金を受け取った野崎は、目立たないように、何事もなかったようにゆっくりと歩き出し次の銀行へと向かった。野崎は人相が分からないように、メガネをかけてマスクをしている。

銀行の駐車場を出て歩いている途中、歩道にベンツを乗り上げて駐車させている男に出会った。ひと目でその筋の人間と分かる風貌の男だ。通行の邪魔になるのが分っていても、自分の特権とばかりに駐車している。

もし文句でも言おうものなら凄んでくるのは目に見えている。一般庶民は文句があっても、この手の人間には何も言えないのが現実だ。逆に言えば、一般庶民には絶対になめられない。それが彼らのプライドとなっている

野崎はニヤリと笑うとベンツに向けて念を放った。五秒ぐらいでベンツのタイヤがすべてパンクし、ボンネットと屋根が大きくへこんだ。野崎の思ったとおりになったのだ。

男は何事が起きたのかと右往左往していたが、野崎は嬉しくてしょうがない。今までテレビなどで見る超能力は、どれもが曖昧でとても超能力と思えるものではなかった。

スプーン曲げやテーブルの上のコインを動かすことなど、とても超能力とは思えない。仮にそれが超能力で動いたとして何になる？

と思っていたが、今自分が持っている能力は、言い換えれば究極の兵器なのだ。ただ、どれぐらいの重さのものまで動かすことができるのか、いずれ試してみる必要があると思った。

野崎は毎日超能力の使い方の練習をしていた。その結果、念力とテレパシーをほぼ完璧に使えるようになっていた。他にも何か超能力が身に付いたのではないかといろいろと試してみたが、結局、テレパシーと念力だけだった。

サイレントパニッシャーのサイトを閉じてからは、銀行へ足を運

ぶ毎日だ。目立たないように地味な服装で、同じ銀行へは二ヶ月以上間を置いてから行くようにしている。

野崎はテレパシーを使って相手を意のままに操り、お金を受け取っていた。お金を渡したほうの相手は、お金を下ろしたことは記憶にあるものの、野崎に渡したことはまったく覚えておらず完璧な完全犯罪だった。今や野崎の現金は一億円を超えている。犯罪を繰り返しながらも野崎は、将への復讐を忘れていなかった。

「中瀬、今度会ったら、あの世へ行ってもらうで。完全犯罪でな。楽しみに待っとれや」

不敵な笑みを浮かべ野崎は呟いた。今は中瀬と戦っても勝てる自信がある。中瀬と自分の差は、テレポートの能力だけだと思っている。

4－6

将には気になることがあった。気になることというよりも、どうしても知りたいことと言ったほうが正しいかもしれない。それは彩子と赤井刑事と一緒に、いろいろな事件を調べたり解決したりしているうちに、あることにふと気づいたことがきっかけだった。

その気になることを調べるために、ある特定の人たちをネットで探していた。特定の人たちとは、普通の人にない特別な能力を持った人のことだ。超能力と呼ばれる念力やテレパシーなどの他に、霊媒師、霊能力者、占い師、預言者などだ。

ネット検索でそれらの人を見つけると、すぐに幽体離脱して彼らの意識に入り何かを探っていた。今までに五十人ほどの超能力者や占い師、霊能者などを調べた。

今日も帰宅するとパソコンを立ち上げ、ネット検索を始めた。検索を始めて五分が経過した頃、携帯電話の着信音が流れてきた。ディスプレイには、彩ちゃんと表示されている。

「はい、マサルだよ」

「マサルくんどうしたの？」

「どうしたのって、何が？」

「最近、ちっとも電話くれないから、何かあったのかな？　って考えてたの」

「全然気にする必要ないよ。ちょっと調べたいことがあって、毎日ネット検索してるんだけど、なかなか探してるものが見つからなくて、ちょっと時間がかかってるんだ」

「ふぅ～ん。探しものって何なの？　私も手伝ってあげるわよ」

「今は言えないけど、見つけたら話すからちょっと待ってて。別にトラブルでも何でもないから、心配することはないよ」

「だったらいいけど、後で教えてね。じゃあまたね。バイバイ」
将の仮説はソウルノートにあった。ソウルノートには、魂の修行計画が書かれているが、それ以外にも不思議な力がある。その不思議な力を見つけるには、超能力者を探すのが一番の近道と思った将は、毎日ネットで超能力者の検索をしていたのだ。今日も三時間ほど検索したが、期待する人は見つからなかった。
「ダメだな。やっぱり彩ちゃんに手伝ってもらうとするか」

彩子の携帯の着信音が鳴った。着信音は最近の流行の曲だ。
「マサルくん、探し物が見つかったの？」
「その逆だよ。全然ダメだから電話したんだ。彩ちゃんにも協力してもらおうと思って」
「探し物は何なの？　何を探せばいいの？」
「超能力者」

「えっ、超能力者？」
彩子は何かの商品だとばかり思っていたが、将から返ってきた返事は予想外のものだった。
「俺の仮説を証明するというか、気になっていることを確かめるために超能力者を探してるんだ」
「どんな仮説なの？」

「鵜匠の野崎のソウルノートの色は薄い水色で、彼にはテレパシーの能力があったけど、たとえばソウルノートの色によって、能力が違うんじゃないかと思うんだ」
「それで超能力者を探してるのね？　でも、超能力者って、そんなに大勢いるわけないと思うわ。ほとんどが口先だけの人じゃないの？」
「今まで五十人ほどの意識に潜り込んでみたけど、能力も何もない普通の人だったよ。まぁ、ほとんどの人が金儲けのためにやってる

だけだね」

「ネットに載ってるかもしれないけど、私たち女生徒の間では、東京の品川区にいる、しずくあけみという占い師が有名よ。雫明未って書くんだけど、良く当たるらしいわよ。本人は、予言占い師って言ってるそうだけど」

「予言占い師かぁ、ありがとう。ちょっと調べてみるよ」

彩子から明未という占い師の住所を聞いた将は、幽体離脱をすると明未の意識に潜り込んでみた。明未はちょうど占いをやっているところだ。明未のソウルノートは薄い黄色をしている。初めて見る色だ。占ってもらっているのは、二十代半ばと思える女性だ。意識体の将は、しばらく明未の占いを彼女の意識の中から見てみることにした。

「あなたは二十八歳で転職します。そこで知り合った男性と三十歳で結婚します。男の子と女の子、一人ずつの子宝に恵まれます」

「今付き合っている人がいて結婚を考えているんですけど、その人ではないんですか？」

「違います」

「プロポーズされてどうしようか迷っているんですけど、断ったほうがいいんですか？」

「成り行きに任せることです。予言では今の相手とは、近々破局します。それがきっかけとなり転職します」

意識体の将は明未の予言を聞いていて、あることを発見し驚いた。明未の予言は絶対に当たるはずだ。なぜなら彼女は、ソウルノートに書かれていることを言っているのだ。

薄い黄色のソウルノートを持っていると、相手のソウルノートに書かれていることが分るのだ。明未の意識を覗いていた意識体の将は、彼女にはソウルノート自体は見えていないこと、ソウルノート

の存在を知らないことが分かった。
彼女には相手のソウルノートの内容が、自分の意識の中に見えるのだ。それに明未の占いから、もうひとつ分ったことがあった。それはソウルノートの内容を教えても問題はないということだ。
以前から将は、ソウルノートの内容を教えると、何かとんでもないことが起きるような気がしていた。それは例えて言うなら、過去を変えると未来に大きな影響が起きるというように。
そんな将の懸念など知る由も無い明未の占いは、そんなことはまったく考えずに、自分の意識の中に浮かんだ相手のソウルノートの内容を言ってるのだが、問題は起きていない。

4―7

意識体の将は一旦自分の肉体に戻ると、再びネット検索を始めた。検索をしながら、まだ将が小さい頃、熊本の実家のお婆ちゃんが母の直美に言っていたことが頭をよぎった。

「菊池に、よう当たる神様のおらすばい。あんたも何か心配ごとのあっときゃ、いっぺん見てもらうとよかばい」

お婆ちゃんが言ってたのは、熊本の菊池に近所の人から神様と呼ばれている人がいて、良く当たるという評判だということだ。心配事があれば何でも相談すればいいとのことだ。

幽体離脱した意識体の将は熊本のお婆ちゃんの意識に潜り込むと、菊池の神様の居場所を調べた。お婆ちゃんは何度か神様のところへ行ったことが、意識に残っていた。

意識体の将は菊池の神様を見つけると、意識の中に潜り込んだ。菊池の神様は七十歳の男性だ。神様のソウルノートの色は、黄色がかった薄い黄緑だ。先に調べた雫明未のソウルノートの色よりも、緑がかっている。

菊池の神様は明未と同じようにソウルノートに書いてあることが、意識に浮かんでくるという能力を持っていた。それに加えてソウルワールドから発せられているソウルエネルギーを取り込み、それで病気の治療もやっていた。

ソウルワールドからのソウルエネルギーに当たると、病気や怪我はもちろん、難病も治るのだが、菊池の神様はソウルエネルギーを取り込むと言ってもごく僅かしか取り込むことが出来ないため、難病まで治すことは出来ないようだ。ソウルエネルギーを取り込むことは将にも出来ない。

翌日将は、明未と菊池の神様のソウルノートを見てきたことと、彼らの能力について彩子に話した。

「ふぅ～ん、そうなの。と言うことは、特殊な能力を持っている人たちは、普通の人たちとは違ったソウルノートを持っているわけだから、逆に普通のソウルノートしか持っていない占い師とかは、全員ニセモノで当たらないということね？」

「いや一概にそうとは言えないと思うよ。占いは古い歴史があるから、ソウルノートが普通でも、占いの勉強をやっていけば当たるようにはなると思うよ。ただ特殊なソウルノートを持っている人は、その勉強は必要ないし、何十年も勉強した占い師よりも、良く当たるというのは事実だね」

「それとソウルノートに書いてあることを言っても、何も問題が起きないんだったら、私のソウルノートには何て書いてあるのか教えてくれない？」

「彩ちゃん、それは言いたくない。今は妊娠しているときから赤ちゃんの性別が分るけど、俺の子供だったら産まれてくるまで聞かないよ。知りたいという気持ちは分かるけど、知ってどうなることでもないだろう。それに例えば、十年後にアメリカで買ったロトくじで百億円当たると書いてあったとして、それを言ってしまったら、その人は何も努力しなくなるだろうし、そうなると事前に言うことがその人にとっては、決していいことだとは言えないよね。言っても言わなくても、ソウルノートに書いてあることは必ず起きるんだから」

「そうね。じゃあ私も聞かないわ。ところで、あと何人の超能力者を調べるつもりなの？」

「今調べた二人は、どちらかと言えば未来のことを言い当てる能力だけど、あと調べたいのは、俺みたいに念力やテレポートなどを使

える超能力者なんだ。そのほかにも、何か特別な能力を持った人がいれば、その人のソウルノートも見たいけどね」

「それで最終的に、いろいろなソウルノートを調べてどうするの？何か考えてることがあるの？」

「ちょっと考えてることがあるんだけど、まだ言える段階じゃないし、俺の仮説が間違ってたら言う必要もなくなると思うから待ってて」

「分ったわ。あんまり期待しないで待ってるわね」

彩子がイタズラっぽい表情で言った。

4―8

将は心霊治療家も探していた。ネットで検索しては彼らの意識に潜り込んで調べてみたが、今まで本当の心霊治療家は一人もいなかった。ひどい治療家になると、先祖の祟りだとか供養が間違っているとか、相談者を不安に陥れることを言っては、それらの供養のためにという理由で法外な費用を要求しているものもいた。

ふと将は外国人も調べることを思いついた。意識体の将には、距離と時間は関係ない。日本の裏側の国だろうと瞬時に移動できる。また言葉の心配もない。テレパシーは言葉ではなく、意識で想いが伝わるからだ。

候補地として、人口の多い中国とインドを選んだ。理由は人口の多いほうが、目的の人物の見つかる可能性が高いと思ったからだ。調べる方法として、その国の地方の人たちの意識に入り、心霊治療家や不思議な能力を持っている人を探すことにした。意識体の将にとっては一時間もかからない。

幽体離脱した意識体の将は、南インドの中規模都市のサレムに移動した。場所はどこでも良かった。手当たり次第に道行く人の意識に潜り込み、情報を探り始めた。

人数的に五千人ほどを探ったところで、心霊治療をやってもらった人が見つかった。その人は心霊治療によって、ガンが治っていた。ソウルノートにはガンになることが書かれていたが、治ることまでは書かれていない。心霊治療家の約半年ほどの治療で完治していた。

将が日本中の末期ガンの患者を治したときには、こげ茶色に変色していたソウルノートを新しいものに取り替えることでガンが完治した。インド人の心霊治療家の場合は、ゆっくりと時間をかけて治

していたので、ソウルノートを取り替えるという方法ではない。その人の意識から、心霊治療によってガンが治ったのは明白だ。意識体の将は、その人の意識の中から心霊治療家を探しあてると、瞬時にその治療家の意識に潜り込んだ。

治療家のソウルノートは、今まで見たことのない色をしている。それはごく薄いピンク色だ。ピンク色のソウルノートは、病気を治す能力があるのだ。

治療家の意識には、ガン以外に、糖尿病、精神病、眼病、いろいろな難病などを完治させた記憶が残っている。

熊本の菊池の神様のソウルノートは薄い黄緑だった。この神様は病気を治していたが、同時に予言もしていたので、病気を治すだけの能力とは違った色だということが分った。

目的を果たした意識体の将は、自分の肉体へと戻った。幽体離脱してから、十分しか経っていない。今までに分ったソウルノートの色は、病気を治す力のピンクと、テレパシーの水色だが、これではまだ不十分だ。将は次の目的地を考えた。

以前、旧ソ連が超能力の研究をしているというのを何かで読んだのか、誰かに聞いたのか将の記憶の片隅に残っていた。将は再び幽体離脱すると、ソ連のノブゴロドへと移動した。サンクトペテルブルクから南へ二百五十キロほどのところにあり、何処からともなくクラシック音楽が聞こえてきそうな、小さな綺麗な街だ。

意識体の将はインドで調べたのと同じように、手当たり次第にノブゴロドの住人の意識に入ると、超能力者を調べた。ノブゴロドから南へ五十キロほど南下したところで、手がかりを見つけた。

それはある老人の記憶の中にあった。手を触れずに物を動かす男の記憶だ。男の能力自体は強くはないが、確かに手を触れずに道端の小さな石ころを動かしていた。老人の記憶をたどる限りではトリックは一切ない。本物の超能力だ。

意識体の将は、老人の意識の中から調べた男の意識に潜り込んだ。
男のソウルノートは、ごく薄い紫色をしている。超能力者の証だ。
紫色のソウルノートには、念力の能力があるのだ。目的を果たした
将は自分の肉体へと戻った。

「よし！　これで準備ＯＫだ。強力な助っ人ができるぞ！」
将は何かを確信したように拳を握り締め、小さくガッツポーズを
すると、無言で頷いた。その表情には自信がみなぎっていた。

4－9

ソウルワールドは、ひと言で言えば超能力の世界だ。そこにいる意識体がすべて超能力者なのだ。移動は瞬時にでき、手を使わずに意識で物を動かせ、会話はテレパシーだ。欲しいものは念じるだけで目の前に現れる。超能力というより、それに魔法をプラスしたようなものだ。

ソウルワールドではそれが当たり前のことで、そのこと自体を誰も特別なこととは思っていないが、これらの能力の一つでも人間の世界で使うことが出来れば、それは超能力者ということになる。

人間の世界で言う超能力者とは、何らかの理由で、ソウルワールドの力を持って産まれた人のことなのだ。どういう理由で超能力を持って産まれるのかは、意識体の将には分からないが、将自身はソウルワールドでの力をほとんど持っている。

意識体の将は、最近は毎日ソウルワールドへ行っている。ソウルワールドへ行くとソウルノートを探し始める。そこでは無数の意識体が、次々と現れてくるソウルノートに触れ、自らの修行計画を書いている。意識体はそれを持って、産まれてくる。

意識体の将はその人特有のシグナルが分かっていると、その人を必ず見つけられるという能力も持っている。世界中のどこに居ようが、探すのに五秒もかからない。そんな意識体の将がソウルワールドで、ある特定のソウルノートを探し始めて約一時間が経っていたが、まだ見つかっていない。今日もそろそろ二時間になろうとしたときだ。

「見つけたぞ！」

意識体の将が叫んだ。といってもソウルワールドでは声はない。

心の中で叫んだ。その場所には、色の付いたソウルノートが何枚もあった。薄い色や濃い色など様々だが、意識体の姿はない。なぜ意識体がいないのかは分からない。さながらそこは、ソウルワールドの中でも特別の世界のように思える。色の付いたソウルノートだらけなのだ。

目的のソウルノートを見つけた意識体の将は、肉体に戻ることにした。肉体に戻った将が時計を見てみると、幽体離脱してから二時間十五分が経っている。今までこんなに長い時間、ソウルワールドにいたことはない。

将は今までに調べたソウルノートの色と、能力についてまとめていた。水色はテレパシー能力。黄色は相手のソウルノートに書かれていることが分る能力。黄色がかった緑色は、黄色の能力に加えて、ソウルワールドから発せられているエネルギーを取り込み、それで病気の治療ができる能力。ピンク色は病気を治す能力。紫色は念力の能力がある。

将が調べた超能力者のソウルノートは、どれもが薄い色だ。もし濃い色だとすると、強い超能力を持つのではないかと考え、濃い色のソウルノートを持ってきたのだ。

ソウルワールドから戻った将は、彩子と赤井に電話をかけた。

「はぁ〜い彩子だよ。何か相談事？」

「まぁ、相談と言ったら相談だけど、お願いがあるんだ。今から赤井さんにも電話するんだけど、二人一緒にお願いがあるんだ。赤井さんに電話したら、もう一度かけなおすから待ってて」

そう言うと将は一方的に電話を切った。何か急いでいるような様子に、彩子は首をかしげた。

「おう将君。久しぶりだな。どうした？　何か事件か？」

「何か事件か？　って聞くのは僕のほうでしょう。赤井さんは刑事さんなんだから。実はお願い事があって電話したんですけど、今夜、

お邪魔してもいいですか？」
「出来れば明日の土曜日がいいな。明日は休みで特に予定もないから。一緒に昼ご飯でも食べながらどうかな？」

翌日、将は彩子と一緒に赤井の自宅を訪ねた。赤井の家までは電車を使った。たまには電車で行こうと彩子が言ったからだ。電車の時間を知らせてあったので、赤井が駅まで迎えに来ていた。
「こんにちは。すみません、わざわざ迎えに来ていただいて」
彩子が先に口を開いた。時刻は午前十一時半を回ったところだ。
「いらっしゃい彩子ちゃん。二人とも元気そうだな。早速、腹ごしらえするか。何が食べたい？　遠慮しないで何でも言っていいぞ」
「来る途中で二人で相談してたんですけど、回転寿司でもいいですか？　僕は十皿に抑えますから」
「将君。遠慮しなくていいよ。いくら安月給といっても、回転寿司ぐらいじゃ俺の財布は、びくともしないよ。アッハッハッハッハ」
「じゃあ、お言葉に甘えさせていただきます。ねぇ、彩ちゃん」
「私も太らない程度にいただきます。ゴチになります」

将は言葉どおり、旺盛な食欲を見せた。赤井は将の食べっぷりを見るのが好きだ。見ていて気持ちいいほど、次々と胃袋におさめていく。三十分ほどで寿司を堪能した三人は、食べた皿の数を数え始めた。
「俺は十八皿。将君は？」
「え～っと、三十二皿です。彩ちゃんは、ちょうど十皿だね。と言うことは、全部で六十皿。赤井さん、すみません。半分は僕が食べてしまいました」
「相変わらず豪快な食べっぷりだな。育ち盛りだからジャンジャン食べないとな。今、身長と体重はどれぐらいだ？」
「身長は百七十八センチで、体重は七十キロです」
「身長は俺と同じだな。体重は十キロほど少ないけど。彩子ちゃん

には聞かないでおくよ。ちなみに身長はいいよね？」
「どうってことないですよ。百六十五センチ、四十八キロです」
彩子があっけらかんと答えた。三人は寿司屋をあとに、赤井の自宅へと向かった

4－10

自宅に着くと赤井は、買ってあったショートケーキとジュースを持ってきた。
「彩子ちゃん、寿司を食べたばかりだから、入らないかな？」
「私の場合、ケーキは別腹です。遠慮なくいただきますね」

ケーキを食べながら、将がおもむろに口を開いた。
「赤井さん。最近は凶悪事件とか難事件は少ないんですか？」
「そうだな。幸い今のところはそんな事件はないな。君の力を借りないで済んでいるから、平和だということだよ」
「ところで、もし赤井さんがひとつだけ超能力を使えるとしたら、どんな能力が欲しいですか？　僕は、テレパシー、テレポート、念力とかが使えますけど」

「そうだなぁ。ひとつだけだったら念力だな。この能力があれば危険を避けることが出来るし、犯人逮捕にも役立つし。もちろんテレパシーが使えたら嘘を見抜けたりもするけど、咄嗟の危険回避にはやっぱり念力だな」

「彩ちゃんは？」

「前にも同じこと聞いたんじゃない？　私は病気を治す力よ。難病とかで苦しんでいる人を救ってあげられたら素晴らしいわ。でも聞いてどうするの？　私たちも超能力が使えるようにしてくれるの？」
「いやそうじゃなくて、たとえばの話だよ」
「そうよね。野崎の超能力を奪ったけど、元には戻せないんだから、私たちに超能力を使えるようには、さすがのマサルくんにも出来ないわね。でも、病気を治せたら素晴らしいけどなぁ・・」

将は、二人の言ったことを噛み締めるように小さく頷いた。

「ところで将君、久しぶりに超能力を見せてくれないか？」

「構いませんけど、急にどうしたんですか？」

「しばらく君の超能力を見ていないし、まさか使えなくなってるってことはないよな？」

「僕もここのところ全然使ってないので、ちょっと使ってみますね。使えなくなってたらガッカリですけど」

そう言いながら将は、赤井の後ろから肩を叩いた。赤井の後ろにテレポートしたのだ。

「わぁ！」

「赤井さん、いきなり大声出さないで下さいよ。ビックリするじゃないですか」

「将君、ビックリしたのはこっちだよ。テレポートするならするで、ひとこと言ってくれよ」

「それじゃあ、ついでにもう一度ビックリしてもらいますよ」

将が言い終わった瞬間、将と赤井は、地上百メートルのところに浮いていた。赤井が返事をする間もなく、ものの一秒後だった。傍から見ると、まるでスーパーマンの映画のような世界に、赤井が発する言葉は一つしかない。

「ギャァァ～～～ア」

赤井は、あらん限りの声を絞り出して悲鳴をあげた。長年刑事をやってきて、いろんな修羅場を潜り抜けてきた赤井だが、今の状況は悲鳴をあげるしか手立てがなかった。

「赤井さん大丈夫ですよ。落ちませんから」

「まっ、まっ、将君。もう分かったから・・、地上に降ろしてくれ・・」

顔面蒼白の赤井は、聞き取れないほど小さい声で言った。大声を出すと、そのまま落下しそうに思えたからだ。それに加え、赤井は高所恐怖症だった。

赤井が言い終わると同時に、二人の姿は居間に戻っていた。百メートルの上空からテレポートしたのだ。居間に下りた赤井は顔面蒼白で、今にも倒れそうに見える。

「赤井さん、大丈夫ですか？」

「彩子ちゃん、もう絶対に将君に超能力を見せてくれとは言わないことにするよ。死ぬかと思った。ふぅう」

「赤井さん、新しく覚えたというか、発見した超能力を見ますか？」

「おいおい将くん、さっきみたいなのは勘弁してくれよ。俺は見ているだけの超能力にしてくれよ」

「大丈夫です。早速、試してみますから外に出てください。彩ちゃんも一緒に見てて。たぶん、ビックリすると思うよ」

三人は外に出た。

「人に見られるとまずいので、周りを見てもらえますか？」

「よし、分かった」

赤井は答えると、三人で周囲を注意深く見回した。幸い人影は見えない。

「大丈夫みたいですね。じゃあ、やります」

赤井は将の言葉に、ゴクリと生唾を飲み込んだ。一体どんな驚くべき能力なのか。そう思うだけで、赤井の胸の鼓動は全力疾走した後のように早くなった。

そんなことを考えているさなか、将の体がフワリと二メートルほ

ど浮き上がり、空中で静止した。テレポートではない。次はそのままの姿勢で、赤井と彩子の周りを回り始めた。まるでスーパーマンだ。将が地面に降りると、赤井と彩子が同時に同じ言葉を呟いた。

「凄い！」

二人の驚きを意に介せず、将は無邪気に言った。

「面白いでしょう？　エヘヘヘヘ・・」

この少年には、一体どれほどの能力が隠されているんだ。今の赤井の頭の中は、驚きと羨望が入り混じった複雑な想いが渦巻いている。

「マサルくん、空も飛べるんだね！　今度、私も一緒に飛びたい」

「ＯＫ。人目につかないところで空中散歩に連れてくよ。今まではテレポートで空中にも行けたんだけど、いろいろと練習してたら、空中に浮かべるようになったんだ。かなりのスピードで飛べるよ。たぶん、スーパーマンも僕と同じような感じで飛んでるんだろうな」

「スーパーマンはあくまでＳＦ映画の世界でしょう。マサルくんのように空を飛べる人間は、世界中探してもいないわよ。ねぇ、赤井さん？」

「まったく凄いとしかいいようがないな。君の能力の一つでも俺にも使えたらなぁと、つくづく思うよ。素晴らしい！」

「赤井さん、その想いは必ず神様に届くと思いますよ」

将は本気とも冗談ともつかない言い方で答えた。

第5章　山崎組

自宅に帰った将は深夜二時ごろ幽体離脱した。意識体の将は彩子の意識に潜り込むと、ソウルノートを抜き取ってソウルワールドへと移動した。彩子は意識体の将が来たことも、ソウルノートを抜き取られたことにも気づかず熟睡している。

意識体の将は、以前見つけた色の付いたソウルノートがある場所へと来ていた。その場所は、様々な色の付いたソウルノートがあり、意識体の姿は一つもない不思議な場所だ。

意識体の将は濃いピンク色のソウルノートを手に取ると、抜き取った彩子のソウルノートと重ね合わせた。すると、彩子のソウルノートに書いてある不思議な模様みたいな文字が、ピンク色のソウルノートへと書き込まれ、彩子の元あったソウルノートは煙のように消滅した。

ピンクのソウルノートを持った意識体の将は、熟睡している彩子の意識に潜り込むと、そのソウルノートを彩子に戻した。ソウルノートを抜き取ってから戻すまで、わずか五秒ほどしか経っていない。

同じように意識体の将は、赤井刑事のソウルノートを濃い紫色のソウルノートと入れ替えた。赤井も熟睡していて、意識体の将が来たこともソウルノートが入れ替わったことも気づくことはなかった。

肉体に戻った意識体の将は満足そうな表情を浮かべると、深い眠りへと入っていった。

翌週の下校途中に将が彩子に尋ねた。

「彩ちゃん、身体の調子はどう？　何か変わったことはない？」

「えっ！　別に何ともないけど、どうしてそんなこと聞くの？」

彩子は将の質問の意図が分からず、質問されたことで逆に不安に

なった。

「いや別に。最近地球環境がおかしくなってるという気がするし、鳥インフルエンザや豚インフルエンザなんかも出てきてるから、体調はどうかな？　って思っただけで、深い意味はないよ」

「なぁんだ。ビックリさせないでよ。急に体調のことを聞くから、私のソウルノートに病気になると書いてあったのかと思ったわ」

将は彩子のソウルノートを取り替えたことで、何か変化があったかどうかを知りたかったが、今のところ彩子は、自分に超能力が身に付いたことに気づいていない。

一週間後、将は赤井の携帯に電話をかけた。赤井は携帯のディスプレイに、将くんと表示されているのを見ると、いきなり話し始めた。

「晩飯でも食べに来るか？」

「そんなに毎回ご馳走してもらうわけにはいきませんよ。電話したのは特に用事があったからじゃなくて、声を聞きたかっただけです。元気そうで安心しました」

「まぁ先週会ったばかりだからな。それより、今度の日曜日に晩飯でも食べに来ないか？」

将は赤井のソウルノートを取り替えたことによって、何か変化があったかを知るために電話をしたのだが、今のところ赤井も彩子と同じように、自分の超能力に気づいていない。将は二人に、ソウルノートを取り替えたことをいつ話すべきかと考えていた。

5―2

日曜日の午後十二時ちょうどに、将は赤井の部屋にテレポートした。突然現れた将に、いつものように赤井が驚いた。

「わぁ～あ、ビックリした！」

「赤井さん相変わらずですね」

「急に現れるから、心臓麻痺を起こすところだったぞ。ふぅう、危ない危ない。昼飯はまだだろう？　あれ？　彩子ちゃんはどうした？」

「彩ちゃんは友達と一緒に出かけると言ってたので、僕一人で来ました。彩ちゃんの分も食べますから安心してください」

「よし、いい心がけだ。じゃあ、早速食べるとするか」

赤井は料理上手だ。今日も将の好物の鶏の唐揚げや餃子など、手料理を作って待っていた。将の旺盛な食欲は、赤井の楽しみの一つになっている。

「将君、本当に彩子ちゃんの分まで食べそうな勢いだな」

「すみません。赤井さんの手料理はとっても美味しいんで、ついついたくさん食べてしまうんです」

「せっかく作ったんだから、残さず全部食べてくれよ」

「分かりました。それでお礼と言ってはあれなんですけど、赤井さんにプレゼントがあるんです。見てみますか？」

「えっ、プレゼント？　それは嬉しいなぁ。早く見せてくれ」

「分かりました。その前に僕の超能力を見せます」

プレゼントを渡すのと超能力を見せるのと何の関係があるのか、赤井は将の言ってる意味が分からない。そんな赤井を無視して、将は念力でテーブルの上の唐揚げの皿を持ち上げた。

「何度見ても凄いなぁ！　俺もそんな超能力があったらなぁ」

「はい。これが赤井さんへのプレゼントです」

「おいおい冗談だろう。鶏の唐揚げのプレゼントなんて・・」

「違います。念力をプレゼントしたんです」

「言ってる意味が分からんのだけど・・」

実際、赤井は将の言ってる意味がチンプンカンプンだ。冗談なのか本気なのかさえ分からない。将は人をからかって喜ぶような性格ではないからだ。

「赤井さん、僕がやったのと同じように、手を使わずに皿を持ち上げてみてください。それがプレゼントです。皿が浮いてるところをイメージするのがコツです。騙されたと思ってやってみてください」

将の真剣な表情に、赤井は言われたとおりにやってみることにした。神経を集中して、皿が浮いているところをイメージした。必死でイメージした。

赤井の中でイメージ出来た瞬間、皿が五十センチほど浮き上がった。赤井は全身に鳥肌が立つのを感じたのと同時に、すぐに我に返った。すると皿が落下してテーブルに当たる瞬間、皿はゆっくりと元の位置に戻ったのだ。

「将君、冗談がきついぞ。俺が超能力使ったみたいに見えたけど、本当は俺に合わせて君がやったんだな。一瞬自分に超能力があると勘違いするところだったぞ」

「赤井さん、確かに皿が落ちた時に止めたのは僕ですが、浮き上がらせたのは赤井さんですよ。ウソだと思ったらもう一度やってみてください。僕は後ろを向いてますから、皿以外のもので試してみてください」

またしても将の真剣な表情に、まさか？　と思いつつも、もしかしたら？　という相反する考えの中、赤井は再びやってみることにした。

将は赤井に背を向けて座っている。赤井はテレビボードの上に置いてあるテレビのリモコンに神経を集中した。赤井の頭の中でイメージ出来た瞬間、リモコンが赤井の手に飛び込んできた。

「ウソだろう！　夢だろう！　凄い！」

赤井の声は震えている。その震えの意味は、説明されなくても将には分かっていた。

「赤井さん、プレゼント気に入りましたか？　僕の考えが正しければ、ジャンボジェット機でも大型タンカーでも持ち上げることが出来ます。恐らく世界中探しても、赤井さんより強い念力を持った人間は居ないはずです」

嬉しそうに話す将の言葉が、これは夢ではないと証明している。赤井は衝撃の事実に震えが止まらない。将にどんな言葉を返していいかも思いつかない。

「赤井さん、念力が自由に使えるように毎日練習してください。それと、このことは二人だけの秘密ですよ」

「分かった。そうするよ」

赤井はそれだけ答えるのがやっとだった。声はまだ震えている。

「それじゃ、プレゼントを渡したので僕はこれで帰ります。あっ！　くれぐれも人に知られないように注意してくださいね」

赤井が答えるまもなく、将は自宅へとテレポートした。煙のように消える将に毎回驚く赤井だが、今はそのことに何の感情も起きない。超能力が身に付いたという事実が、赤井の思考回路を停止させていたからだ。

傍から見ると放心状態のようだった赤井は、五分ほど経ってやっと考えが整理できると、生まれて初めてと思えるほどの激しい興奮の津波に襲われた。

「信じられん！　超能力が使えるなんて！」

まるで今の赤井は、欲しくても欲しくてもなかなか買ってもらえなかったオモチャを、サンタクロースにプレゼントされたような気分だ。とにかく、手に入ったオモチャで遊びたかった。将に言われたようにイメージしながら、いろいろなものを持ち上げてみた。三十分ほどやっているとコツがつかめてきた。念力で動かすのに重さは関係ないことも分かった。

「よし！　この力を正義にためにつかうぞ。将君、ありがとう！」

5―3

野崎は地味なカローラの中古車を運転していた。シルバーの色も形も地味な中古のカローラは、ボディの艶もなく街中でもまったく人目を引かない。それは野崎にとって好都合だ。というより、人目を引かないからそのカローラを買ったのだ。

カローラを都市銀行の駐車場に止めた野崎は、ＡＴＭコーナーへと向かった。ＡＴＭコーナーは相変わらず混んでいたが、野崎にはそのほうが都合が良い。ＡＴＭの空くのを待っているお客の頭の中を順番に読んでいった野崎は、某大手ＩＴ企業役員の妻の女性を見つけた。

女性の頭の中を読んで彼女を今日の獲物に決めると、百万円をおろすようにテレパシーで彼女の意識をコントロールした。お金をおろした女性は、何の疑いも持たず駐車場で待っている野崎の所へ来ると、おろしたばかりの百万円を渡した。それを受け取った野崎は、女性に何も言わずに駐車場を後にした。

野崎がいなくなってから正気に戻った女性は、夢を見ているような気分だった。なぜ自分が駐車場にいるのか思い出せない。ＡＴＭの前に立ってから駐車場までの時間が、記憶の中では空白になっていた。だがその空白の間に、百万円がおろされたという事実は、あとで知ることになる。

その後、野崎は数箇所の銀行を回り、同じような手口で男女を問わず、現金を手に入れることに成功した。今日手に入れた現金は五百万円だ。証拠も残らず訴えられることもない。なぜなら被害者の記憶に野崎は居ないからだ。

野崎は完全犯罪と言っても、怪しまれたり目に付いたりしないように、同じ銀行には二週間に一度しか行かないようにしている。そ

んな野崎の計画に狂いが生じた。

ある日、野崎はいつものように銀行のＡＴＭコーナーで、鴨になる人間を物色していたが、不用意にも暴力団組長の妻に手を出してしまったのだ。

女性は三十八歳で、芸能人と思えるほどの美貌の持ち主だ。その容貌から、相当の預金があると睨んだ野崎は、迂闊にも預金額のみの情報しか読まず、安易に接触すると言う愚作を犯してしまったのだ。

その結果、銀行の駐車場で待っていた野崎に、組長の妻が現金百万円を渡しているところを、護衛で来ていた暴力団組員に見つかってしまったのだ。不審に思った護衛の組員が野崎と妻を問い詰めたところ、妻が正気に戻り野崎の犯行がばれたのだ。

「おい、小僧！　おんどれ、どんな小細工使ったんか知らんけどな、この方を山崎組の組長の姉御と知ってやったんやろな！　一緒に事務所まで来てもらおうか。ことと次第によっちゃ、生きて帰れんと思うとけよ。騒いだらこの場で殺す」

二人の屈強な男に両脇から両腕つかまれた野崎は、抵抗することが出来ない。念力を使って逃げることを考えたが、両脇の男に同時に使えない。どうしても、一人の相手にしか使えないのだ。

野崎はチャンスを窺うことに決めると、大人しく男たちと一緒に彼らの黒塗りの高級外車に乗り込んだ。男たちはクルマの中でも野崎の両脇について、腕をつかんだままだ。

野崎は姉御と呼ばれた女性と両脇の男の頭の中を、テレパシーで順番に読んでいった。姉御は無意識に百万円を自分に手渡そうとしていたことに対して、なぜそんなことになったのかを必死で考えていたが、その努力が報われることはなかった。

男たち二人は良く訓練されているみたいで、野崎に注意を払い、組事務所に連れて帰ることしか考えていない。察するところ、組長

は相当の切れ者と思われる。
野崎は、この件は自分にとって大きな力になると思えた。真導子から授かった能力はテレパシーと念力だが、姉御と呼ばれる女性に出会ったことは、超能力以上の力を与えてくれると、そんな予感がするのだった。

5―4

三十分ほど走ると、クルマは組の事務所に到着した。野崎は後部座席の中央に乗せられており、窓ガラスは黒塗りのため外の景色は見えない。このため、どこを走ってきたのか、今どこにいるのかも分からなかったが、運転手の考えを読んで現在の場所が理解できた。

クルマからおろされた野崎は両脇から挟まれた形で、ある部屋に連れて行かれた。ソファーに座るように言われた野崎は、おとなしく従った。

五分ほどして組長と思われる、見たところ四十代後半と思しき男が入ってきた。ジャージー姿のラフな格好だ。映画などで見るのとは違って普通の一般人みたいに見えるが、屈強な体つきをしていて眼光が鋭い。

「兄さん、ワシの嫁に何したんや？　嫁に聞いても覚えてへん、催眠術にかかったみたいやとか、訳の分からんことを言うとるんや。ワシに分かるように説明してくれへんか」

組長が高級タバコをくわえると、すかさず組員の一人が火の点いたライターを差し出した。ヤクザ映画のシーンそのものだと思いつつも、野崎は恐怖感はない。なぜなら、テレパシー以外に念力という超能力が身に付いていたからだ。野崎はテレパシーを使って、組長の考えていることを探ってみた。

「組長は俺を痛めつけ、カネを巻き上げ、謝らせるつもりだ。殺そうとまでは思っていない。どうってことないな」

そう思った瞬間、野崎はほんの一瞬だけニヤリとした。その表情を組長は見逃さなかった。

「ほう。この兄ちゃん、俺らをバカにしてるみたいやぞ。ヤクザの世界が可笑しいみたいやな。兄ちゃん、今ニヤッとしたわけを聞か

してもらおうやないか！」

「バカにしたとかじゃないんです。昨日の友達とのことを思い出して、そいつがアホなことをやったのを思い出して、つい・・」

「おいお前ら、この兄ちゃんはワシらを前にして友達とのことを考えてたらしいぞ。大した余裕やな。ワシの女房に手を出しといて、まったく反省の色もないみたいやし、どうしたらいいと思う？」

「小指一本で許しますか・・」

子分の一人が脅すつもりで無表情に感情を込めずに言った。普通の一般人だったら、恐怖のあまり泣き叫ぶところだ。組長を含め全員が野崎も同じだろうと思っていたが、野崎は彼らの期待を裏切った。落ち着いた表情で黙ったまま組長の目を凝視している。野崎のその態度に組長の怒りが爆発した。野崎は彼らのプライドを踏みにじったのだ。

「ドスを貸せ！　小僧の手を押さえてろ！」

子分の一人が野崎の左手をテーブルに押さえつけ、手のひらを開かせた。組長はドスを持つと野崎の小指に近づけた。組長は野崎が泣き叫んで助けを請うことを確信していた。ヤクザの脅しが素人に効かないのは屈辱であり、許されないからだ。

子分たちも組長と同じ想いだったが、野崎はまたしても彼らの期待を裏切った。無言のまま表情を変えずに、組長を凝視し続けている。脅しだけで済まそうと思ってた組長だったが、小指を切り落とさずにはいられない状況に追い詰められていた。

組長はドスに力を込めて小指に当てた。五秒を待たずに小指が切り落とされ、苦痛に泣き叫ぶ野崎を誰もが想像していたが、信じられない現象が起きた。ドスの刃先が野崎の小指に触れる、わずか五ミリ手前で止まっているのだ。子分たちは組長がためらっていると思っていたが、組長は顔を真っ赤にしてドスに力を込めている。

「組長！」

「ダメや！　ドスが動かへん」
子分の声に組長が答えた。
「組長、俺がやります」
見るからに力のありそうな、レスラーみたいに屈強な体つきの子分がドスを受け取ると、力を込めて野崎の小指に思い切り突き立てた。だが刃先は小指の五ミリ手前で止まり、それ以上はビクとも動かない。男は唸りながら力を込めた。額には汗が滲んでいる。約五分が経過し男が息切れしてドスを落とした。
次の瞬間、ドスが空中に浮いたかと思うと、座っている組長のノドの手前一センチのところで止まったのだ。その光景は、さながら透明人間がドスを突きつけているとしか思えない。

5―5

「皆さん、動いたら組長が死にますよ」
野崎が落ち着いた声で言った。組長は顔面蒼白だ。子分はなすすべも無く動揺している。
「組長、皆に部屋から出るように言ってください」
「分かった。お前ら言われたとおりにしろ。俺は大丈夫や。心配すんな」
子分たちが組長を気遣いながら部屋を出ると、野崎はドスを念力で天井に突き刺した。信じられないといった表情で野崎を見ている組長の体が浮き上がり、天井に張り付いた。まるで天井に寝ているような状態だ。
「組長、世の中には常識では考えられない力を持った人間がいます。僕がその一人です。その気になれば手をかけずに証拠も残さず、誰でも殺すことが出来ます。言ってる意味は分かりますね？」
「分かったから、ここから降ろしてくれ」
さすがに組長だけあって肝が据わっているらしく、落ち着いた声で言った。野崎は組長をゆっくりとソファーの上に降ろした。次に野崎は視線をテーブルに移した。野崎につられて組長の視線もテーブルに移った。そこで組長は、またしても信じられない光景を目にすることになった。
「そんなバカな・・」

分厚い杉の木で作られたテーブルが、割り箸でも折るかのように真ん中から真っ二つに折れたのだ。まるでＳＦ映画の世界にしか見えない。ポカンと口を開けてる組長に野崎が言った。
「僕の力が分かりましたか？　他にも力があって、相手の考えてることが分かるし、僕の思いどおりに操ることもできます」

「それでワシにどうしろと言うんや？」
「ここに連れて来られたのも何かの縁です。僕を仲間にしてもらいたい。ただし組員ではなくお互い必要な時に協力するという関係で。あくまで僕は一般市民ですから」
野崎は不敵な笑みを浮かべながら言った。
「分かった。そうしよう」
「それじゃ、もうひとつの力を見せますから、子分を部屋に呼んでください。さっき僕にドスを突き立てた男が組長の肩を揉むように操りますから。それと僕の力は、組長だけの秘密にしといてください。世間に知れるとまずいですから」

組長は立ち上がるとドアを開け、子分たちを呼んだ。心配してた子分たちが、急ぎ足で入ってきた。組長がソファーに座ると、子分の一人がいきなり、組長の肩を揉み始めた。その光景に他の子分たちは我が目を疑ったが、組長は大笑いを始めた。
「気に入った。小僧、お前の名前は？」
「小僧はやめてください。野崎です。野崎真也です」
「お前ら、野崎は今から俺たちの仲間や。ただし組員やないから、協力しあうという関係でな。野崎が何か頼んできたら力になってやれ。分かったな！」
「分かりました！」
子分たち全員が、腑に落ちないといった表情ながらも返事を返した。野崎は組長と携帯電話の番号を交換した後、連れてこられたのと同じクルマで、自分のクルマが停めてあるところまで送られた。
野崎は超能力に加えて、物理的な暴力団の力も得たことで、サイレント・パニッシャーのときよりも充実した気分になっていたが、その頭の片隅には絶対に消えない将への復讐の想いが、烈火のごとく渦巻いていた。
「中瀬、待ってろよ。今の俺の力はお前以上だ。必ずお前の息の根を止めてやるからな！」

そう思いながら野崎はクルマから降りた。野崎の不気味な気配を感じたのか、野崎が降りたのを確認した運転手は、タイヤに悲鳴をあげさせてクルマをスタートさせた。
その頃、組長の部屋では組員たちに、組長が野崎との事を説明していた。

「詳しいことまでは話せへんけどな、野崎を上手く利用したら強力な戦力になるで。そやから、お互い協力しあうことにしたんや。あいつは常識では考えられへん不思議なヤツや」
「さっき、ドスが空中に浮いた一件と関係あるんですか？」
「ええか。そのことは忘れろ。それに例え誰であろうと、話すんやないぞ。ええな！」
一人の組員の質問に、組長が命令するような口調で答えた。組員たちは組長の気迫に押され、それ以上質問するのをやめた。
組長の名前は山崎剛一。年齢は四十九歳。約四十名の組員からなる暴力団のトップだ。山崎は野崎と協力し合うことを決めたが、内心ハラワタが煮えくり返る思いだった。
なぜなら、野崎の超能力の前に手も足も出せず、野崎の言いなりなってしまったからだ。暴力団のトップともあろう自分が、一般の素人、それも二十歳代の若造に完全に牛耳られたという事実は、プライドがズタズタにされるのに十分過ぎる理由だった。

5―6

野崎と山崎が会ってから一週間後、山崎の携帯電話に野崎という名前が表示された。山崎はゆっくりと携帯電話を耳に当てた。

「俺や。何のようや？」

「人をひとり殺してもらいたい。名前は中瀬将。高校生です」

「高校生のひとりぐらい、お前の力で殺せるやろ。なんぼ協力しあうと言うても、雑用までやらすな！」

「山崎さん、僕にそんな口の利き方をしていいんですか。今度はドスが喉に突き刺さりますよ」

「ワシを脅す気か。それより、お前のその力で中瀬とかいうガキを殺したらええやないか！　なんでワシに頼む必要があるんや？」

「正直に言うと中瀬はかなり手ごわい。僕ひとりの力では倒せないんです。だから、その道のプロのあんたに頼みたいんです」

「見返りはなんや？　まさかタダというわけやないやろうな！」

「何でも言ってください。僕に出来ることなら何でもしますから」

野崎はあくまで敬語だ。超能力を持っているとはいえ高飛車に出るよりは、目上の人間にはそれなりの態度で接したほうが扱いやすいという、したたかな考えがあるからだ。

「分かった。ある地主連中がどうしても土地を手放さない言うて、困っとるんや。脅すわけにはいかへんし、何とかしてくれや」

「簡単です。今すぐにやりますか？」

山崎はサラリと言ってのけた野崎に、期待と恐怖が入り混じった複雑な心境だった。このままでは野崎にいいように操られそうな気がする。組員四十人を率いる暴力団組長としては、それは屈辱というより、組長の威厳を保つためにもあってはならないことなのだ。

「野崎のクソ餓鬼、俺と対等だと思ってやがる。ど素人の青二才が

！　今に俺の前に土下座させてやるぞ！」
　携帯電話だと思い安心してたのがまずかった。野崎は電話で話しながら、野崎の考えを読んでいたのだ。
「山崎さん、俺はあんたと対等だと思ってないです。俺のほうが上です。組員の手前、あんたに恥をかかせることはしませんが、良からぬことを考えると、あんたが土下座することになりますよ」
　山崎は額から汗が噴出すのを感じた。なんと恐ろしいヤツだ。金輪際、逆らうのをやめよう。現時点では山崎は素直にそう思った。
「それでいいです。僕には逆らわないほうがいいです。その代わり、あんたの望みは叶えてやりますから。お互い、持ちつ持たれつです」

　翌日、山崎は野崎と一緒に地主たちの家を訪ねた。売買契約書にサインをもらうためだ。その地区には五人の地主がいる。
　この地主たちの土地は、ある地区開発の話があり将来値上がりするのは必至なのだが、地主たちはその件を知らない。信頼置ける情報筋からその情報を仕入れた山崎は、その開発計画が公になる前にこの土地を買収するつもりでいたが、五人の地主たちから手放す気はないと一喝され、話が止まっているのだ。
　地主たちは相当な頑固者で、いくら値段を上げても手放そうとしない。脅すわけにもいかず山崎は困っていた。
　最初の地主の家に着いた二人は、玄関のインターホンの押しボタンを押した。

「はい。どなたですか？」
「大安不動産の山崎と申します」
「山崎さん、何度来てもらっても、この土地を手放すつもりはありません。帰ってください」
　山崎は野崎に目配せをした。野崎はゆっくり頷くと家の中に向かってテレパシーを放った。一分ほど経った頃、六十半ばと思える男性が玄関のドアを開けて出てきた。

「山崎さん、どうぞ中に入ってください」
ニヤリと笑った野崎の顔を見た山崎は、背筋に寒気が走ったような気がした。リビングに案内された二人がソファーに座っていると、さっきの地主と四十歳ぐらいと思える息子夫婦が現れた。
「山崎さん、この土地を売ることにしました。契約書にサインします。価格は八千万円で結構です」

ものの五分も掛からず契約は終わった。山崎が何度足を運んでもダメだった契約が、野崎の能力でいとも簡単にあっけなく済んでしまったのだ。
「どうですか山崎さん。一人目の約束は果たしましたよ。あと四軒ですよね。さっさと片付けましょう」
野崎は順番に地主の家を訪問すると、全員から売買契約書へのサインをもらうことに成功した。その手際の良さと能力に、山崎は改めて野崎を利用することを考えた。
「これで全員終わりました。今度は僕の頼みを聞いてもらいましょうか」
「分かった。とにかく一度、ワシの家へ来て話を聞かしてくれや」
そう言うと二人は、山崎の自宅へと向かった。

5―7

二人が山崎の自宅に着いたのは午後二時だ。野崎は最初にクルマに乗せられて連れてこられた部屋へ案内された。この部屋は言わば応接室だ。山崎は話を聞くために、腹心の組員を三人呼んだ。

「それで野崎、中瀬将とかいう高校生はどこに住んどるんや？　どこの高校に行っとるんや？」

「以前、中瀬が僕の部屋に入ってきて言ったのは、名古屋の高校に通っているということだけです。顔は見たことがあるから覚えています。ただし中瀬は空手の達人で、俺と同じように超能力が使えるから、十分に気をつけないとやられてしまいますよ」

「中瀬も超能力が使えるのか？　それやったらワシらにはムリかも知れへんぞ。いっそのこと、お前が超能力で殺したらどうや。もし、お前の超能力でもダメや言うんやったら、ワシらはどうしたらええんや？」

「山崎さん、あんたたちに超能力はないけど、武器があるでしょう。飛び道具を使えば中瀬が超能力を使う前に殺せるんじゃないですか？　それに言う必要もないけど、あんたたちはその道のプロです」

野崎にプライドをくすぐられた山崎は、依頼を引き受けた。引き受けたというより、今までの状況からいって引き受けざるを得なかった。断れば山崎組の顔に泥を塗ることになる。

「やり方と時期については口を出すなよ。ワシらのやり方でやるからな」

「殺してもらえればいいです。どんな方法でもあんたたちに任せます。もし僕が手伝う必要があったら言ってください。その時は協力しますから」

「必要ない！　ワシらだけでやる。ただ、殺る前に間違いないかど

うかだけ、写真を見せるから確認してくれや」
話が終わり野崎が帰った後、山崎は腹心の三人の組員に言った。
「中瀬の件は頼んだぞ。相手は超能力を使いよるし、空手の達人と言うてたから、しっかり作戦立てとけや。それよりもっと大事な話があるんや。お前ら三人で、野崎がどうやって超能力を身に付けたんかを調べてくれ。大至急や。どんな方法を使ってもええけど、絶対に野崎に気づかれんようにな。あいつは相手の考えまで読みよるから、くれぐれも気いつけや」

中堅暴力団と言っても山崎組の情報網は広い。三人の組員は自分たちの人脈を使い、わずか二日で野崎の恋人の小林裕美を突き止めた。野崎に直接聞くわけにはいかないので、裕美から聞きだすつもりだ。
三人の組員は裕美に怪しまれないように、彼女と同じぐらいの女性を使うことにした。女性の名前は長谷川夏樹。催眠術師で自己催眠も出来るので、自分の意識を読まれないようにすることも出来る。
夏樹は、裕美の行きつけのスナックで裕美が来るのを待っていた。裕美は毎週水曜日に、友達の女性と二人でこのスナックに来ている。二人がカウンターの席に付いたのを見計らって、それとなく夏樹は裕美の隣の席に座った。

しばらく二人の話を隣で聞いていた夏樹は頃合を見て、何気ないような素振りで裕美に話しかけた。自分と同じぐらいと思える女性から話しかけられた裕美は、警戒することもなく夏樹の話しに乗ってきた。
夏樹は怪しまれないように、裕美の話しに合わせた。裕美の話題は、恋愛、ダイエット、芸能界、ファッション、旅行の話など、一般的な若い女性の話題が中心だ。裕美の話しを聞きながら、夏樹は気づかれないように彼女に催眠術をかけた。
催眠術をかけられ暗示をかけられた裕美だが、そのこと自体には

全く気づいていない。意気投合したように話を合わせた夏樹は、来週も来ることを告げ、スナックを後にした。その顔には、してやったりの表情が見えた。

翌日の夜、裕美の姿が野崎の高級マンションのベランダにあった。夜景を見ながら、二人はウィスキーを飲んでいる。ムードを出すためか、静かなジャズを流してある。

夏樹は今晩、裕美が野崎のマンションに行くことを、スナックで話している時に聞いていた。夜九時になったところで、夏樹は裕美に携帯メールを送った。

「夏樹だよ。彼といいことしてるのかな?」

このメールが暗示をかけたことを実行させるトリガーだ。

「誰からや?」

「あら真也さん、私のメールが気になんの? もしかしたら、私が浮気してるとでも思ってんの?」

裕美はそう言いながらメールを見せた。

「友達の長谷川夏樹っていう女の子やけど、そのうち紹介するわ。でも手を出したらあかんよ。彼氏いてんねんから」

「そんなことするわけないやろ。俺はお前一筋や」

野崎は裕美を抱き寄せると唇にキスをした。野崎にとってムードのある静かなジャズを聴き、夜景を見ながらアルコールに身を任せるこのひと時は、至福の時間となっている。そんな余韻に野崎の気持ちは開放的になっていた。

「ねぇ真也さん。急に旅に出る言うて出かけたことがあるやん。あん時から、真也さんが変わったような気がするんやけど、何処に行ったん?」

「恐山に住んでる真導子に会ってきたんや。真導子は俺の命の恩人や」

「ふぅ〜ん。そうなん。変わった名前やね。その真導子いう人がど

んな人か分からへんけど、真也さんが元気になって良かった。一時期落ち込んでたから、私どないしようと悩んどったんよ。何はともあれ真也さんが元気になったからカンパ～イ」

裕美はそれ以上このことについては話さず、野崎と一緒に至福のひと時に身を任せた。

5―8

「そうか、良くやった！　恐山の真導子やな。明日にでも会いに行きたいが、まず中瀬を殺ってからや。このことは誰にも言うなよ」

山崎剛一は興奮していた。自分も野崎のように超能力を使えるようになると思うと、スーパーマンになった気分だ。とにかく一刻も早く、真導子という謎の人間に会いたかった。超能力が使えるようになったら、拳銃や刀のような武器は必要ない。極端なことを言えば、組員も必要ない。自分ひとりで天下を取れるような気がする。

山崎組の組員たちは、翌日から将を見つけ出すために、自分たちの持っている情報網をフルに使い動き回った。一口に高校と言っても、愛知県に公立高校だけでも百十強の数があり、これに私立高校を加え、その中から中瀬将という男子生徒を探すのはかなりの時間を要する。

カレンダーは八月後半になっていた。野崎は山崎組が将を見つけるのに、早くても半年はかかるのではないかと思っていたが、彼らは二ヵ月ほどで将を見つけた。中瀬将という同姓同名の男子生徒が三人おり、組員は彼ら三人の写真を撮って野崎に見せた。野崎はその中から一枚の写真を手に取ると、鬼の形相になり憎しみを込めた口調で言った。

「こいつだ！　こいつが憎き中瀬将だ。山崎さん、こいつを必ず殺してください。そしたら俺はあんたの子分になってもいい。何でもあんたの言うとおりにします」

「野崎、そんなにこいつが憎いのか？」

「憎いってもんじゃない。こいつのせいで、俺の人生は終わりになるところだったんです。でも、ある人のおかげで、やり直すことができたんです。その時から、こいつには死で償ってもらうと決めてるです」

「分かった。殺ってやるで！」

「中瀬を甘く見ないことです。恐らく世界中探しても、一対一で戦ってヤツに勝てる人間はいません。ヤツはスーパーマンだと思ったほうがいいです。どんな卑怯な手を使ってでも殺してください」

「一対一で勝てないんやったら、一対十ではどうや。それに飛び道具やドスを持ってたらどうや。お前の言うたように、卑怯な手も利用するで。まぁ心配せんとワシらに任しといてくれや」

その後山崎は、組員たちと将の殺害の作戦を練った。将がどんな力を持っているか知らないが、組員たちは野崎が将を買いかぶり過ぎてると思っていた。山崎組の計画は野崎の意見を参考にしつつ、自分たちの今までのやり方でやるというものだ。念のため将のガールフレンドの彩子を誘拐し、彩子をえさに将をおびき寄せ殺害するという、極めてオーソドックスで卑怯な方法だ。待機する組員十人には、拳銃とドスを持たせてある。

たかが一般人ひとりを殺すのに、これだけの人数と武器を準備したことは、かつてなかった。ドラマや映画の世界ではあるまいし、人質を取ってなおかつ丸腰の度素人の高校生ひとりを相手にするには、冗談がきついと思っている組員がほとんどだ。それほど野崎の言ったことは、山崎組に真剣に受け止められていなかった。

リビングでテレビを見ていた将の携帯の着信音が鳴った。ディスプレイの表示は、彩ちゃんの自宅と表示されている。時間は夜の十時を示している。将は不吉な予感がした。なぜなら、彩子が電話してくるのは自分の携帯電話からと決まっているからだ。そんな将の予感は的中した。

「将君こんばんは。いつも遅くまでお邪魔してごめんなさいね。彩子にもう遅いから早く帰るように言ってくれないかしら」

「おばさん、彩ちゃんなら昼御飯を一緒に食べて、三時頃帰りましたよ」

「えっ！　何の連絡もないし、将君の家に行くと言って出てったから安心してたんだけど・・。心配だから携帯に電話してみるわ。それじゃ」

将は二階の自分の部屋に駆け上がると、すぐに幽体離脱を始めた。一分弱で離脱すると、五秒も経たずに彩子の居場所を突き止めた。意識体の将は彩子のシグナルを覚えているので、彼女が世界中の何処にいても居場所が分かるのだ。

彩子は港にある倉庫のひとつに監禁されていた。映画やドラマにあるように、椅子に座らされて縛られている。その周りを十人ほどのヤクザと思える男たちが取り囲んでいる。

意識体の将は一人の男の意識を読んでみた。彼らは中堅暴力団の山崎組の組員と分かった。それ以外のことは、彩子を助け出してから調べることにした。

山崎組の組員たちは、将をおびき寄せるために彩子を誘拐したのだが、それが彼らの大きな失敗だった。将の力を甘く見ていた彼らは、かつて経験したことの無い想像を絶する現実に遭遇することになる。

5―9

「マサルくん、とっても恐かった・・」

彩子は意識体の将が来たことを知ると、安堵の余り泣き始めた。彩子を取り囲んでいる組員の男たちは、なぜ彩子が泣き始めたのかを知る由も無く、怯えて泣き始めたのだろうぐらいにしか思っていない。

「姉ちゃん、お前には恨みも何もないんや。お前のボーイフレンドの中瀬将に用があるんや。用と言っても死んでもらうという用やけどな」

組員の一人が彩子に近づくと耳元で言った。将の強さを知っている彩子は、普通の人なら泣き叫ぶだろうその言葉に、何の反応も示さない。落ち着いた様子で黙っている。涙も止まって、かすかに笑みを浮かべているように見える。

当然泣き叫んで許しを請うだろうと思っていた組員は、当てが外れた彩子の態度に豹変した。脅しが効かないのは彼らに取って、侮辱されることと同じだ。それも普通の女子高生に屈辱を受けたのだ。

「姉ちゃん、いずれ中瀬が来るだろうが、その前にちょっと楽しませてもらうで。中瀬が死んだら、お前は外国へ売り飛ばすから楽しみにしてるんやな」

組員はドスを効かした声で脅すように言ったかと思うと、彩子の胸に手を伸ばしてきた。

「いやぁぁ！　やめてぇぇ！」

彩子にコケにされた男の気持ちは彩子の悲鳴で修まったが、その悲鳴が自分に災難となって降りかかることまでは、頭が回るわけはなかった。

突然、男の体が浮き上がり、五メートルほどの距離にある壁に激

突したのだ。その衝撃で男は気を失った。将が念力で男を壁に叩きつけたのだ。

何事が起きたのかと騒然とする男たちの前に、将がテレポートで現れた。突如現れた将に驚きつつも、男たちは一斉に襲い掛かった。ドスを持っているもの、日本刀を持っているもの、鉄パイプを持っているものなど、手にはいろいろな凶器が握られている。

誘拐して言うことをきかせたり脅して言うことをきかせるという行為は、将が最も嫌うやり方だ。まして一番大切な彩子を誘拐したという事実に、将の怒りは頂点に達していた。

将は力を全開にして動いた。超能力は使わない。将は今の怒りは、拳を叩き込まなければ修まらないことを知っていた。力を全解放した将の動きは、常人では想像さえつかないほどの凄まじい速さだ。

男たちの中に飛び込んだ将は異次元のスピードで動き回った。日本刀を振りかざしてきた男の腹に、左の回し蹴りを叩き込んだ。男はその衝撃に吹っ飛び、後ろの男とぶつかって倒れた。

正拳、回し蹴り、後ろ回し蹴り、飛び蹴りなどを、凄まじい速さで動きながら正確に放っていく。将の強さを知っている彩子だったが、持っている力を全解放した将の動きと強さは初めて見るもので、その凄まじい動きと攻撃に全身に鳥肌が立った。

とにかく速い！　とてつもなく速い！　凄まじく速い！　今の将の速さを言い表す言葉を、彩子も男たちも持っていない。目にも止まらないと言う表現でさえ、相応しくない速さなのだ。まるで時間が止まって、将だけが動いているように見える。

男たちは将の一撃を受けただけで完全に戦意を失くしていた。次元が違う将の力に、無謀な戦いを挑んだことを悔いていた。男たちの目には、将は異次元から来た怪物に見えていた。人間の姿をした怪物だ。

彼らは懐に拳銃を隠し持っていたが、将の凄まじい攻撃に、それ

を持っていることも使うことも忘れていた。将の攻撃の前に、彼らはさながら人間サンドバッグと化していた。

男たちが全員倒れるのにかかった時間は、わずか二十秒だ。将は倒れた男のひとりの考えを読んだ。読みながら、その男のシグナルも記憶した。

「そうか、野崎がやらせたのか！」

独り言を呟くと、椅子に縛られている彩子のロープを解いた。彩子はロープが解けたのと同時に、将に力いっぱい抱きついてきた。その目からは大粒の涙が止め処もなくこぼれ落ちていた。

「貴様ら、今度同じ事をしたら、この程度じゃ済まないと思え！」

将は怒りを込めて言った。男たちの戦意を喪失させるに十分すぎるほどの、強烈なオーラを放っているような迫力に、男たちはガクガクと首を縦にふるしかなかった。

「野崎に言っておけ。今度は容赦しないとな！」

男たちは何故将が野崎のことを知っているのか驚きの表情を見せたが、彼らは再び想像を絶する光景を見ることになる。将と彩子の姿が、男たちの目の前から煙のように忽然と消えたのだ。

まるでＳＦ映画としか思えない出来事に、男たちの頭は混乱していた。男たちはこれは夢なんだと思いたかったが、将の攻撃によって骨折した手足の痛みが、夢ではなく現実だと言っていた。

5－10

彩子を助け出した翌日、幽体離脱した意識体の将は、野崎の居場所を探した。野崎のシグナルは分かっているので、探すのに五秒とかからない。野崎を探し出したら、今度こそ決着をつけなければならない。もしこのまま野放しにしておくと、自分が死ぬまであらゆる手を使って襲ってくるだろう。自分だけならまだしも、何の関係もない彩子や家族が巻き込まれるのは許せない。

将は野崎を探し出し徹底的に叩くつもりでいた。だがいくら探しても野崎のシグナルが見つからない。一旦肉体に戻った将は、なぜシグナルが見つからないのか考えてみた。

もしかしたら野崎は死んだのか？　しかし男の記憶の中には、野崎から殺しを頼まれたことがはっきり残っていた。そうだとしたら、依頼したあとに死んだとも考えられる。あるいはシグナルが変わったのか？　いや、シグナルが変わることは絶対に有り得ない。ということは、やはり野崎は何らかの理由で死んだのだ。いろいろと考えた結果、野崎は死んだと結論づけた。

野崎が死んだ今となっては、暴力団がこの先、自分や彩子を襲うことはないはずだ。野崎がなぜ死んだのかが気にはなったが、そのことを調べても無意味だ。将はこれで野崎のことを全て忘れることにした。

「組長！　全滅です。中瀬にやられました。全員重傷です」

組員の一人が、転げ込むように山崎の部屋へ入ってくるなり言った。

「なんやと！　十人全員やられたんか！　武器持ってたやろ！　相手は高校生一人やったんやろ！」

山崎は、報告してきた組員の言葉が信じられなかった。

「とにかく、全員ここに呼べ！　何があったんか聞いたる」

「すんません組長。さっき言うたように、全員が重傷で病院に運ばれました。間違いなく警察に事情聴取されます」
「分かった。すぐにクルマ出せ。とにかく病院へ直行や」

病院へ着いた山崎は、一人ひとりに将との一戦について詳しく聞いて回ったが、全員震えながら同じ事を口走るだけで話にならない。全員が口走った言葉は、「あいつは化け物」だった。全員が精神に異常をきたしているように見える。それほどまでに中瀬の力は凄まじいのか！　山崎は野崎の言った言葉が、大げさではないと信じざるを得なかった。
「それと組長、中瀬は、『野崎に言っておけ！　今度は容赦しない』と言ってたそうです。どうして野崎のことがバレたんでしょう」
「野崎が言うてたやろ。中瀬も超能力が使えるんや。恐ろしいヤツを敵に回してしもうたな。野崎がワシらに頼むはずや。あいつも中瀬が恐ろしいんや」

その日の夜八時過ぎ、マンションで至福の時を過ごしている野崎の携帯電話の着信音が鳴った。ディスプレイには山崎と表示されている。
「野崎です。中瀬は死にましたか？　昨日殺ったんでしょう？」
「その逆や。うちの組員十人が、たったの一分もかからず全員病院送りにされてしもうたわ。全員重傷や」
「えっ！　武器を持ってたんじゃないんですか？」
「あぁ、拳銃とドスを持ってたんやけど、中瀬の動きが早すぎて、まったく役に立たんかったらしいわ。それと、帰り際に中瀬が言うた言葉があるんやが、何て言うたか分かるか？」
「分かりません」
「『野崎に言っておけ！　今度は容赦しない』と言うて、目の前から消えたらしいわ。お前のことがバレたで。気いつけといたほうがええかもな」

野崎は将の言った言葉に戦慄を覚えた。今度は間違いなく殺される。あいつの力は俺と次元が違う。殺られる前に殺るしかない。咄嗟に考えた野崎は、山崎に計画を持ちかけた。

「山崎さん、中瀬は僕を殺しに来るでしょうけど、山崎組も潰しに来ますよ。たぶんトップのあなたは間違いなく殺されます。こうなった以上、一緒にヤツを殺しましょう。それしか方法はないと思います」

「分かった。それで何か作戦は考えとるんか？　適当にやったら、こっちが殺られるだけや」

野崎は思いついた考えを山崎に話した。

「分かった。その作戦でいこか。だがな『急いては事を仕損じる』言うコトワザもあるやろ。慎重にやらへんと失敗するぞ。もし今度殺り損ねたら、一人残らず中瀬に殺されるやろな。そやから綿密に計画を練らなあかん。一ヶ月後や。一ヶ月後に殺るで！　ええな野崎」

「中瀬を殺れるならいつでも構いません。お任せします」

5―11

翌日の早朝、山崎は腹心の組員を三人連れて、恐山の近くに住んでいる真導子の元へと向かった。将の力を知った以上、身を守るためにも超能力を身に付ける必要があった。

山崎たち四人が現地に着いて地元の人間に聞いても、真導子を知っているものは誰もいない。一日中尋ねて回ったが手がかりは皆無だ。まだ一日しか経っていないが、山崎は焦り始めていた。

「おい！　本当に真導子という人間はおるんやろうな。誰に聞いても知らん言うとるし、まさかウソとちゃうやろな！」

「夏樹が催眠術をかけて聞き出してますから、間違いないと思います。野崎にも見破られてないはずです。組長は明日は、このホテルで待っててください。ワシら二人で必ず探してきますから・・」

一夜明けた次の日、組員三人は山崎をホテルに残し、早々と出かけていった。山崎の心に、真導子という人物がいるかどうか不信感がわいてきた。もしかしたら野崎はこのことを知っていて、俺たちをからかったんじゃないのか。そうだとしたら、野崎は何らかの仕打ちをしてくるか、とんでもない要求をしてくるかもしれない。そんな山崎の心配は取り越し苦労に終わった。午後四時過ぎに帰ってきた組員のひと言が、山崎の心配を吹き飛ばした。

「組長、真導子を見つけました」

「そうか！　良うやった。案内してくれ。今から早速会いに行く」

山崎は一刻も早く真導子に会いたかった。時間は午後五時近くになっていたが、組員の三人と真導子の家へと向かった。約三十分ほどで真導子の家へ到着すると、山崎が声をかけた。

「真導子さんはいらっしゃいますか？　私は山崎と申します。大阪から来たんですが、会っていただけないでしょうか。お願いします」

断られたら元も子もなくなる。山崎は丁重に挨拶した。二分ほどして引き戸が開くと、年齢も性別も不詳の老人が現れた。真導子だ。真導子は山崎を見るなり笑った。

「おぬしは悪人じゃな。ホッホッホッホッホ。悪人がワシに何の用じゃ？」

山崎はポケットから一枚の写真を取り出すと、真導子に見せながら言った。写真に写っているのは、野崎真也だ。

「私にこの男と同じように、超能力を授けてもらいたいんです」

「ワシは超能力を与えることは出来るが、それがどんな超能力になるのかまでは分からん。おぬしの望むものか望まぬものかまでは分からんのじゃ」

「それでも結構です。やってください。どんな超能力になっても、真導子様を責めたりはしません。もちろん、お礼はするつもりです」

「何のために超能力が欲しいんじゃ？」

「真導子様が言われたとおり、私は悪人です。ヤクザです。超能力があれば、何かにつけて相手より有利になります。だからぜひとも超能力が欲しいんです」

「ホッホッホッホ。正直なやつじゃ。よかろう、超能力を授けてやろう」

「ありがとうございます！　よろしくお願いします！」

山崎は深々と頭を下げた。真導子は山崎だけ中に入るように言った。中に入ると意外なほど綺麗に片付いている。部屋の中央に今まで見たこともない祭壇があり、仏像らしきものが祀ってある。真導子はその前に正座すると、山崎にも正座するように言った。

真導子は祭壇に立ててあるロウソクに火を点けると、胸の前で手を組み、なにやら意味不明の呪文のようなものを唱え始めた。真導子の後ろで正座している山崎は、神妙な面持ちで目を閉じている。十五分ほど呪文を唱えていた真導子が山崎のほうに向き直った。会った時と違い鋭い眼光を放っている。

「山崎、今からおぬしに超能力を授ける！」
真導子は右手を山崎の額に当て、再び意味不明の呪文を唱え始めた。額に汗が滲んでいる。五分ほど経った頃、大きく息を吐いた真導子は、静かに目を開け額に当てている右手を離した。真導子が息を吐いた瞬間、山崎は自分の中で何かが変わったような気がした。
「どんな超能力かは分からんが、今から使えるぞ」

「ありがとうございました！」
山崎は深々と頭を下げた後、持ってきたバッグから紙袋を取り出し、真導子の前に置いた。
「真導子様、これは私の気持ちです。五百万円入っております。お受け取り下さい」
「世の中は不景気じゃというのに、ヤクザは景気がいいのう。ホッホッホッホッホ」
真導子は紙袋を受け取ると祭壇に捧げた。山崎はゆっくり立ち上がると、再び真導子に頭を下げ出て行った。

5―12

自宅に戻ってきた山崎は組員を部屋の外に出すと、早速超能力を試してみた。試すといってもどうやればいいのかが全く分からない。テーブルに置いてある灰皿に向け、動けと念じてみても灰皿はピクリとも動かない。

部屋の中にある置物や小物に向けて、同じように念じてみたが、ティッシュペーパー一枚すらも動かない。真導子に騙された！　そう思った瞬間、山崎の心の中に真導子に対する怒りが急激に膨らんでいき、その怒りが爆発し、口から吐き出された。

「ウォオオ～！」

雄たけびとも狼の怒りの声とも聞き取れるような咆哮が、山崎の口から発せられたときだ。パシッ！　という音と共に、テーブルの上のガラスの灰皿が粉々に砕け散った。まるでハンマーで細かく砕いたかのように粉々に砕けたのだ。

その衝撃に山崎は言葉を失った。音を聞きつけた二人の組員が、部屋の中に飛び込んできた。組員は砕け散った灰皿の破片を手に取り眺めている山崎の顔に、不敵な笑みが浮かび上がるのを見て、背筋が寒くなる思いがした。

「フフフフ、ハハハハハハ、ワッハッハッハッハ」

山崎は大声を上げて笑い出した。山崎の笑い声に組員は、超能力が使えるようになったことを確信した。

「組長、超能力が使えるんですね！」

「そうや！　すごい力やぞ！　今から見せたるから、ようく見といてみい」

山崎はそう言うと、部屋に飾ってある観葉植物を指差した。観葉植物はベンジャミンの木で、直径四十センチほどの洒落た鉢植えに

植えてある。百五十センチほどのベンジャミンの木は、部屋のアクセントに一役買っている。そのベンジャミンの木に向けて、山崎が口を尖らせ咆哮を放った。

「ウォオオオ～！」

組員は山崎の狼のような咆哮に驚いたが、その二、三秒後に信じられない光景を目の当たりにした。ベンジャミンの鉢植えが、まるで爆弾で爆発したかのように粉々に砕け散ったのだ。凄まじい破壊力だ。

「く、く、組長！　一体何が起きたんですか？」

組員の質問する声は震えている。

「これが俺の超能力や。どうやら、俺の口からは衝撃波が出るみたいやな。これさえあれば、チャカも爆弾も武器は一切必要ないで」

「自由に使えるようになったんですか？」

「分からん。ちょっと練習せなあかんな。そや、今から練習しに行くから、お前らも付いて来い」

山崎は二人の組員を連れて、人気のない海岸へとクルマを走らせた。そこの海岸には消波のために無数のテトラポッドが置いてある。山崎は超能力の衝撃波を使い、テトラポッドを破壊するつもりでいた。

クルマから降りた山崎たちは、もう一度周りに目を配り、人のいないのを確認した。

「よし！　超能力の実験や。ようく見とれや」

山崎はそう言うと組事務所でやったように口を尖らせ、咆哮を放った。その二、三秒後に信じられないことが起き、組員たちは我が目を疑った。重さ四トンほどもあるテトラポッドが、破裂音とともに粉々に砕け散ったのだ。その光景はさながら、ダイナマイトで破壊したような凄まじさだ。組員たちは山崎の超能力の凄さに、全身

に鳥肌が立った。総毛立つという表現がピッタリ当てはまった。
「ワッハッハッハッハ」
しばらく笑い続けた後、山崎が言った。
「お前らに言うてないことがあるんやが、一ヵ月後に中瀬を殺るで。アイツを殺らんことには、こっちの身が危ないからな。そこで作戦なんやが、アイツには普通の戦い方では勝てん。強力な武器が必要や。ワシの超能力みたいな武器がもっと必要や。お前ら三人、明日、真導子の所へ行って、超能力を授けてもらえ」

5―13

翌日、山崎の腹心の組員三人は、恐山の真導子の所へと出発した。真導子への謝礼として山崎は、一人五百万円。計千五百万円を持たせた。超能力が身に付けば、千五百万円は安いものだ。

真導子は組員たちの頼みを引き受けたが、超能力を与えるには相当の体力を使うらしく、一日に一人しか出来ない。三人が超能力を得て帰ってきたのは、出発後、四日してからだ。

「お前ら、まだ自分がどんな超能力を使えるようになったんか分からんと思うから、しばらく色々と試してみい。使えるようになったら、ワシに報告に来い。焦らんとじっくりやることや。何らかの超能力は使えるようになってるんやからな」

山崎の言葉に三人はゆっくりと頷いた。

山崎と野崎が将の殺害作戦を決めてから、山崎はそのために超一流のヒットマンを雇った。自分の命がかかっていることもあり、破格の報酬を払って雇ったのだ。中瀬を殺すには、不意打ち以外にないという考えで一致した山崎と野崎は、将が外出したところをヒットマンに狙撃させる作戦を考えたのだ。

山崎と野崎、ヒットマンの三人は、現場の下見と将が自宅を出てからの行動パターンを調べた。それに加え、狙撃場所も念入りに調べた。その結果、将の行動パターンは決まっていないが、ガールフレンドの彩子と出かける機会が多いのだけは分かった。

時間をかけて調べたが、将たち二人の行動範囲に限って言えば、狙撃ポイントに適当と思える場所は見つからない。ヒットマンは狙撃ポイントをこちらで設定し、そこに将を呼び出すしか方法はないと言った。

「分かった。中瀬だけを呼び出すのは不可能だが、ガールフレンドを操って同行させるのは可能だ。俺に任せてくれ」

野崎が言った。

真導子に超能力を授かった三人の組員は、毎日、超能力の練習をしている。恐山から帰って一週間が過ぎた頃、三人が山崎に報告に来た。自分たちの超能力が分かったのだ。

「俺は、念力が使えます」

加藤健児という、およそ暴力団に似つかわしくない名前の組員が言った。

「お前は？」

「俺はテレパシーです」

答えた男は栗原銀二。三人の組員は三十代前半だ。

「加藤と栗原で、野崎と同じ超能力ということやな。分かった。佐久間、お前は何が出来るんや？」

「俺の能力は瞬間移動です。見せましょうか？」

「おう。やってくれや」

山崎が答えた瞬間、佐久間竜彦は山崎の後ろに瞬間移動し、山崎の肩をポンと叩いた。

「ウォ～オ」

山崎は飛び上がって驚いた。

「分かったで！　やられた奴らの話からすると、中瀬はお前ら三人の超能力をすべて持ってるいうことや。そやけどな、中瀬はその能力を一度には使えへん。こっちは三人やから一度に使える。ということは、ワシらのほうが有利や。それにワシの衝撃波もあるしな」

自分らの超能力に加え、野崎とヒットマンという強力な助っ人もいる。その余裕からか、山崎の頭の中には中瀬殺害を通り越し、日本の暴力団のトップに立つという野心が芽生えていた。

5－14

「マサルくん。明日、赤井さんを誘ってバーベキューに出かけない？　いつも赤井さんの家でご馳走になってばかりだから・・」
「そうだね。それで何処か当てはあるの？」
「大高緑地のバーベキュー場を予約したの。あとは赤井さんに連絡するだけよ」
　将と彩子は相談した結果、赤井に運転してもらい、ドライブがてら外出することにした。行き先は名古屋市緑区の大高緑地だ。ここでバーベキューをする予定だ。早速、彩子が赤井に連絡した。
「おぉう、それは楽しみだ。それなら後輩の水谷も誘っていいかな？　新婚の彼のクルマはワンボックスだし、奥さんは酒が飲めないから、奥さんに運転してもらえば俺も水谷も飲めるし。せっかくのバーベキューだからビール飲まないとな。アッハッハッハッハ」

　九月の第一日曜日、将と彩子、赤井、水谷夫婦の計五人を乗せたトヨタエスティマは、水谷の奥さんの運転で大高緑地へと向かって走っていた。
　午前十一時半に到着した五人は、ネットで予約してあるデイキャンプ場のバーベキューコーナーへと歩いた。残暑は厳しいが、雲ひとつない絶好の行楽日和だ。
　バーベキューコーナーのあるデイキャンプ場は、大高緑地の東側に位置する。周りには和風庭園、梅林、花木園などがある。西側にある竹林散策路は、木漏れ日が溢れ、散歩に絶好の場所となっている。
　水谷夫妻が手際よく準備を進める横で、赤井は既に一本目の缶ビールを飲み始めた。
「かぁあ、美味い！」
　赤井を見ていると、誘って良かったと将と彩子は思った。二人は

水谷夫婦とはクルマの中で打ち解け、昔からの知り合いのような仲になっていた。

彩子自身気づいていないのだが、彩子がバーベキューに行くと言い出したのは、野崎がテレパシーで行くように仕向けていたからだ。ヒットマンを含めて作戦を練った結果、街中よりも郊外のほうが人が少なく、逃げるにも都合がいいということで決めたのだ。

「将くん、凄い食欲だね」

水谷が将の豪快な食べっぷりに、驚きの声をあげた。焼肉、ソーセージ、野菜と、次々に胃袋に収めていく。赤井にとっては見慣れた光景だが、その豪快な食べっぷりは見ていて気持ちが良いぐらいだ。

「あぁぁ、良く食べた。もう何も食べれないです」

「ワッハッハッハッハ、相変わらず良く食べるな。最近流行の大食い選手権に出たらどうだ。優勝するんじゃないか」

「出てもいいんですけど、家で食べさせてもらってないみたいで、恥ずかしいですよ」

将のジョークに寝転んで笑っていた赤井が、ゆっくりと起き上がりながら言った。

「さぁ、おなかも一杯になったことだし、腹ごなしに竹林でも散歩してみるか」

全員が赤井の意見に従って、竹林散策路へと歩き始めた。他愛のない雑談をしながらの散歩は、なんとも言えない好い気分だ。先頭を将と彩子、後ろから、赤井と水谷夫婦が雑談しながら、ゆっくりと歩いている。

五人が散策路の中ほどまで来た時だ。プシュッ！　空気が抜けたような、何かが発射されたような音が聞こえた。その瞬間、将の体が崩れ落ちた。隣にいた彩子と赤井たち三人は、何が起きたのか分からない。

倒れた将を仰向けに起こした彩子は、将の白いTシャツが真っ赤

に染まっていくのを見て悲鳴をあげた。駆け寄った赤井は、銃撃されたと瞬時に判断し、周りに視線を送った。

竹林の中を走って逃げる男を見つけた赤井は念力で男を倒すと、水谷に男を捕まえるように指示した。水谷の妻は、ただおろおろするだけだ。

将は撃たれて倒れたのと同時に、意識体となって肉体から抜けた。だが今までのように自分の意思で幽体離脱したのではなかった。意思に関係なく離脱したのだ。これが何を意味するかは意識体の将は分かっていた。その答えは、「死」。幽体離脱した感じが明らかに違うのだ。

意識的に離脱していたときは地に足が着いているという感じだが、今の離脱は地に足が着いていないようで、ふわふわした感じだ。自分の意思で移動するのも難しい。意識体の将は、自分は死ぬのだと直感した。それは紛れもない事実だ。いくら肉体に戻ろうとしても肉体に入ることができない。まだ呼吸や脈拍はあるものの、それは徐々に薄れている。

5―15

「いやぁぁ、死んじゃいやだぁ！　マサルく～ん、死んじゃいやだぁぁ！」

彩子の悲痛な叫び声が赤井の鼓膜に突き刺さった。赤井には、彩子の叫び声以外何も聞こえない。緑地の東と西を走っている電車の音も、公園に遊びに来ている人たちの声も。まるでそこは、彩子と自分と将しかいない世界に思える。

彩子は驚いて駆け寄ってきた人の目を気にすることもなく、泣きじゃくった。泣いて泣いて叫んだ。それしか自分には出来ないと思った。そうすることで将が生き返ると思った。他には何も思いつかない。泣きながら、将が死んだら、一緒に死にたいと思った。

「彩ちゃん、泣くのは止めてよ・・。俺はまだ死んで・・ないよ」

突然将の声が彩子の頭の中に届いた。その声にいつもの元気はなく、弱弱しく聞こえる。

「マサルくん生きてるの？」

「正確には死ぬ間際ってとこ・・だよ。このままだと、あと数分で死ぬ・・」

幽体離脱した意識体の将が、自分の意識の中に入っているということはすぐに分かったが、彩子には将の声が苦しそうに弱弱しく聞こえるのが不安だった。

「何を言ってるの！　どうしたらいいの？　死んじゃいやだ」

「彩ちゃん、今俺の肉体は確実に死に向かってる。救急車を呼んでも手遅れだ。あと一、二分しかもたな・・ぃ。生き返る方法は一つしか・・・」

意識体の将は、自分の意識が次第に薄れていくのを感じていた。今までは自分の意思で幽体離脱していたが、今は意志に関係なく離脱している。それに伴って、意識体としての感覚も違っている。こ

のまま肉体が死んでしまえば、おそらく現世での記憶が消し去られた状態の意識体として、ソウルワールドへ行くだろう。それは間違いない。

「マサルくん、マサルくん、しっかりして！　死んじゃいやだ！　死んじゃいやだ！」

彩子は意識体の将に呼びかけながら、我を忘れて泣きじゃくった。将が居ない世界など考えられない。将は彩子にとって唯一無二の存在なのだ。その将の声が次第に小さく弱弱しくなっていく。意識体の将は最後の力を振り絞って、彩子に助けを求めた。弱弱しい声で。

「俺を助けられるのは彩ちゃんしかいない。今から言うことをやって欲しい・・」

「何をしたらいいの！　早く言ってお願い・・」

「俺の傷口に手を当てて、治るように精一杯祈って欲しい・・。それだけでいい。今すぐに・・・、はや・・・」

最後の早くが聞き取れなかった。将は死の直前まできている。彩子は将に言われたとおりに傷口に手を当てると、全身全霊を傾けて祈った。

「生き返って！　生き返って！　生き返って！　生き返って！・・・」

今、彩子の願いは将に生き返って欲しい。それだけだ。頭の中には、それ以外は何もない。竹林の緑や散策路の小石、心地良い木漏れ日さえ、まったく見えていない。

彩子はただ一心に祈り続けた。祈り続けているうちに心が休まり、穏やかな気持になっていくのが分かった。将の元気な姿をイメージした。それと同時に、将の傷口に当てている手のひらが温かくなっていくのを感じていた。

なぜか分からないが、彩子は将が助かるという確かな自信が湧いてくるのを感じていた。彩子が祈り続けて約五分が経った頃、将が目を開けた。

「彩ちゃん、ありがとう。もう大丈夫だよ」
将はそう言うと彩子の手を握った。彩子は当てていた手をゆっくりと離すと、信じられないという表情に変わった。拳銃で撃たれて出血していた傷口が、何事もなかったかのように完治していたのだ。
起き上がった将に、周りを気にすることもなく彩子が抱きついた。二人の肩を抱いた赤井は、声を出さずに泣いていた。大粒の涙で赤井の顔は濡れている。水谷の妻も涙だらけの顔で、良かった、良かったを繰り返しながら泣いている。
十分ほど経って、水谷が息を切らせながら走ってきた。将と三人の様子を見ながら水谷が赤井に言った。

「すみません。取り逃がしました。あと十メートルのところまで近づいたんですが、別の男が現れたかと思ったら、二人とも煙みたいに消えたんです。どうなってるのか訳が分かりません。ただ、ライフルを持ってたので、間違いなく将くんを撃ったんだと思います」
将は水谷の言葉に、以前彩子を人質にされ、おびき出され殺されそうになったことを思い出した。
「超能力者がいるのか！　このままでは済まさないぞ」
将の怒りは頂点に達していた。このままでは自分はおろか、家族や友達まで危険に晒されることになる。そう考えた将は、一刻も早く犯人を見つけ徹底的に叩くつもりでいた。
せっかくのバーベキューが台無しになったが、将は何事もなかったかのように明るく振舞った。彩子も将に合わせて明るく振舞った。そんな二人の様子を見ていた水谷夫婦は、赤井が将と彩子を、自分の子供のように可愛がっていることが理解できた。
水谷夫婦には、銃弾はわき腹をかすめただけだったが、ショックで一時的にパニックになり死にそうになったと説明した。

5－16

午後三時になったところで、バーベキューはお開きとなった。
「ねぇ、まだ夕食にはちょっと早いから、とっても美味しいスウィーツのお店があるんだけど、ちょっと寄ってみない？」
帰り際に恵美子が気遣って言ってくれたのだと分かったが、将は素直に彼女の意見に従うことにした。
「あのぅ、さっき怪我をして良く分からないんですが、今どうしても美味しいスウィーツを食べたい気分なんですけど、どうして分かったんですか？　それに厚かましいお願いですけど、奢ってもらえますか？」
「将君ＯＫよ。主人がたくさん給料いただいてるから、気にしないでジャンジャン食べてちょうだい」
「あのぅ。赤井さんは安月給と言ってましたけど」
「アッハッハッハッハ。将君、私あなたの大ファンになっちゃった。ファンクラブの第一号にしてくれる？」
「会費高いですけど、いいですか？」
恵美子は将のとぼけたキャラが気に入ったらしく上機嫌だ。赤井はそんな将を見てて、仏陀やキリストのように、悟りを開いたり人々に教えを説いたりするわけではないが、この少年は神に間違いないと思った。将と一緒に世のため人のために力の限り進むことが、自分に課せられた使命だと、改めて思った。

恵美子のおすすめのスウィーツを満喫して帰宅した将は、すぐに赤井の部屋へとテレポートした。赤井が驚くのを予想していた将は、その期待に応えてくれた赤井が可笑しかった。
「赤井さん、予想どおり驚いてくれてありがとうございます」
「どうでもいいことに礼を言うなよ。本当にビックリしたんだからな。ところで、話をする前に俺の超能力を見てくれないか？」

「是非、見てみたいです。お願いします」

将は正直、赤井の超能力がどれほどのものか興味があった。なにせソウルワールドで、一番濃い色のソウルノートを赤井に与えたからだ。

「いろいろと試してみたんだけど、重さで言ったら恐らく、世界最大のタンカーでも、ジャンボジェット機百台でも持ち上げられると思う。それより見て欲しいのは、こんなことも出来るんだ。自分でもビックリしたよ。こんな素晴らしいプレゼントをもらって、君には感謝、感謝だよ」

そう言うと赤井は、テーブルの上の焼酎のビンを手に取ると、テーブルに押し付けた。すると、焼酎のビンがテーブルにめり込んだのだ。将が持っている能力の念力と、なんと表現したらいいのか分からないが、もうひとつの能力も赤井は使えるのだ。

「赤井さん、凄いですね！」

「凄いというか夢のようだよ。君じゃないけど、この力をどう使うかだよな。ただ物を動かしたり、今みたいに驚かせたりするだけだったらマジックと同じだからな」

「赤井さん、その力ですけど、野崎と僕を襲った暴力団を叩くのに貸してもらえませんか？」

「貸すも何も、そもそもこの力は君にプレゼントされたんだから、断る理由は何もないよ。喜んで協力するよ。それと気になってることがあるんだけど、もしかしたら、彩子ちゃんにも超能力をプレゼントしたんじゃないのか？」

「そのとおりです。彩ちゃんには言ってないんですけど、彼女が欲しがってた病気を治す力のソウルノートをプレゼントしたんです。結果的に、そのおかげで僕は助けられたんですけど・・」

赤井は再び将を神だと思った。思ったというより、それは確信に近い。なぜなら、もし将が彩子にソウルノートをプレゼントしてな

かったら、将は確実に死んでいたはずだ。そう考えると、彩子と自分に超能力のソウルノートがプレゼントされたのは、神の意志としか思えない。

彩子は将が危機一髪のところを救った。では自分がやるべきこと、自分に課せられた使命は何だ？　赤井は超能力を授かり、子供みたいに浮かれていた自分がちっぽけな人間に思えた。将に付いて行こう。赤井には、今はそれしか答えが浮かばなかった。

「将君、それでこれからどうする？　何か考えはあるのか？」

「今日僕を襲った相手は、超能力を持ってるのは間違いありません。しかし、変だと思いませんか？　僕もいろいろと超能力者を探したんですけど、実際に使えるような能力の持ち主はほとんどいませんでした。ところが水谷さんの話だと目の前から消えたと言ってたので、たぶんテレポートが使えるんです。それ自体が不思議です。僕らが知らない何かがあるような気がするんですけど」

言われてみれば確かにそうだ。テレポートが使えるとなると、相当な能力の持ち主だ。そいつが将の殺害に関与しているということは、ただの偶然ではない。ましてそんな超能力の持ち主が、今まで赤井の耳に入ってこなかったということも腑に落ちない。

サイレント・パニッシャーの野崎が絡んでいるというのも、何か関係がありそうだ。赤井は将を襲撃した奴らは、超能力集団ではないかという気がしていた。もしそうなら、奴らに対抗するために、将が自分に超能力を与えたのではないか？　それだと辻褄が合う。赤井は自分の考えが外れていることを祈りつつ将に話してみた。

「赤井さん、実は僕も超能力集団がいるんじゃないかと思ってたんです。もしそうだとしたら、奴らが悪事を働く前に叩かないとまずいですね。この前襲われた時に奴らの一人のシグナルを覚えたんで、明日、探りに行ってみます」

「気をつけてな。何かあったらすぐに連絡くれよ」

その時、将の携帯電話の着信音が鳴った。ディスプレイには彩ちゃんと表示されている。
「将だよ。なあに？」
「マサルくん、大丈夫？　撃たれたところは何ともないの？」
「彩ちゃんのおかげで助かったよ。もう何ともないから、心配しないでも大丈夫だよ」
「聞きたいことがあるんだけど、もしかしたら、私が超能力を使えるようにしたんじゃないの？　そうでないと、今日のマサルくんの傷が治ったことは説明できないわ」
　将は今まで調べたソウルノートの色と超能力の関係、赤井と彩子のソウルノートを取り替えたこと、赤井は念力が使えることなどを、電話ではなくテレパシーで伝えた。そのほうが早く正確に伝えられるからだ。
「彩ちゃんの希望通り、病気や怪我を治せる一番力の強いソウルノートだから、難病や末期ガンの患者も治せると思うよ。でも、このことは知られないようにしてね」
「ありがとう、マサルくん。そうするわ。私もマサルくんや赤井さんのように、この力を世のため人のために使うわ」

5―17

ヒットマンからの報告を聞いた山崎は、野崎とヒットマン、それに腹心の組員三人と一緒に自宅で祝杯をあげていた。テーブルの上には、ウィスキーや焼酎やワインなどに加えて、豪勢な料理が並べられている。ほろ酔い気分になったところで山崎が野崎に言った。

「野崎、約束どおり、お前は今からワシの子分や。ワシの言うことに逆らうんやないぞ」

ヒットマンが念力で縛られているところを、組員の佐久間の瞬間移動の能力で逃げられたことを野崎は知らない。野崎は彩子を操ることだけはやったが、今日の現場にはおらず、佐久間を始め山崎や三人の組員に超能力があることを知らない。

「すみません山崎さん。あのときはついそう言ってしまったんですが、考えてみたら力のあるものが上に立つというのが、あなたたちのルールじゃないんですか？　ということは、百歩譲ったとしても、僕はこれからもあなたと対等の立場だと思うんですが」

野崎の裏切りとも言える言葉に山崎の怒りが爆発した。鬼の形相になった山崎は、野崎の予想を裏切るような強い口調で言った。

「野崎！　てめぇ、誰に向かって口きいとるんや！　大人しくしてりゃ調子に乗りやがって、てめぇみたいなクソ餓鬼、いつでも殺せるんやぞ！」

「山崎さん、僕にそんなことを言っていいんですか？　僕の力をまだ分かってないみたいですね。もう一度見せてあげましょう」

野崎が自信たっぷりに言った直後だ。野崎の体が宙に浮いたかと思うと、大の字の状態で壁に張り付いたのだ。野崎が動こうにも動けない。まるで目に見えない力で押さえられているとしか思えない。

「野崎、このままお前にドスを刺してもええんやで」

山崎は本気とも冗談ともつかない口調で言った。野崎の額には、脂汗が滲んでいる。

「野崎、お前だけが超能力を持ってる思うたら大間違いや。ここにおる全員が使えるんや。信じられへんのやったら、ワシの衝撃波で、お前を粉々にしてもええんやけどな」

山崎はそう言った後、口をとがらすと、テーブルの上のウィスキーのボトルに向けて衝撃波を放った。パシッ！　という音と共に、ボトルは粉々に砕け散った。野崎は初めて見るその光景に、背筋が凍りついた。なんという破壊力だ。

「野崎、これがワシの力や。それにな、こいつら三人の力は、お前の持ってる力以上やぞ。これでもワシより上や言うんか！」

「あんたたち、まさか！」

「そのまさかや。真導子に超能力を授けてもらったんや。これでワシらのことが分かったな。今後一切、偉そうな口きくな！　お前は今からワシの手下や。逆らったら死ぬと思え。分かったな！」

野崎は、今はイエスと答えることにした。超能力が身に付いた自分はスーパーマンだと思っていた。自分以上の超能力者は、いたとしても中瀬だけだと思っていた。それが目の前に四人も現れたのだ。

「分かりました。子分になります」

そう言いながら野崎は壁に張り付いた状態で、山崎に向かって念力を放った。山崎の体が浮き上がり、この前と同じように大の字の状態で天井に張り付いた。

「野崎、加藤、もうええ！　二人ともやめろ！　こんなことをしてもムダや。とにかく話し合おうやないか」

山崎の言葉を合図に、野崎と加藤は念力を放つのをやめた。

「仲間内で仲たがいしてもしゃあないやろ。それより、せっかくの超能力や。この力を使って大儲けしようやないか。ただしさっき言うたように、野崎お前はワシの子分や。お前から言い出したんやか

ら男やったら約束守れや」
「分かりました」

5―18

将は狙撃された翌日、学校から帰宅すると自分の部屋に駆け上がり、幽体離脱した。狙撃犯を探すためだ。意識体の将は以前、彩子が誘拐されたときに覚えておいた組員のシグナルを探した。

組員を探し当てるのに五秒も必要なかった。男の名前は金城剛史。年齢は二十八歳。将の回し蹴りで骨折した左上腕部は、あれから約一ヶ月が経ち、ほぼ完治に近づいていた。

意識体の将は金城の意識を探り、山崎組のことを知ることができた。意識体の将は次に、組長の山崎の意識に潜り込んだ。山崎はソファーに座りウィスキーを楽しみながら、テレビのニュース番組を見ている。

意識体の将は山崎が衝撃波を使えること、その能力は真導子という能力者から授かったことを瞬時に知った。山崎は衝撃波は使えるがテレパシーは使えない。このため将が潜り込んだことに気づくことはなかった。

「そうか！　真導子という能力者が、野崎と山崎たちに超能力を与えたのか。　これ以上悪人が超能力を持たないように、真導子の超能力を消す必要があるな」

意識体の将がそう思ったところへ、野崎が入ってきた。野崎のシグナルが見つからなかったため、野崎は死んだものと思ってた将は驚いた。生きているということは、野崎はシグナルを変えたのだ。それしか考えられない。シグナルを変えることは自分でも不可能だ。ましてシグナルのことを知らない野崎が、自ら変えることなどは考えられない。野崎は一体どうやって変えたんだ？　謎は深まるばかりだ。

意識体の将は野崎の意識に入り込んでいるわけではないので、気づかれることはない。

「山崎さん、お邪魔しました。今日はこれで帰ります」
「何かあったら連絡するから頼むで」
意識体の将は、そのまま野崎のクルマへと移動した。野崎は意識体の将に気づくこともなくマンションの駐車場へクルマを停めると、自分の部屋へと入っていった。マンションは以前と同じだ。野崎の居場所を確認したところで、意識体の将は自分の肉体へと戻った。

「マサルくん、私ちょっと怒ってるの」
彩子はいつものように、通学の途中で将に言った。二人は特に用事がない限り、一緒に登下校している。
「えっ？　何か彩ちゃんを怒らすようなことしたかな？」
「私に病気や怪我を治せるソウルノートをプレゼントしてくれたことは嬉しいんだけど、もっと早く教えてくれなくちゃダメじゃないの。この前マサルくんが撃たれたとき、もし意識がない状態だったら死んでたよ。だって私、自分にこんな能力があるなんて知らなかったんだから・・」
将は自分の身を心底案じている彩子の気持ちが嬉しかったと同時に、確かに彩子の言うとおりだと反省した。クイックレスポンスが何事においても大事だとは分かっていたが・・。
「ゴメン彩ちゃん。反省してるよ」
「よし！　今回は特にハンバーガー一個で許してあげるけど、今度私を怒らせることがあったら、エルメスのバッグよ。分かった？」
言いながらイタズラっぽく横目で睨む彩子は、ドキッとするほど可愛い。そんな彩子が事件に巻き込まれるのは許せない。自分が生きていることを知ったら、野崎たちはまた仕掛けてくるはずだ。愛する人たちのため、世のため人のために、悪は成敗されなければ成らない。

昼休みになり弁当を食べ終わった将は、昼寝をしているフリをすると赤井にテレパシーで話しかけた。

「赤井さん、野崎は生きていました。関西の暴力団山崎組と組んで、僕を襲わせたんです。僕が生きていることを知ったら、また襲ってくると思います。それに真導子という能力者に、山崎組長と野崎、組員三人が超能力を授けてもらっています。恐らく真導子には、人に超能力を与える力があると思われます。野崎たちを叩くと同時に真導子の超能力を失くすことも必要です。一度会って、どうやって奴らを叩くか相談しましょう」

「将君、情報ありがとう。今度の土曜日にうちへ来てくれ。それと君が生きてることを、くれぐれも悟られないようにな」

将は赤井と相談するまでは、野崎にも山崎組にも近づかないようにした。もし自分が生きてると知られた場合、彩子や自分の家族、あるいは彩子の家族にまで危険が及ぶ恐れがあると考えたからだ。

5―19

最近将は意識体としてソウルワールドにいるときと、肉体の将として現世にいるときの感覚が、あまり違わないようになっているような気がしている。何とも表現しづらいのだが、ソウルワールドで普通に使っている能力の全てを、現世でも使えるような気がするのだ。

将はその感覚を確かめるべく、一人で超能力の実験をしてみることにした。実験と言っても、ソウルワールドで普通にやっていることを現世でもやるだけのことだ。テレポート、テレパシー、念力、飛行は既に経験済みだ。

将は夕食を終え、入浴しながら実験をしてみた。シャワーのお湯を頭から被りながら、身体の周りにバリヤーをイメージしてみた。すると驚くことに、シャワーのお湯は身体から五センチほど離れたところを流れ、体にはかからない。まるで身体全体が、目に見えない何かで覆われているような感じだ。

バリヤーの実験を終え湯船につかると、右手を湯船の外に出し手を開いた。その状態で野球のボールをイメージした。するとボールが手のひらに現れた。傍から見ていると手品だが、手品と決定的に違うのはタネがないということだ。将は二つの実験の結果を見ても、驚くことはなかった。ソウルワールドで普通にやっていることだからだ。

風呂から上がると身体能力を試すことにした。身体能力は肉体だけで、意識体の将には関係ない。ジャージーに着替えて外に出た。時間は夜の九時で真っ暗だ。実験には都合がいい。

周りに人のいないのを確認すると全力で走り出した。想像を絶するその速さは、チーターと互角と思えるほどのスピードだ。二百メートルほど走ると立ち止まり、その状態で垂直に飛んでみた。まる

でワイヤーアクションかと思えるそのジャンプ力は、五メートルに達した。

ソウルワールドを行き来するようになり理由は分からないが、身体能力が桁違いに上がっていた。繰り出す蹴りは、プロ野球選手のバットの素振りの早さに匹敵する。パンチはプロボクサーと言えども避けるのは不可能だ。身体能力の実験結果に満足したのか笑みがこぼれた。考えていた実験を終え自分の部屋に戻った将は、改めて自分の使命を考えることにした。

その週の水曜日、大阪の某大手都市銀行で奇妙な事件が発生した。金庫に保管してある現金二億円が無くなったのだ。金庫は厳重なセキュリティがかかっており、扉が開けられた形跡はない。防犯カメラには何も映っていない。警察が念入りに調べたが、指紋の一つも髪の毛一本の残留物も見当たらない。誰かが侵入した形跡がないのだ。この奇妙な事件に誰もが首を捻るだけで、現金が蒸発したとしか思えない不可解な事件だった。

翌日の木曜日、一今度は別の都市銀行で昨日と同じ事件が発生した。金庫に保管してあった現金二億円が無くなったのだ。状況は昨日と全く同じで、金庫の扉が開けられた形跡はないし、現金が蒸発したとしか思えないのだ。またしても警察や銀行の職員たちは首を捻るだけで、お手上げ状態だ。

赤井は水曜日の事件が起きた時点で、ピーンと来るものがあった。常識で考えたら絶対に分からない事件だが、赤井には犯人の姿がはっきりと見えていた。超能力集団の仕業だ。そう確信したが管轄が違うし、まして超能力集団の犯行だと言っても誰も信じるはずがない。

そう思っている矢先に、またしても全く同じ事件が起きた。これは絶対に超能力集団の犯行以外に有り得ない。赤井は携帯電話をワン切りした。将が授業中のとき、赤井から将への連絡はワン切りと

二人の間で決めてある。
休憩時間になり、将は赤井とテレパシーで話した。将も今回のふたつの事件は赤井と同じと見ている。山崎ら超能力集団の犯行だ。

「赤井さん、恐らく奴らは同じ犯罪を繰り返しますね。証拠が何もないから完全犯罪ですよ。僕らの推理は当たっていると思うんですけど、証拠がないと逮捕できませんね」
「現行犯逮捕はムリだな。どうしたらいい？　何か名案ないかな？」
「犯人は金庫室の中にテレポートして、現金を掴んだらすぐにテレポートで帰るんです。犯行時間はたぶん三分以内ですよ。考えてみたんですけど、犯行を防ぐ方法は一つしかありません」
「えっ！　止められるのか？」
「犯人たちの超能力を消し去るのが唯一の方法です。これ以外にありません」
「ということは、君にしか出来ないな」
「はい。僕もそう思います。いずれ早いうちに、彼らの能力を消さなければと思ってたところなんです」

将はこのまま彼らを野放しにしておくと、自分と家族や友達にまで危険が及ぶ可能性があること、山崎組が巨大化し巨悪化する恐れがあること、完全犯罪が次々に起きる可能性があることなどを伝えた。
「確かに君の言うとおりだ。しかし、君ひとりに任せるというのも変な話だよな。俺は現役の刑事だし・・」
「気にしないでいいですよ。それより超能力集団を叩くのもそうですが、前にも言ったように真導子の能力も消す必要があります。でも考えてみたら、超能力を持つことは悪じゃありません。その使い方次第だと思います。犯罪にも使えるし人助けにも使えます。だから真導子の能力自体は素晴らしいと思います。あっさり消してしまうのは、もったいないような気もしてるんです」

「要するに、真導子が見境なくというか、あるいはカネか何かの見返りで超能力を与えるんじゃなくて、善人にしか能力を与えなければいいわけだ。そうなると真導子の能力を消す前に話し合う必要があるよな」

「はい。赤井さんの言うように、一度話し合うつもりです。もしその結果、僕の言うことに納得してくれなかったら残念ですけど、真導子の能力を消します。これでいいですよね？」

「ＯＫ！　それでやってみてくれないか」

まず真導子を何とかしないといけない。その次が山崎組と野崎だ。将は叩く順番を決めると、実行は今度の土曜日に決めた。平日は帰宅後しか時間がないからだ。将は彩子に作戦の内容と実行日を電話で話した。

「マサルくん、以前、野崎の意識に閉じ込められたことがあったでしょう。油断大敵だからね」

「了解。油断大敵というのが身にしみて分かったから、今度は慎重にやるよ。それにまだ言ってなかったけど超能力の実験をしてみたんだ。そしたらソウルワールドで使っている能力が、ほぼ完璧に使えるようになってたんだ。身体能力も前よりも高まってたよ」

「でも過信は禁物よ。くれぐれも気をつけてね」

彩子は傷や病気は治せるものの、意識体としての将が危機に陥った場合、何も出来ない自分が不安でしかたなかった。

5－20

土曜日の午前十時、将は彩子と一緒に赤井の自宅に居た。赤井から、作戦実行は赤井の自宅でやるようにと言われていたからだ。

「じゃあ今から、真導子への作戦を実行してきます」

「頼んだぞ。くれぐれも用心してな」

赤井の言葉に頷きながら、将は幽体離脱した。意識体の将は真導子の意識に潜り込むと、ソウルノートを見てみた。ソウルノートの色は、初めて見るシルバーだ。どちらかと言えば濃いほうのシルバーだ。色が濃いということは、それだけ能力が強いのだ。

野崎や山崎の様子から、シルバーのソウルノートは人に超能力を与えることができるのだ。それぱかりか、超能力を与えた時点でシグナルも変わるという副産物までつくのだが、そのことを将は知らない。

真導子は意識体の将が潜り込んでいることに気づくと、意識を探られないようにガードを張った。だが既に意識体の将は真導子から、ほとんど全ての情報を読み取っていた。意識の中に違和感を感じたとき、真導子は身の危険を感じ、双子の妹の神導子に意識体の将のことをテレパシーで伝えた。このとき真導子は、言葉に出来ない恐怖を感じていた。今まで意識に入られたことはなかったからだ。

双子の妹の神導子は伊豆の山奥に住んでいる。真導子からテレパシーを受け取った神導子は、全神経を集中して意識体の将を探り始めた。神導子の意識に気づいた将だったがそのまま探らせ、逆に神導子のシグナルを覚えた。

意識体の将が自分の肉体へと戻った時点で、神導子の意識から将が消えた。短い時間だったが、意識体の将を探った神導子は、その圧倒的な能力に身震いした。姉や自分がたちうち出来る相手ではな

いことを悟った。あまりにも力の差がありすぎるのだ。
神導子は将について分かったことをテレパシーで真導子に伝えたが、そのとき既に、真導子のソウルノートは意識体の将により、超能力が使えない普通のソウルノートへ入れ替えられていた。ソウルノートが入れ替わっていることに真導子は気づいていなかったが、神導子は姉の超能力が無くなっていることに気づいた。

「真導子よ、お前の能力は消えてしまったぞ。中瀬将が消してしまったのじゃ」
「なに！　ワシの能力が無くなったじゃと？　そんなバカな。確かに中瀬が意識に入ってきた時、ワシはガードを張って防いだんじゃぞ」
「おそらく中瀬は姉じゃがガードを張ったとき、既に能力を奪い去っていたのじゃろう。ワシらとは力の次元が違いすぎる。いずれワシのことも嗅ぎつけ、力を消しに来るじゃろう」
「神導子よ、中瀬がおぬしを見つける前にワシの能力を元に戻してくれ。能力が戻って、おぬしと一緒に戦ったら勝機があるやもしれん」
「承知した。一刻の猶予もないぞ。すぐにワシのところへ来てくれ」
意識体の将は、双子の妹の神導子も真導子とまったく同じ能力を持っているのだろうと思った。能力の無くなった真導子が考えていることは一つしかない。妹のところへ行くのは目に見えている。意識体の将は、一旦、肉体に戻ることにした。

目を開けた将に赤井と彩子が安心したような表情で、同時に声をかけた。
「どうだった?」
「真導子のことはほぼ分かりました。真導子には双子の妹の神導子がいて、たぶん妹も同じ能力を持っていると思います。真導子のソウルノートを普通のソウルノートに入れ替えて超能力を消しました」

「えっ？　話しあうんじゃなかったのか？　いきなり消して大丈夫か？」

「大丈夫です。僕の予想では、神導子が真導子に超能力を与えると思います。今回超能力を消したのは、僕の力を彼女らに見せるためです。話し合いには多少脅しも必要になるかと思って、力の違いを見せたんです」

翌日、真導子は将の予想どおり、伊豆の神導子の家に居た。神導子の部屋にも、真導子の部屋にあったのと同じような祭壇が置かれている。

「姉じゃ、時間がないから早速取りかかるぞ」

神導子は真導子と同じように呪文のような言葉を唱え始めた。十五分ほどで呪文は終わり、神導子は真導子の額に右手を当て、なにやら奇妙な言葉を念じた。その瞬間、神導子の額に汗が滲み、苦痛とも歓喜とも言えない表情に変わった。ゆっくりと目を開けた神導子の目は鋭い眼光を放っている。先ほどとはまったく違う輝きだ。神導子は超能力が戻ったことを確信した。

「姉じゃ、元に戻ったみたいじゃのう」

神導子の力により、真導子の能力が戻ったのと同時にシグナルも変わった。このため意識体の将が真導子を見つけることは不可能になったが、真導子姉妹にはシグナルのことまでは分からない。

「神導子よ、二人で力を合わせて中瀬を潰すのじゃ。ヤツの能力を無くすのじゃ。さもないと、ワシらはただの老婆にされてしまうからのう」

「承知した。姉じゃよ、二人離れて暮らすのは危険じゃ。中瀬をやっつけるまでは、ここで一緒に暮らしたほうがいいぞ」

真導子はゆっくりと頷いたが、果たして二人で闘って勝てるかどうかは疑問だった。

「妹よ、中瀬の力を見くびるでないぞ。あやつの力はワシらの何十倍も強いぞ。あやつを倒すには呪術師の魔呼斗も呼んだほうが良か

ろう」
「姉じゃ、分かった。今から魔呼斗に呼びかけてみる」

神導子は目を閉じるとテレパシーで魔呼人に呼びかけた。魔呼人が応答すると神導子は、中瀬将という強力な超能力者が現れ、真導子の能力を消した経緯を伝えた。
「神導子よ。中瀬将とおぬしらの経緯については分かった。それでワシに何をしろと?」
「ワシらにとって中瀬は脅威だ。だからおぬしの力も借りて、一緒に中瀬を葬りたいんじゃ。どうじゃな。力を貸してもらえんじゃろうか?」
「分かった。やるなら早いほうがいいじゃろうから、明日そっちへ行くことにする」

魔呼人は広島の三段峡温泉の近くに住んでいる。その温泉は太田川の上流約十六キロメートルにわたって自然の造形美が見られる特別名勝、三段峡の入口あたりの渓流沿いに湧く温泉だ。

真導子や神導子と同じように、魔呼人も見た感じは年齢不詳に見える。四十センチほどに伸びた白髪の口髭とアゴ鬚が、鋭い眼光と顔中に刻まれた皺と相まって、不思議な雰囲気を醸し出している。

見方によっては威厳があるようにも見えるが、不気味にも見える。魔呼人は、小さな古民家で自給自足の生活をして暮らしている。家の中には呪術に必要な祭壇と、獣の皮や燭台、ロウソクや諸々の道具が置いてある。魔呼人は呪術に必要な道具などをカバンに詰め、手早く明日の出発の準備を整えた。

5―21

「アッハッハッハッハ」

山崎の自宅では、組長の山崎が超能力者の部下三人と、大声で笑いながら酒を飲んでいた。二日で四億円が手に入ったのだ。それもわずか十分もかからず、証拠も残さず。

「組長、笑いが止まらないですね」

「ほんまにそうやな。これやと赤子の手を捻るより簡単やな。アッハッハッハッハ。こんな楽な商売は他にはあらへん」

「俺と加藤が金庫の中へテレポートして、加藤が手を使わず念力で金を集めて、テレポートで持ち帰る。一切手を触れないから指紋も残りまへんわ。超能力があると完全犯罪が簡単に出来ますわ」

テレポート能力を持つ佐久間が満足そうに言った。

「組長、明日もやりますか？　それと野崎はどうしますか？」

「そやな。明日も二億円いただくとするか。加藤、佐久間、栗原、お前らがおるから野崎はもう用なしやな」

「野崎を殺りますか？」

「そんなことせんでもええ。勝手に小銭でも稼がせとけや。ワシらは一仕事が二億円やからな。アッハッハッハ。まったく真導子様様や」

自らも超能力者になり三人の組員も超能力を得た今、山崎は野崎の力を借りるつもりはまったくない。むしろ野崎からの依頼が来るのを鬱陶しい。

「中瀬もアホなやつや。俺を怒らせるからこうなるんや。まぁ、自業自得ってことや。中瀬、悪く思うなよ」

そんなことを思いながら野崎は、今日もマンションのベランダで至福のときを満喫していた。将が死んで天敵がいなくなり、野崎は今の時間が永久に続くと思っていたが、ただひとつ気になることが

あった。山崎組だ。中瀬が死んだ今となっては山崎組に用はない。自分から彼らに要求することは何もないからだ。逆に彼らが要求してくるのが鬱陶しかったが、中瀬の件以来、何も言ってこない。それが多少気になる。

野崎は新聞もテレビのニュースも見ない。テレパシーを悪用して稼いだ金で、自由気ままな生活を謳歌している今、世間のくだらない事件などに全く興味はない。もしニュースを見ていたら、二億円が消えた事件は山崎組の犯行だとすぐに気づいたはずだ。

翌朝十時ごろ起きた野崎は、シャワーを浴びると地味な目立たない服装に着替えてマイカーのカローラへ乗り出発した。行き先はいつものとおり、銀行のＡＴＭコーナーだ。

いつものようにテレパシーでターゲットを見つけると、いつものようにテレパシーで操り、いつものように現金を受け取ると、いつものように証拠を残さず現場を去っていった。

マンションに帰ってきた野崎は、近々引越しするつもりでいた。今となっては用のない山崎組から手を切るためだ。ヤクザと関係を持ったら、いつ何時、今の自由気ままな生活が壊されるか分からない。孤児で身寄りのない自分が、神戸にこだわる理由は何もない。そうと決まれば早いに越したことはない。早々にマンションを売り払うことにした野崎は、明日、不動産屋に行くことにした。

翌日不動産屋で売買契約をした野崎は、携帯電話も新しくした。電話番号も新しくした。理由は山崎組との関係を絶つためだ。買ったばかりの携帯電話で恋人の裕美に電話をすると、仕事の都合で東京に行くことになり、落ち着いたら連絡をすると伝えた。

面倒な引越しは時間がかかるので、家具や電化製品などは全て置いていくことで話をつけた。とにかく、やると決めたら即やるのが野崎の性分だ。それにもまして、一刻も早く山崎組と手を切りたかった。東京での住居探しは焦る必要はない。稼いだ現金は一億円を超えている。

野崎は東京で、あることをやるつもりでいた。以前から考えていたことだが、踏ん切りがつかないでいた。今回の山崎組との一件は、野崎の背中を押すきっかけとなった。

5―22

山崎はその後、二、三日に一件の割合で犯行を重ねていた。場所も、福岡、広島、仙台、東京、沖縄と予測不能の行動をとっている。この五件の犯行で集めた現金は十二億円を超えている。

「アッハッハッハ。笑いが止まらへんな。まさに、濡れ手に粟とはこのことや。アッハッハッハッハッハ」

すこぶる上機嫌な山崎は、超能力者の三人の組員と一緒に、今日盗んできたばかりの現金をテーブルの上に置き祝杯をあげていた。今では恒例となった光景だ。

この二週間で五件もの盗難というか現金が消えた事件は、ニュースや朝のワイドショーでも毎日のように取り上げられていたが、現場には犯行の証拠が何もなく、警察はコメントに苦慮していた。

意識体の将は祝杯をあげている山崎の自宅に移動した。狙撃されてから今日まで、将は野崎や山崎組と接触してなかったが、考えた末に山崎組の超能力者の超能力を消すことにした。このままではいくら現金が盗まれるか分からないからだ。

酔いが回っている山崎たち四人は、全員が饒舌になっている。過去の女のことや喧嘩での自慢話、山崎組の勢力拡大など、いろいろな話題を肴にアルコールの量は増えていた。意識体の将は苦笑しながら、しばらく彼らの話を聞くことにした。

「加藤、久しぶりに念力を見せてくれや」

山崎の言葉に立ち上がった加藤はおどけた表情で、マジシャンがやるような仕草で芸を披露し始めた。芸と言ってもマジックではなく超能力だ。

「皆さんよろしいですか？　とっておきのマジックをお見せします。タネも仕掛けもございません。テーブルの上のコップが宙に浮きます。ようく見ててください。ではいきますよ。ハンドパワー！」

加藤のふざけた口調に手を叩き笑いながら見ていた三人は、コップが浮き上がるのを見て大げさに驚いた。その驚き方に酔いが回っている四人は大笑いをしたが、意識体の将は何が可笑しいのか見ていてさっぱり分からない。

そんな中、油断大敵という言葉が身にしみてる将だったが、またしても油断大敵の状況に陥ってしまった。と言うより運が悪かった。

栗原が次に山崎が自分を指名するだろうと思い、テレパシーを回りに放ったのだ。ところがふざけて放ったテレパシーに、意識体の将が引っかかってしまったのだ。

それだけならまだしも、意識体の将は油断していたために栗原に正体を読まれてしまったのだ。生きていることを隠していた将は大きなミスを犯してしまい、慌ててガードを張ったが既に正体を読まれてしまった後だった。

「中瀬！　居るのは分かってるぞ。隠れてないで出て来い！」

突然栗原が大声で叫んだ。山崎と加藤、佐久間の三人は、栗原の真剣な表情に、ただならぬ気配を感じ身構えた。

「どないした栗原！　中瀬がおるんか？　ヤツは死んだはずやぞ」

「組長、中瀬は生きてます。間違いありません。中瀬、正体はバレてるんやぞ。男らしく出てきたらどうや！」

意識体の将は自分の肉体に戻ると、山崎たちが居る部屋へテレポートした。突然現れた将に驚いた四人は、ヤクザらしからぬ大声を上げた。意を決した将は山崎たちに力の差を見せつけ、抵抗するのをやめさせる作戦に出た。

山崎たちが身構えて超能力を使おうとした瞬間、将は異次元の速さで動いた。凄まじい早さだ。念力の使い手の加藤の右上腕に、高速の後ろ回し蹴りが放たれた。その衝撃で壁に叩きつけられた加藤は気を失った。手加減はしているが、骨折は免れない。

将は佐久間と栗原を二人同時に念力で天井に貼り付け、そのまま

の状態でテーブルの上の一升瓶を指差した。すると氷が解けるように一升瓶が解け始めたではないか。初めて見る光景に、山崎たちは度肝を抜かれ言葉も出ない。

　このままでは殺られると思った山崎は、将に向けて衝撃波を放った。避けようとしない将を見た山崎は、将が粉々に砕け散ることを確信した。ところが、山崎の期待は見事に裏切られた。将は何事もなかったように笑いながら平然と立っている。そんなバカな！　山崎は信じられないという表情で将を見た。

　次の瞬間、山崎の身体が浮き上がり、栗原、佐久間と同じように、天井に張り付いた。将はゆっくりとソファーに座ると三人に向かって話し始めた。

「僕を狙撃したのは誰ですか？　あいにく僕は不死身なので、ピストルで撃たれても死にません。狙撃する前に言っておくべきだったかな。もう一度聞きますけど、誰が狙撃したんですか？」

　三人は黙ったままだ。

「あんたたちの意識を探ればすぐに分かるから、教えてもらわなくても構いませんけどね。それと今から僕がやることを言っておきます。一つ目は、あなたたちの超能力を消すこと。二つ目は僕を狙撃した罰を受けてもらうこと。罰というのは、あの世へ行ってもらうということです。あっ！　また大きなミスをするところだった。あの世へ行くんだから、一つ目のことはやらなくてもいいんだ。じゃあ今から僕の超能力で、あなたがたの心臓を止めます。覚悟は出来てますね？」

　淡々と独り言のように言った将は、三人に向けて右手を向けた。正直なところ将はジェスチャーだけで何もする気はなく、脅しの意味で右手を向けただけだったが、その効果は予想以上だった。

「やめてくれ！　頼むから助けてくれ！　俺たちが悪かった。頼む！　助けてくれ！」

三人は必死で叫んだ。恥も外聞もなく必死で謝った。ヤクザのプライドも威厳も捨てて必死で懇願した。将が高校生だということも忘れて。

将は右手を下ろすと同時に、三人をゆっくりと下ろした。三人が驚愕の目を向ける中、将はウィスキーのボトルを指差した。ボトルにはまだ半分ほどウィスキーが残っている。そのウィスキーが、三人が見ている間に、みるみる凍っていったのだ。

「山崎さん、あんたたちを殺すのは簡単です。ソウルノートを抜き取れば、それで死にます。僕にちょっかいを出したのが間違いでしたね。僕は不死身だし、バリヤーも張れるから、たとえ核攻撃されても何ともありません。僕の力は、あんたたちが想像できないほど強力な異次元のパワーなんです」

誰かがゴクリと唾を飲み込む音が聞こえた。圧倒的な能力の差を見せ付けられた三人には、もはや抵抗する気持ちはまったく残っていない。

「中瀬さん、俺たちは野崎に騙されてあんたを襲ったんです。悪いのは野崎です。野崎の居場所を教えますから、あいつを好きなようにしてください」

山崎は敬語で話し始めた。圧倒的な力の差を見せ付けられた結果、自然とそういう口の利き方になったのだ。

「野崎の居場所は知ってるし、徹底的に叩くつもりです。以前、野崎の超能力を消したけど、今度はその程度では済まさない。野崎は僕の力をみくびってたようです。今となっては手遅れですけどね。そうそう、あんたたちの超能力も消します。もちろん、消した能力が復活しないように、真導子の超能力も消します」

将の言葉に山崎たち三人は顔を見合わせ驚いた。せっかくもらった超能力が消える。そんなバカな。三人の思いは同じだった。

「中瀬さんすみません。もう悪事には使わないので、超能力を消すのだけはやめてください。お願いします。このとおりです！」

三人は慌ててひざまずくと、額を床に押し付け土下座をして、将からの返事を待った。しかし返事が返ってこない。ゆっくりと顔を上げてみると、将の姿は消えていた。

5―23

「中瀬はバケモノや。とんでもないヤツに手を出してもうた。下手すると山崎組は全員、あの世行きになるかも知れへんぞ。あいつに勝てるやつは世界中探してもおらへん」

山崎は恐ろしさを通り越して、崇拝するかのような口調で言った。

「組長、中瀬はワシらと真導子の超能力を消すと言ってましたが、どないしますか？」

「どないするも何も、殺されるよりはましやろ」

「中瀬の家族を誘拐して取引しましょうか？」

栗原が言った。

「アホ！　相手は神様みたいな男やぞ。そんなことしてみい。ものの数秒で全員殺されるぞ。今後一切、中瀬の家族や関係者に手を出すんやないぞ！　分かったな！」

山崎は言いつつ、自分たちをおだてて中瀬の殺害を依頼した野崎を苦々しく思った。一歩間違えば山崎組は消滅するところだ。

「野崎を呼び出して、この落とし前をつけてもらおうやないか」

言いながら山崎は野崎の携帯に電話をかけたが、既にその番号は解約されていて連絡が取れない。山崎の怒りが爆発した。野崎のマンションは調べてあったので、山崎は佐久間に野崎のマンションにテレポートするよう指示した。五分後、佐久間がテレポートで山崎の前に現れた。

「組長！　野崎のマンションはもぬけの殻です。ヤツは逃げたみたいです。間違いありません」

「クッソ～！　野崎の野郎！　見つけたらタダじゃすまさへんぞ」

中瀬への恐怖と野崎への怒り、山崎組の存亡への不安などが入り混じった複雑な思いを払拭するかのように、山崎たちは再び酒を飲み始めた。否、今の状況を忘れるには飲まずにはいられない。それ

しか方法がなかった。

土曜日の午後三時、将と彩子は赤井の家に居た。幽体離脱した将は、彩子と赤井が心配そうに見守る中、山崎組の事務所へ移動した。事務所では山崎たちが夕食前のアルコールを楽しんでいる。部屋には山崎と超能力者の組員三人も一緒だ。念力の使い手の加藤は、左腕を肩から三角巾で吊っている。将の蹴りで骨折したためだ。

意識体の将は、テレパシーの使い手の栗原以外のソウルノートを順番に抜き取ると、普通のソウルノートに入れ替えていった。三人のソウルノートを入れ替えるのに要した時間は五秒だ。

一旦、肉体に戻った意識体の将は、山崎たちの居る部屋へテレポートした。突然目の前に現れた将に、山崎たち全員が腰を抜かさんばかりに驚き、悲鳴をあげた。

「僕は未成年だから酒は飲めません。ウーロン茶をいただきます」

将がそう言うと、テーブルに置いてあるウーロン茶のペットボトルとグラスが浮き上がり、将の両手に移動した。唖然とする四人に向かって、ウーロン茶を飲みながら続けて言った。

「あんたたちが盗んだ現金は、僕が責任を持って元の金庫に返しておきますから安心してください。礼には及びません。それと、栗原さんのテレパシーの超能力以外は消しました」

将の言葉を聞いていた四人は、すぐに自分の超能力を確認したが、将の言葉にウソはなかった。超能力を消され現金まで奪われようとしていることに、将の桁違いの能力を知りつつも、山崎は怒りを抑えることが出来なかった。

急に立ち上がった山崎は、テレビボードの中の箱に隠してある拳銃を取り出すと、間髪入れずに将に向けて三発撃った。三人の組員も予想しなかった山崎の突然の行動だった。山崎と組員の頭の中には、将が即死するところが浮かんでいた。至近距離での発砲だから外れることは絶対にない。

「山崎さん、まだ弾は残ってるでしょう？　全部撃ったらどうですか？」

涼しい顔をして喋る将の姿は、彼らの想像を見事に裏切っていた。あろうことか、三個の弾丸が将の顔の前五センチのところに浮いているのだ。ＳＦ映画では見たことのあるシーンだが、実際に目の前で起きたその事実に、山崎たちの思考回路はストップしてしまった。ポカンと口を開けたまま動かない。

将が左手を広げると、宙に浮いていた弾丸が手の平の上に移動した。まるで魔法だ。将は部屋に来た時から念のためにバリヤーを張っていた。いくら将でもバリヤーがなければ即死だ。将は三個の弾丸をテーブルの上に置いた。

「ご馳走様でした。僕はこれで帰りますけど、さっき言ったように現金は元の金庫に返しておきます。栗原さん、テレパシーも悪用したら使えなくなりますから注意してください」

言い終わった将は四人の目の前から煙のように消えた。残った四人は完全に酔いが醒めていた。十億円を超える現金も超能力も、全てはひとときの夢だった。中瀬とは全てにおいて次元が違っだ。超能力というのは、自分らが首を突っ込む世界ではないのだ。山崎は金輪際、将のことも超能力のことも忘れることにした。むろん手出しをするつもりもない。

盗まれた現金をそれぞれの銀行に返し終わった将は、赤井の家へテレポートした。毎度の事ながら突然現れた将の姿に赤井は悲鳴をあげて驚いたが、彩子はそんな赤井に大笑いをした。将はすべての結果を話し終わると、赤井のおごりで夕食を食べに行くことになった。

5－24

十月も半ばを過ぎた頃、将は下校の途中で彩子に言った。
「最近、心臓の辺りが時々痛くなるんだけど、彩ちゃん、治してくれないかな」
彩子の家へ着いた将は、そのまま彩子の部屋へと上がっていった。ベッドに横になった将の胸に右手を当てた彩子は、目を閉じると元気になった将の姿をイメージしながら祈った。
目を開けて彩子の様子を見ていた将は、彩子の頭部に流れ込んでくるエネルギーのようなものが見えた。まるでオーロラのように綺麗で神秘的な色だ。
「ソウルワールドからのソウルエネルギーだ。凄い！」
初めて見るソウルエネルギーの神秘さに、将は感動していた。三十秒ほどで彩子の治療は終わった。新品の身体と入れ替わったような感じになった将は、今見えたソウルエネルギーのことを言った。
「へぇえ、そうなの。素晴らしいわね。ソウルエネルギーが私の治癒能力の源だとしたら、難病も治せるかもしれないわね？」
「たぶんと言うか、まず間違いないと思うよ。俺がガン患者の人を治した時は、ソウルノートを入れ替えたけど、彩ちゃんだったら手を当てて祈るだけで治せると思うよ」

一週間後、またしても将は心臓に痛みを感じた。彩子に治してもらったのに、また悪くなるというのは解せない。何かが絡んでいる。そう考えた将は、その何かを探ることにした。
三人寄れば文殊の知恵。それもあるが、最近、野崎、真導子、山崎組、ヒットマンと、いろいろな事件や場面に遭遇して危険な目にもあったので、今回も赤井と彩子に相談することにした。
将は彩子と一緒にいつものように赤井の家にいた。将の考えでは、これから行うことは最低でも七時間前後、あるいは一日かかるよう

な気がする。

「君のような異次元の力を持っている人間が、そう簡単に病気になるとは思えないし、まして彩子ちゃんに治してもらって一週間後に、また体調不良というのは確かに変だな。もしかしたらまだ我々が出会ってない能力者がいて、君に何か良からぬ念を送ってるのかも知れないな」

「赤井さん、それって黒魔術とか密教とか？」

「彩子ちゃん、俺はそう思うよ。将君に出会うまでは超能力なんか信じてなかったけど、今はＳＦ的なことでも十分有り得ると思うようになったよ。子供の頃に嫌なヤツのワラ人形を作って釘を刺したことがあったけど、案外そういうのも効果があるのかもしれないと思うんだ」

「赤井さん、彩ちゃん、今から離脱して僕に送られているかもしれない念を調べるから、その間、僕の身体を守ってて」

将は横になると幽体離脱した。時間は午前九時。意識体の将は天井のあたりから、自分の肉体に送られて来ているだろうと思われる何かを探ることにした。赤井と彩子は、離脱した将の身体を交代で監視することにした。

意識体の将は、ひたすら待った。送られている何かを見つけるには待つしか手がない。ただしこれはあくまで仮説であって、待ったからといって何かが見つかる保障はない。それでも意識体の将は自分の仮説を信じて待った。

待つこと二時間。それは突然現れた。人の目では見えないが、意識体となった将には、はっきりと確認できる。それはモヤっとした霧状の帯に見える。

「俺の仮説は正しかった！」

意識体の将は、それを見たのと同時に行動を起こしていた。それが消える前に発信者を調べなければならない。心臓に痛みを感じている時間は、毎回五分程度だ。ということは、発信者は五分しか体

力が持たないのだ。

意識体の将にとっての五分は、肉体のときの将の何日分にも相当する。それを調べるには充分過ぎる時間だ。意識体の将は、霧状の黒い帯を辿っていった。千キロの距離だろうが、意識体の将は瞬時に移動できる。

黒い帯の発信者を突き止めるのに要した時間は、わずか一秒もかかっていなかった。意識体の将が辿りついたのは、伊豆の神導子の家だ。そこには神導子と真導子、それに初めて見る行者のような男が居た。黒い帯は、その行者から放たれていた。

意識体の将は行者の意識に潜り込んだ。行者のソウルノートは薄い赤色だ。意識体の将はソウルノートを抜き取り、ソウルワールドで普通のソウルノートに内容を移し変えると行者へ戻した。その瞬間、行者の超能力は消滅した。

真導子も神導子も行者の力を信じていたらしく、自分たちは何もせずにいる。そのために、意識体の将は気づかれずに目的を果たすことが出来た。行者の能力を消した意識体の将は、肉体に戻ることにした。

5―25

「マサルくん、何か分かった？」
目を開けた将に、安心したような表情で彩子が声をかけてきた。
「心臓の痛みの原因をやっつけてきたよ」
「将君、原因は何だった？　やっぱり超能力者だったのか？」
「名前は魔呼人。一見、行者みたいな男で、恐らく何らかの密教に関係している人間だと思います。真導子と神導子が一緒にいたから、たぶん彼女らが僕を倒すために魔呼人を呼んだんでしょう」
「としたら、魔呼人の能力がなくなっても、彼女らがまた能力を戻すんじゃないのか。それだとイタチごっこになるな」
「そうなりますね。彼女らの能力も消さないといけないんですけど、前にも言ったように、消してしまうのももったいない気がするので、話し合ってみます。話してもダメだったら消します。今から行きますけど、今度は三人一緒に行ったほうがいいと思います」
赤井と彩子は頷いた。将は二人の手を掴むと、神導子の家にテレポートした。呪術を終えた魔呼人と神導子、真導子は茶菓子を食べながらお茶を飲んでいた。その光景は、どこにでもいる老人だ。ただし、散髪をして小奇麗な身なりをしていれば。

突如現れた将たち三人に、肝が据わっているといえ魔呼人ら三人は流石に驚いたらしく、湯飲み茶碗からお茶をこぼしてしまった。
「こんにちは。初めまして。突然お邪魔してすみません。僕は中瀬将です。　こちらは赤井刑事さんと友達の彩ちゃんです。魔呼人さん、念を送ってもらってたようですけど、もうその能力は無くなりました」
将の言葉に神導子が驚いたように、かすれたような声で言った。
「なんじゃと！　もしや貴様、魔呼人の能力を消したのか？」
将は返事をする代わりに頷いた。将を見ていた神導子たち三人の

表情が、さっきの驚いた表情から徐々に憎悪に満ちた怒りの表情に変わった。

「中瀬！　貴様、何ということをしたんじゃ！　タダでは済まさぬぞ」

彩子は神導子の発散する怒りの気に圧倒され、思わず将の後ろに下がった。赤井も彩子と同じような想いだ。とても老人と思えない恐ろしいほどの強い怒りの気を感じたのだ。

赤井は神導子の気に圧倒されつつ、将がどう立ち向かうのかが気になった。そんな赤井の心配はどこ吹く風、将は意に介せずといった感じで涼しい顔をして神導子たち三人を見ている。神導子の怒りの気を跳ね返しているとも吸収しているとも見てとれる。まったく動揺していない。

「神導子さん、そう怒らないで話を聞いてください。僕はあなたがたを敵とは思っていません。むしろ僕らに協力してもらいたいと思っているんです」

「ならば、なぜ魔呼人の能力を消したんじゃ？」

「逆に聞きますけど、僕が自分から魔呼人さんに何かしましたか？　何もしてないのに、なぜ魔呼人さんは僕に邪気の念を送ったんですか？　目的は僕を倒すためじゃないですか？　僕は自分から喧嘩を仕掛けたりはしません。ただし、僕や家族や友達に牙を剥いてくる相手は徹底的に叩きます。徹底的に叩くということは、その牙をへし折るということです。言ってる意味は分かりますね？」

「分かった。それでワシらにどうしろと言うんじゃ？」

「無理難題を言うつもりは全くありません。僕の望みはひとつだけです。あなたたちの素晴らしい力を、世のため人のために使って欲しい。それだけです」

「そんなことをして何になる。世のため人のために使って、ワシらに何の得があると言うんじゃ？　ワシが力を授けたヤクザは、五百万円置いていったぞ」

将は彼女らの金銭欲を無くさないことには、自分の意見に納得してもらえない。あるいは自分自身の身体で経験して納得してもらうしかない。そう考え、彩子の力を借りる作戦に出た。

「神導子さん、真導子さん。あなたたちは身体のどこか悪いところはありませんか？　腰が痛いとか、ヒザが痛いとか、目が良く見えなくなってきたとか」

思いがけない将の言葉に、真導子姉妹はためらいながらも口を開いた。

「ワシは高血圧で、骨粗鬆症じゃ。腰も痛い」

「ワシは通風と糖尿病じゃ」

神導子に続いて真導子も言った。

「お二人とも気を楽にしていてください。私があなたたちの悪いところを治してあげます」

彩子は言いながら二人の肩に手を置いた。そして目を閉じると治癒のエネルギーを二人に注ぎ込み始めた。将には見えている。ソウルワールドからのソウルエネルギーが、彩子を通じて真導子と神導子に注がれているのが。

ソウルエネルギーの治癒能力は、齢百年を超えているのではないかと思われる二人に、凄まじい効果をもたらした。彩子がわずか三十秒ほどエネルギーを注いだだけで、二人の身体の異常は完璧に治癒したのだ。

それどころか視力や聴力も良くなっていた。自分では気づかなかった悪い部位までが完治したのだ。こんなに清々しいというか、身体が軽くなったのは記憶にないほど昔のような気がする。神導子と真導子はそんな気持ちになった。

5－26

「二人とも今の正直な気持ちはどうですか？　彼女は難病も治せる治癒の能力があります。現代の医療技術でも治せない病気も治せます。医者に見てもらうと治療費を取られますが、彼女は無料です。彼女は病気を治した人たちから、ありがとう！　と言ってもらうだけで何の見返りも期待してないし、要求もしません。心から出たありがとう！　の言葉は、何にも替えがたい最高のお礼だと思いませんか？　僕が思うには、今お二人の身体の調子は、一番元気で体力のあった十代の頃に戻ったような感じじゃないですか？　彼女の治癒能力は、悪い部位をすべて治しますから。ついでに言えば、彼女にありがとう！　って言いたいんじゃないですか？」

　将の言うことを黙って聞いていた二人の顔から憎悪や怒りの表情が消え、穏やかな表情になっていることに赤井と彩子は驚いた。

「中瀬。ワシらの負けじゃ。おぬしの言うとおり、その娘にありがとう。と言いたい。生まれて此の方、こんな気持ちになったのは初めてじゃ。おぬしの言いたいことが良く分かった。ワシらも、ありがとう。の言葉を聞きたい」

　この少年は、金銭欲、憎悪、怒りの業火が渦巻いていた神導子姉妹の荒んだ気持ちを、綺麗な色とりどりの花咲く春の花畑に変えてしまったのだ。それも、超能力を使わずに自分の想いを口にすると言う方法で。

「魔呼人、おぬしもやってもらえ」

　神導子の言葉を合図に、彩子は魔呼人にも同じようにソウルエネルギーを注ぎ始めた。一瞬とまどっているように見えた魔呼人だったが、一分も経たないうちに、至福の時を満喫しているかのような穏やかな表情に変わった。

「ありがとう」

小さな声だが魔呼人がポツリと洩らした。彩子はその言葉に鳥肌が立った。魔呼人の心から出た正直な言葉が、感動というか喜びというか、強烈なモチベーションの高まりを彩子に与えたのだ。彩子はかつて、これほど気持ちを昂ぶらせる、ありがとうの言葉を聞いたことはなかった。それが将を苦しめていた魔呼人の口から出たのだ。そのこと自体に彩子は驚いた。

なに？　なんなのこの感動は？　自問した彩子が出した答えは、心から出る「ありがとう」の言葉は、人生を変えるほどの強烈な力を持っているということだった。その力は、将の異次元の超能力以上のような気もするのだった。

「中瀬よ。これからワシらはどうしていけばいいのじゃ？」

「あなたたちは相手の心が読めます。それはテレパシーという能力です。これからも超能力を授けて欲しいと言ってくる人がいるでしょうけど、相手の心を読んで、悪人だったら断ってください。心から人々の役に立ちたいと思ってる人にだけ与えてください。それだけです。もし困ったことや助けて欲しいことがあったら言ってください。僕で役に立てることであれば協力します」

自分の曾孫のような将の考え方、気持ちの優しさに、神導子姉妹は涙を流している。その様子を見ている赤井と彩子は、将が話し合うと言ってたのはこういうことだったのかと改めて納得させられた。

将は神導子姉妹から、今まで超能力を与えた人を聞きだそうとしたが、姉妹の記憶には残っていなかった。人数で言えば、二人合わせて十人ぐらいと言ったが、性別やおおよその年齢すらも覚えていない。はっきり覚えているのは、野崎と山崎組の四人だけだ。

「念のため、お二人の意識に入らせてもらいます。もしかしたら僕が意識の中から見つけれるかもしれないので」

将は二人に幽体離脱しているところを悟られたくなかったので、座禅の格好をして目を閉じ離脱した。これだと念を送っているようにしか見えないからだ。その間の護衛を赤井にテレパシーで頼んだ。

意識体の将は、真導子の意識に入って驚いた。シグナルが変わっていたのだ。そうか！　真導子に超能力を与えてもらうとシグナルが変わるんだ。野崎もそれで変わったんだ。結局、記憶の中から見つけることは出来ず、意識体の将は肉体に戻った。

「これで僕らの用事は済んだので帰ります。皆さんに会えて本当に良かったです。健康に気をつけて過ごしてください。調子が悪くなったら、魔呼人さんに治してもらってください。それじゃあ」

将は魔呼人に治癒能力のソウルノートを与えていた。将は赤井と彩子と共に、赤井の家へとテレポートした。残った三人は肩の荷が下りたのと、爽やかな気持ちになれたことで、心も身体も軽くなったように感じていた。将たちが来た時と今の表情を比べてみると、三人とも百八十度変わっていた。言うまでもなく良い方へ。

第6章　ブリスクラブ

初冬の東京。野崎は夜景の眺めの良いマンションにいた。神戸に住んでいたときと同じように、自分だけの至福のときを満喫するには夜景が欠かせない。野崎のこだわりだ。

野崎は東京でも神戸の時と同じ手口で現金を盗んでいた。テレパシーを使った完全犯罪なので、被害者自体が被害にあったことを覚えていない。だから事件として警察に届けることもない。届出がないから事件にならないのだが、被害者の数は増える一方で、それに比例して野崎の現金も増えていた。

野崎は集めた現金を元手に、ホストクラブの経営を考えていた。テレパシーを使った完全犯罪は完璧だとは思っているが、万が一のことを考え、別の儲け口が必要と考えた末にホストクラブを思いついたのだ。

ハーフではないがイギリス人とのクウォーターの野崎は、甘いマスクとテレパシーで、どんな女性でも虜にする自信がある。唯一のコンプレックスは中学卒業という学歴の低さだけだが、今ではそれすらもテレパシーで解決出来る。相手の考えを読み取ることが出来るので、知識で負けることはない。

野崎の経営するホストクラブは新宿の歌舞伎町にある。東京に移った翌日、野崎は既存のホストクラブを調べて回った。十数件のホストクラブの全容を調べるのに要した日数は、わずか一日だ。テレパシーを使って、ホストと客の頭の中を覗き全てが分かった。その中の一店に野崎は目をつけた。「夢クラブ」という店だ。この店はホストの入れ替わりが多く、固定客がつかないために経営が悪化の一途を辿っている。野崎はこの店を買い取ることにした。

売買契約はすんなりとトラブルもなく済んだ。相手をテレパシーで操るのだから野崎の思い通りになるし、逆らえるものはいない。

晴れてホストクラブのオーナーになった野崎は、店の名前を「ブリスクラブ」に変えた。ブリスは、至福という意味だ。店名を変え内装も一新した。

ブリスクラブにしてから、内装同様にホストも一新した。トラブルは避けたいので近隣のホストクラブからのホストは雇わないし、引き抜きもしない。いわゆる新規採用と、東京以外からの転入者を雇った。

ブリスクラブはオープン早々急激に売上を伸ばしていた。それもそのはず、野崎が客をテレパシーで操るのだから、野崎の思いのままだ。わずか一ヶ月で、歌舞伎町では月間売上トップを占めるまでになっていた。

野崎の甘いルックスも話題になり、ブリスクラブはマスコミに取り上げられるようにもなっていた。髪を金髪に染め薄化粧をした野崎は、ハリウッドスターと見間違うほどの不思議なオーラさえ放っているように見える。実際のところ、ブリスクラブに来る客の多くは野崎目当てだ。

ホストクラブの経営が波に乗り、それに伴い公私とも忙しくなった野崎は、テレパシーを使った犯罪をやる時間がなかった。やる必要もなかった。やるつもりもなかった。

客からの貢物にしても高額のものが多い。その分、見返りを求めてくる客も少なくない。経営が波に乗ると、手に入らないものはないような気になった野崎は、恋人の裕美さえ鬱陶しく思えてきた。裕美との唯一の連絡方法の携帯電話の番号を替えたのも、その気持ちの成すところだ。

野崎のホストクラブが順調に売上を伸ばし始めた頃から、裕美は野崎と連絡が取れなくなっていた。裕美がいつ電話しても、「この番号は現在使われておりません」という、事務的なメッセージが流れてくるだけだ。

裕美は野崎との縁が切れたことを知った。野崎とは最初から住む

世界が違っていたのだと思うと、腹も立たない。この先、二度と会うこともないだろうし、それよりも、会いたいという気持ちが湧いてこないのが不思議だ。最初から本気で好きではなかったのか？自問したが答えを出すつもりはなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1386x/

その少年はマサル

2011年12月13日07時53分発行